

ハンタ遺跡

喜界町文化財調査報告

昭和62年3月

喜界町教育委員会

序

わが喜界島は、新生代第三紀鮮新世の島尻層を基盤に琉球石灰岩、志戸桶層隆起珊瑚礁、砂丘の地層から形成された島です。

本町における埋蔵文化財の最初の発掘調査は、昭和32年九学会によつて行なわれ、荒木農道遺跡、巖島神社（伊実久）貝塚など、いくつかが発見され、縄文後期の土器片（宇宿下層式土器）、石斧、貝器、骨器などが、また喜界高校校庭からは、縄文前期の轟式土器に相似した土器片が出土しています。しかし、当時の出土品は、ほとんど本町には残っておらず、また、その後は先史解明のための調査もなされないまま、今日に至っておりました。

そうした中で、昭和61年度は町教委による先山遺跡発掘、熊本大学によるハンタ遺跡の調査がなされ、大きく前進した年でありました。

ハンタ遺跡の発掘調査については、当初、町教委単独による計画を立てていましたが、その後、熊本大学と町教委の合同調査という形になりました。

熊本大学発掘調査団が、昭和61年7月5日から約2週間をかけて調査した結果、ハンタ遺跡は相当規模の住居跡であり、内容についても今後期待がもたれるようあります。

本書は、その報告書ですが、全容の解明については、今後に待つものが大きいと考えられますので、その保存、調査については、さらに、留意していきたいと考えます。

真夏の炎天下に発掘にあたられた調査団の労をねぎらい、敬意を表したいと思います。

なお、本町では、土地改良事業実施などに伴なう遺跡調査が今後も予想されますので、一層のご理解、ご協力をお願ひいたします。

昭和62年3月31日

喜界町教育委員会

教育長 折田国雄

本文目次

ハンタ遺跡調査報告

一、遺跡の位置と環境	3
二、調査の概要	6
1. 調査の目的と経過	6
2. 層序	13
三、遺構	14
1. 1号・2号遺構	14
2. 3号・4号遺構群	17
3. 5号遺構群	22
4. 6号・7号遺構	22
5. 8号遺構	26
6. 9号・10号遺構	29
7. 11号遺構	30
四、遺物	35
1. 土器・陶磁器・土製品	35
2. 石器	48
五、まとめ	56

図版 63~101

付 喜界島遺跡分布調査報告

一、遺跡の概要	104
1. 近年確認された遺跡	104
A. アギ小森田遺跡	104
B. 前田遺跡	110
C. 川堀遺跡	112
D. 島中遺跡	113
E. 上嘉鉄遺跡	116
F. 上砂遺跡	120
G. 大城久遺跡	121
H. その他	122
2. 周知の遺跡	124
A. 湾天神貝塚	124
B. 総合グラウンド遺跡	126
C. 中里貝塚	128
D. 荒木貝塚	129
二、まとめ	130

図版 149~177

付説 I. ハンタ遺跡出土土器の岩石学的分析	135
II. ハンタ遺跡出土木炭の樹種と植生	139
III. 喜界島における古代製鉄法の存在に関する一考察	143

- 1 八幡社境内小祠
 2 下世の廻瀬庭
 3 伊東久貝冢
 4 大寺久須跡
 5 神代一
 6 アホ小森田遺跡
 7 前田遺跡
 8 上野遺跡
 9 川畠遺跡
 10 伊勢
 11 先内
 12 知萬田・能間
 13 柏原
 14 伊理
 15 ハナク遺跡
 16 島中遺跡
 17 志瀬遺跡
 18 国分寺
 19 関内貝塚
 20 鮎合グランド遺跡

第1図 嘉界島主要遺跡分布図



一、遺跡の位置と環境

ハンタ遺跡は、鹿児島県大島郡喜界町大字西目字半田433番地に所在する。

九州本島から台湾まで東シナ海と太平洋とを隔てて弧状に連なる島嶼群は、南西諸島と呼ばれ、その中部圏は奄美群島で構成される。この奄美群島は北から奄美大島・徳之島・沖永良部島・与論島と並ぶ4島と、大島の東にある喜界島の計5島からなる。喜界島は北東から南西へと細長く、やや長めの西洋梨形を呈し、周囲48.6km、北東から南西までの最長距離は約14kmで、大島の笠利半島と約25kmを隔てて対峙している。

奄美群島の中でも奄美大島は北部の笠利半島を除いて、標高300~400mの峻険な山山が島の大部分を占め、海岸線も沈降的地形のため出入りに富んでいる。平地はわずかに河口周辺にみられる程度である。しかし喜界島は、笠利半島や沖永良部島、与論島と同じ隆起珊瑚礁からなり、概して平坦な島である。

地質的に言えばこの隆起珊瑚礁からなる琉球石灰岩層を表層とし、その基盤層として島尻層がある。この層は主に砂岩・泥岩から構成されており、新生代第三紀鮮新世に形成された。それ以後、隆起が断続的に続き、島の最高所である百之台(224m)にも琉球石灰岩が分布しており、このことは島が200m以上隆起したことを示す。隆起速度は1000年間に約1.5~1.9mであり、しかもこの活動は現在もなお続いている。

隆起活動は海食作用と相まって、喜界島にいくつもの海岸段丘をつくった。この段丘は巨視的にみて4段あり、小規模な段丘を含めれば6段以上みられる。島の中央北側では、比較的高低差の大きい段丘崖が続いているが、島の西側になると、この崖が不明瞭になり、場所によっては緩斜面を呈している。しかし島の中央部南側斜面では、高低差が100~150mもある断崖が早町^{ハヤマチ}から花良治^{ハラジ}まで約6km続いている。この地形は断層の活動によるもので、他の段丘崖とはその成因が異なる。島の最高所百之台はこの断崖を見下ろす景勝の地でもある。

気候は亜熱帯海洋性である。気温は冬でも7℃以下になることはほとんどなく、台風シーズンには毎年平均3.5回の台風の来襲を受け、全島に強風が吹き荒れ、降水量は月間500mmを越えることもある。また冬には強い季節風に見舞われ、最低でも月間100mm前後の降水がある。島には石器の素材としての大形の転石を産する大きな河川

はないが、湧水は案外に豊富で、特に段丘崖の麓において顕著であり、小規模な水田、水芋田などが点在している。

植生は亜熱帯広葉樹が繁茂するが、奄美大島や徳之島での極相としてのシイ林がみられないことは注意を要する。現在、段丘上はほとんど開墾されサトウキビ畑や、一部牧草地として利用されており、広葉樹林が残るのは段丘崖の部分だけである。

今回調査したハンタ遺跡は、喜界島のほぼ中央に位置し、百之台から北へと広がる緩斜面が、崖となって落ちるその肩部にあたる。段差の大きい段丘だけをとると、4段の中の最上段に属し、標高約147mである。遺跡北側の崖の高低差は50mを越え、下の各段丘間の高低差はそれぞれ10m程度であるため、最上段が特に屹立していることになる。現在、調査地点から海までの往復には、この3段丘を登り降りしなければならず、直線距離にしても約2kmである。

遺跡が位置する段丘上は他の段丘と同様に農地改良事業が行なわれ、土地が平坦に均されている。しかし多少の凹凸は残っており、この状況から推定して調査地点は緩やかに起伏する台地上に立地し、北東側には小さな谷が入り込んでいたと考えられる。また崖沿いにある農道は、調査地点よりも若干高くなっているが、これも農地改良時に盛土して造られたものである。

遺跡の周辺に河川はないが、湧水点がいくつか点在する。例えば、遺跡北側の崖下に2ヶ所（鳥の山水源、ウブシンニー）、また遺跡と同じ段丘上で、調査地点から北東へ700m程離れた地点に3ヶ所（ミイガー、ヤネガー、ウィッガー）が知られている。また調査地点の南東方向に、水量の豊富な湧水点があったと言われるが、現在は枯渇している。

島内における湧水の位置は、前述の通り崖下にある。現在の集落はこの湧水を1つの立地条件として、崖を背にした形で存在するものが多い。このことはハンタ遺跡の立地を考える上で、留意すべき点である。

(限部)

註 鹿児島県教育地質調査団『かごしま茶の間の地球科学』 1981年



第2図 調査地付近の地勢

● 遺跡 番号は第1図参照

二、調査の概要

1. 調査の目的と経過

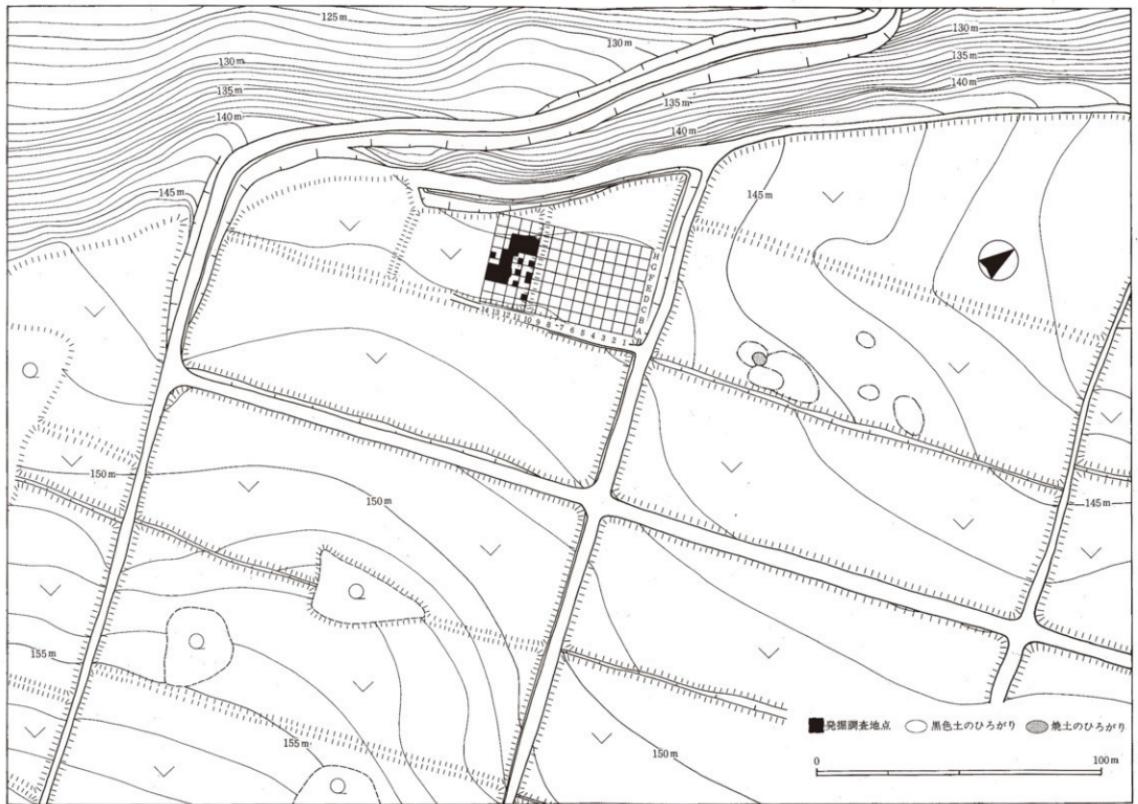
奄美の主な島々では、精粗の差はあるがそれぞれかなりな規模の発掘調査が行なわれている。しかし喜界島はやや例外であった。この島には先史遺跡が豊富であり、かつ、弥生文化の率先した影響が人々の口端にのぼるなど、研究者の関心をひくに十分であったにもかかわらず、1957年の九学会調査の際の試掘程度の調査が行なわれただけであった。^{註1}いくつかの理由が挙げられるが、この島の主目標を農政に置き続けた町長を中心とする行政当局の努力もその一つであった。つまり、文化財に対する緊急の手配を必要とする荒々しい開発がなかったのである。耕地が整理され、農道が敷設されるにつれて、ゆっくりとしたスピードで土器片が注目されはじめ、石器が関心を呼び、遺跡が確認され、本格的な調査の機が熟していった。確認された諸遺跡のうち、最高所にあったのが他ならぬハンタ遺跡である。

奄美群島の先史時代の研究は開発との競合などの理由もあって、海岸部に立地する遺跡を対象することが多かった。中でも、奄美大島の笠利半島東岸の宇宿貝塚群^{註2}、^{註3}徳之島南西岸の面縄貝塚群などは有名である。

これに対し南の沖縄地方では、研究の当初から高所に立地する遺跡が取り上げられ、最近でもシヌグ堂遺跡・地荒原遺跡などが調査され特に集落址の研究に顕著な成果をあげ、砂丘上に立地する遺跡との時期的な相異が考察されたりもしている。北の吐噶喇列島でも標高165mの高所に位置するタチバナ遺跡^{註4}が調査され、弧状に群在する多数の竪穴住居址が検出された。奄美群島では、昨年の玉城調査に際し、初めて徳之島の千間、塔原、鍋窪などの遺跡が特定の理由に基づく高地性の遺跡として析出された。^{註5}^{註6}

以上のような成り行きで喜界歴史研究会から調査のアピールがあり、いくつかの候補地点のうち、最高所のハンタ遺跡が選ばれた。その出土土器が宇宿上層式を中心とすることは、表採品によって推定されていたし、この時期の遺跡は海岸砂丘に立地するのが常であるのだから、上述の趨勢に加えて、調査の意義は十分であろう。

ハンタ遺跡は、甘蔗畑の天地返しによって発見されたものである。農耕による遺跡の破壊は、低速ではあるがやはり破壊である。調査するならば、その学術的目的に



第3図 遺跡地形測量図

加えて、遺跡の意義の公布、周知及び保護態勢の組みあげをいま1つの目標に掲げなければならぬのは当然である。そして、調査の場所が、調査に参加する考古学専攻学生の実習教育の場になるとすれば重疊である。この3点こそが、今回の調査の目的に他ならない。

ハンタ遺跡は、1985年7月、天地返しの際に発見され、喜界町教育委員会を中心とした数次の表探調査で、宇宿上層式を主体とする土器片、石組、炉址が検出された。その広がりから、数戸からなる集落址であることが予想された。教育委員会では、有志・土地所有者の協力を得て遺跡の保存にあたっていた。

調査は、1986年7月5日より20日まで、喜界町教育委員会、土地所有者の安田英次郎氏、坂嶺在住の英啓太郎氏及び付近住民の強力な援助の下に実施された。

まず、発掘予定地の除草を行ない、4m方眼のグリッドを設定した。グリッドには、南東から北西へA・B・C…の符号を付した。北東から南西へは、従来の調査により、遺跡が今回の調査地区より北東側へさらに広がることが確認されていたため、今後の調査を考慮して11からの番号を付した。

初めに、全体の遺構の広がりを把握するため、B-11、C-12、D-13グリッドの東隅を発掘した。D-13グリッドで遺構の一部を検出したため、広がりを考慮してD-13グリッド南隅、C-13・14グリッドへ拡張し、3号・4号遺構群を検出した。さらに、遺構の広がりを考慮しつつ順次拡張した。その結果、C-11、D-11グリッドで1号・2号遺構、C-14、D-14グリッドで5号遺構群を検出した。また、F-11、G-11グリッドで6号・7号遺構、F-12・13、G-12・13グリッドで8号・9号・10号・11号遺構をそれぞれ検出した。

一方、以上の調査と並行して、喜界島内の遺跡の踏査を行なった。

なお、調査への直接参加者及び調査協力者は下記の通りである。

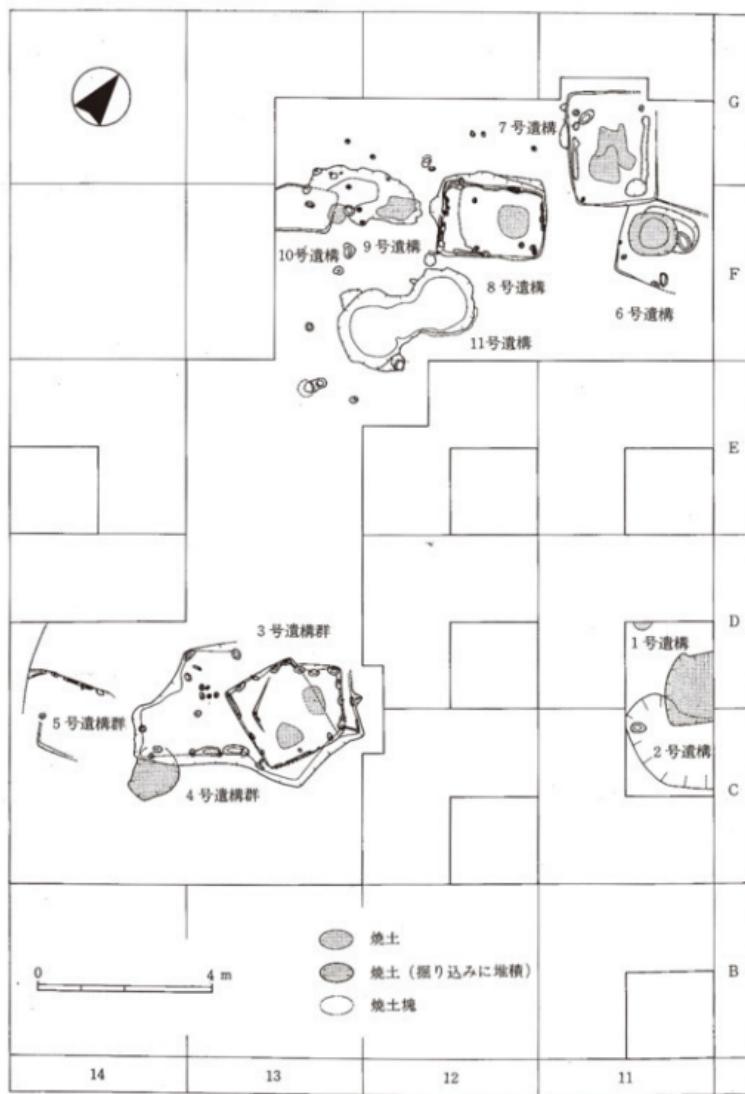
調査参加者

白木原和美 甲元真之 馬原和広

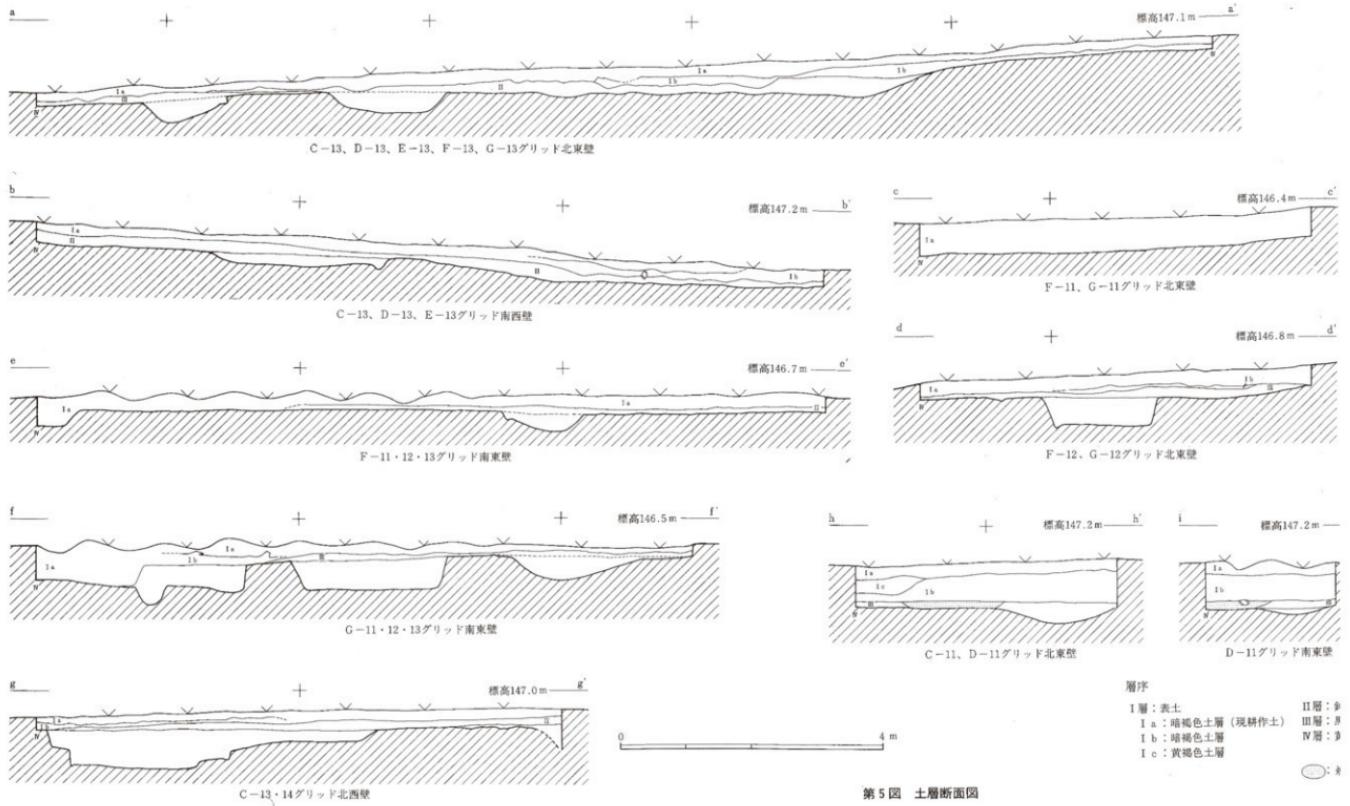
西谷大（研究生） 朴廣春（大学院1年次生）

岡美詠子 木島慎治 藤崎周太郎（以上4年次生） 綱田龍生 岩崎充宏 上田隆

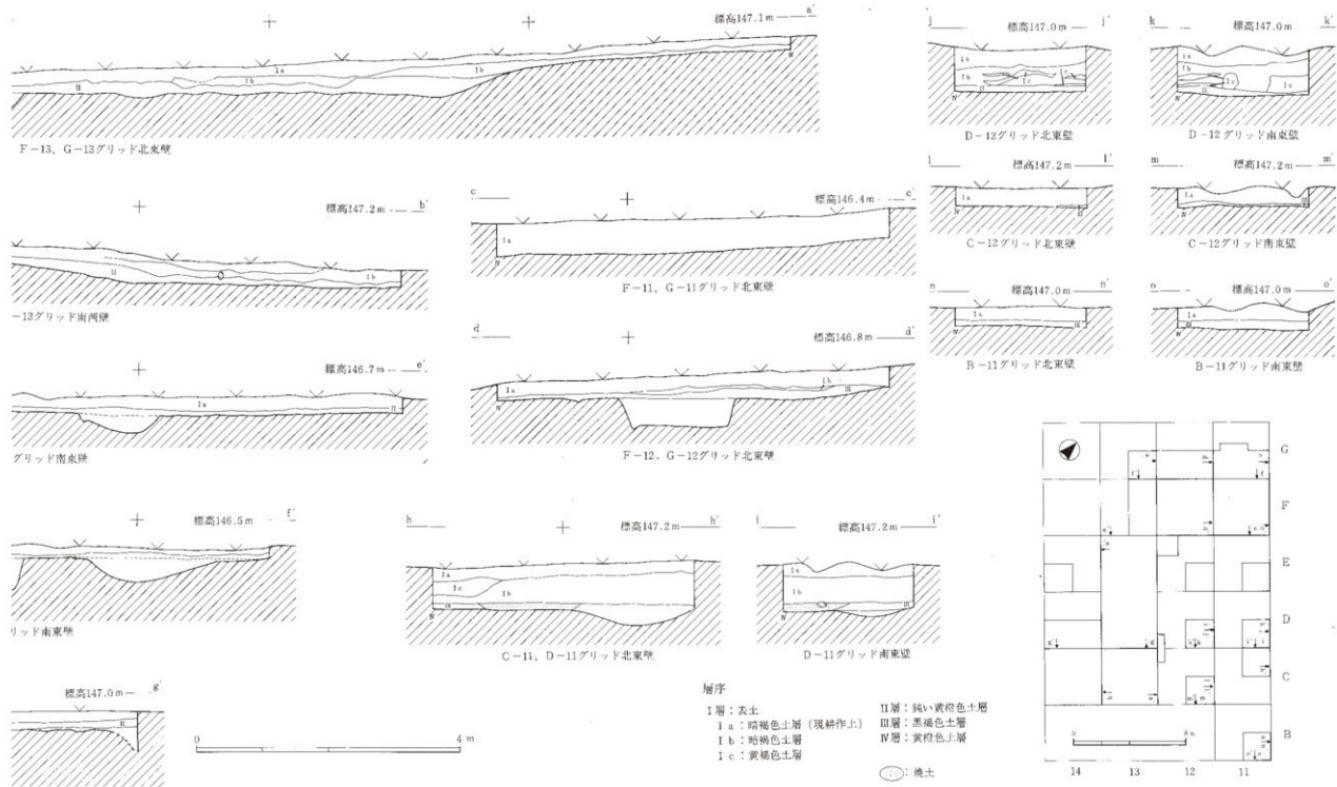
史 国見直樹 隈部敏明 仲秋直樹 野中鉄也 藤井郁 横井久雄 吉内素子（以



第4図 遺構配図



第5図 土層断面図



第5図 土層断面図

上3年次生) 下田順子 徳永淳 野田純子 福本信子 外本亜希 森久直 山下
志保 吉永真砂子 寺田和也 生野博文 (以上2年次生)

調査協力者

安田英次郎氏 英啓太郎氏 前川秀幸氏 中山清美氏 盛山末吉氏 喜界町教育委員会 喜界歴史研究会

各種の出土遺物についての分析及びその方法については、下記の先生方に御指示・
御協力をいただいた。

熊本大学地学教室 高橋俊正教授・(財)島根県八雲立つ風土記の丘資料館 平野芳英
氏 (土器胎土分析) 熊本大学大学院理学研究科 池田敦氏 (石器石材鑑定)

熊本大学教育学部技術科教育 大迫靖雄教授 (樹種鑑定) 熊本大学工学部金属
工学科製鍊工学 砂山寛之助手 (鉄滓関係)

発掘調査は甲元助教授の指示の下に馬原・西谷が全体の指揮をとった。発掘終了後の室内調査は全員で行ない、1月以降報告書の執筆にとりかかった。報告書の編集は
馬原・朴が担当した。
(馬原・仲秋)

註1 九学会連合奄美大島共同調査委員会編 「奄美諸島と周辺地区」『奄美-自然と文化』
1959年

註2 笠利町教育委員会 「字宿貝塚」 1979年など

註3 伊仙町教育委員会 「面繩第1・第2貝塚」 1982年など

註4 沖縄県教育委員会 「シヌグ堂遺跡」 1985年

具志川市教育委員会 「地荒原遺跡・苦増原遺跡」 1979年

註5 熊本大学法文学部考古学研究室 「タチバナ遺跡」 1979年
「タチバナ遺跡(2)」 1980年

註6 熊本大学文学部考古学研究室 「玉城遺跡」 1985年

註7 甘蔗畑の地力を回復させるため、大形の機械によって耕土の上下を反転させる工事

2. 層序 (第5図)

今回の調査地区は現地表面が南から北へ傾斜している。遺跡形成時も同じような地形であったと思われるが、後世の耕作などにより遺物包含層の残存状況は一定でない。特に調査地区北部では、地表から約60cmの深さまで攪乱を受けた部分がある。F-12

グリッド付近では比較的層の残存状態がよく、基本層序であるⅠ～Ⅳ層が確認された。

Ⅰ層 厚さ10～60cmの表層で、北西部で薄く南東部で厚く堆積している。色調・土質の違いにより、Ⅰa～Ⅰc層に細分した。Ⅰa層は暗褐色を呈する現耕作土、Ⅰb層はややしまった暗褐色土層である。Ⅰc層は黄褐色を呈する土層で、ややしまりがよい。

Ⅱ層 厚さ5～30cm程のふい黄橙色土層で硬くしまっているが、他の層の土が混じる部分も見られた。D-13、E-13グリッド付近で特に厚く堆積しており、調査地区北西部とB-11、C-11・12、D-11グリッドでは認められなかった。11号遺構はⅡ層掘り下げ中に検出されたもので、覆土中からいわゆる南蛮焼の小片が出土した。この層からはその他、土器片、カムィヤキ窯系陶片、磁器片、石器が出土する。

Ⅲ層 厚さ5～18cm前後の黒褐色土層で、上面には鉱物に類似するものを部分的に含んでいた。当遺跡の主体となる遺物包含層である。B-11、C-11・12、D-11、F-11・12・13、G-11・12・13各グリッドで残存状態がよい。11号遺構以外の遺構・遺構群は本来Ⅲ層から掘り込まれていたと思われるが、Ⅲ層上面まで後世の削平を受けており、遺構の掘り込みの肩の部分の明確な状況は不明である。特に調査地区南東部、3号・4号・5号遺構群付近ではその削平が顕著である。遺物は、土器片、石器、ごく少量の貝・骨片が出土する。

Ⅳ層 地山である。黄橙色を呈する。

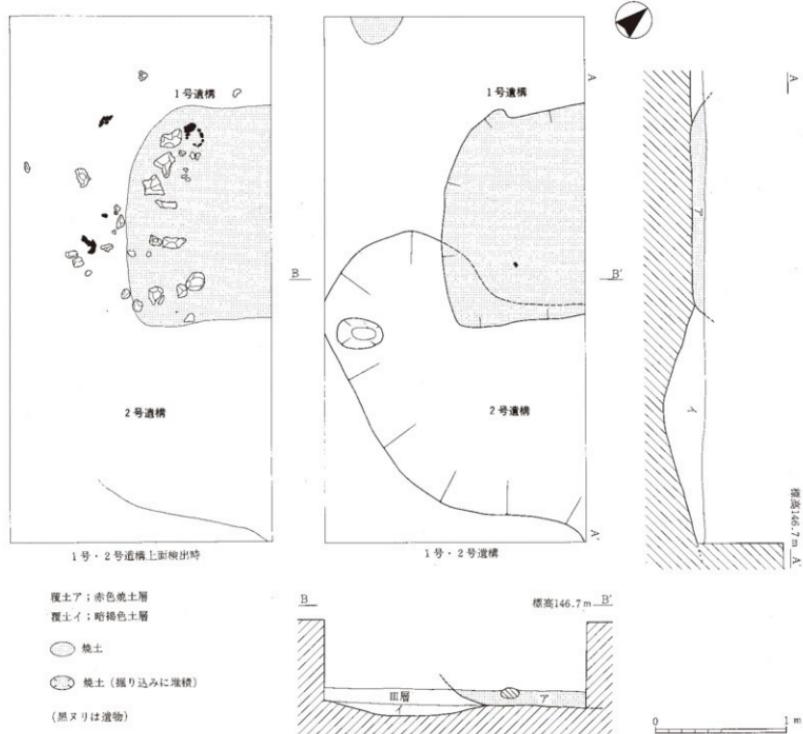
(仲秋)

三、遺構

今回の調査では11組の遺構が検出された。発掘区の東隅に1号・2号遺構、北隅に6号・7号遺構が位置している。1号・2号遺構の西側に3号・4号・5号遺構群が、6号・7号遺構の西側に8号遺構、11号遺構、9号遺構、10号遺構と並んでいる。11号遺構はⅡ層掘り下げ中に、8～10号遺構はⅢ層掘り下げ中に検出された。他はいずれもⅢ層の削平が著しく、Ⅳ層最上面でしか確認できなかった。

1. 1号・2号遺構（第6図、図版3）

1号・2号遺構はC-11、D-11グリッドにかけて検出された。1号遺構は2号遺



第6図 1号・2号遺構実測図

構の北側を切って構築されていて、かつ1号遺構の上面は擾乱によって破壊されている。両遺構の北東側が未発掘であり、全体の形状は不明である。

1号遺構は、平面形が一辺約2mの不整な方形で残存しており、その断面形は深さ約10cmの皿状を呈している。覆土は全体が赤色で粘性の強い焼土で構成され、堆積状況より、この遺構の火床としての使用頻度に数回にわたる増減のあったことが推察される。

遺構の西側に火を受けた幼児頭大あるいは拳大の角・円礫が20個程散在していた。熱して何かに使用されたのではなく、火を受けた石組がばらけたような印象が強い。遺物は土器片のみが出土した。

2号遺構は、平面形が面積約4m²の不定形を呈し、深さ約20cmの断面レンズ状の浅い掘り込みである。遺構の西側の床面からピット1基を検出した。ピットは卵形で長径約35cm、短径約25cmで、断面形は深さ約15cmのU字形である。覆土は暗褐色を呈し、粘性が強く、掘り込みとピットに充満していた。遺物は出土しなかった。

2. 3号・4号遺構群（第7図 図版4）

3号遺構群はC-13、D-13グリッドにかけて検出された竪穴遺構群である。

4号遺構群はC-13・14、D-13・14グリッドにかけて、3号遺構群を取り囲む形で検出された遺構群である。竪穴遺構群とその南端に位置する焼土により構成される。

3号遺構群は4号遺構群を切って構築されている。両遺構群には黒褐色のしまった覆土が堆積していたが、両者の覆土の区別をつけることはできなかった。遺構覆土中からは多量の礫が出土した。ほとんどが角礫であり、中に多数の土器片、石器が含まれていた。その量の多さは、周囲からの流入ではなく、人為を推定させるに十分であった。ただし、遺構を埋めたものか遺構に廃棄したものかはわからない。その時期は、礫群が床面からわずかに浮いているにすぎないところから、遺構が廃棄されて間もなくのことと思われる。

3号遺構群

当遺構群は平面形、床面の状態からみて、3号-①、3号-②、3号-③の3基の竪穴遺構が切り合って成立している。焼土（甲）は3号-①遺構の床面、焼土（乙）

は3号-②遺構の床面からそれぞれ検出された。

3号-①遺構は東-西方向を長軸とする約2.0×1.7mの方形を呈する。東・西・南の周壁は残存するが、北壁は検出できなかった。各壁の下に接して溝状の掘り込みと12基のピット(ピットa~l)が検出された。その床面は遺構中心部に向かってやや傾斜している。溝状の掘り込みは周壁に沿っているが連続しておらず、長さも約20~70cm、幅約5~10cmとまちまちである。深さは約3cm、断面形は、ほぼU字形である。12基のピットのうち、ピットa・b・d~fは、溝状の掘り込みを切って掘り込まれている。周壁沿いに位置するピットa~jはすべて3号-①遺構の中心部に向かって傾斜している。焼土(甲)は当遺構の中心部からやや東壁よりの位置に検出された。平面形は一辺約60cmの隅丸の三角形を呈し、厚さ約4cmをはかり、レンズ状に堆積している。

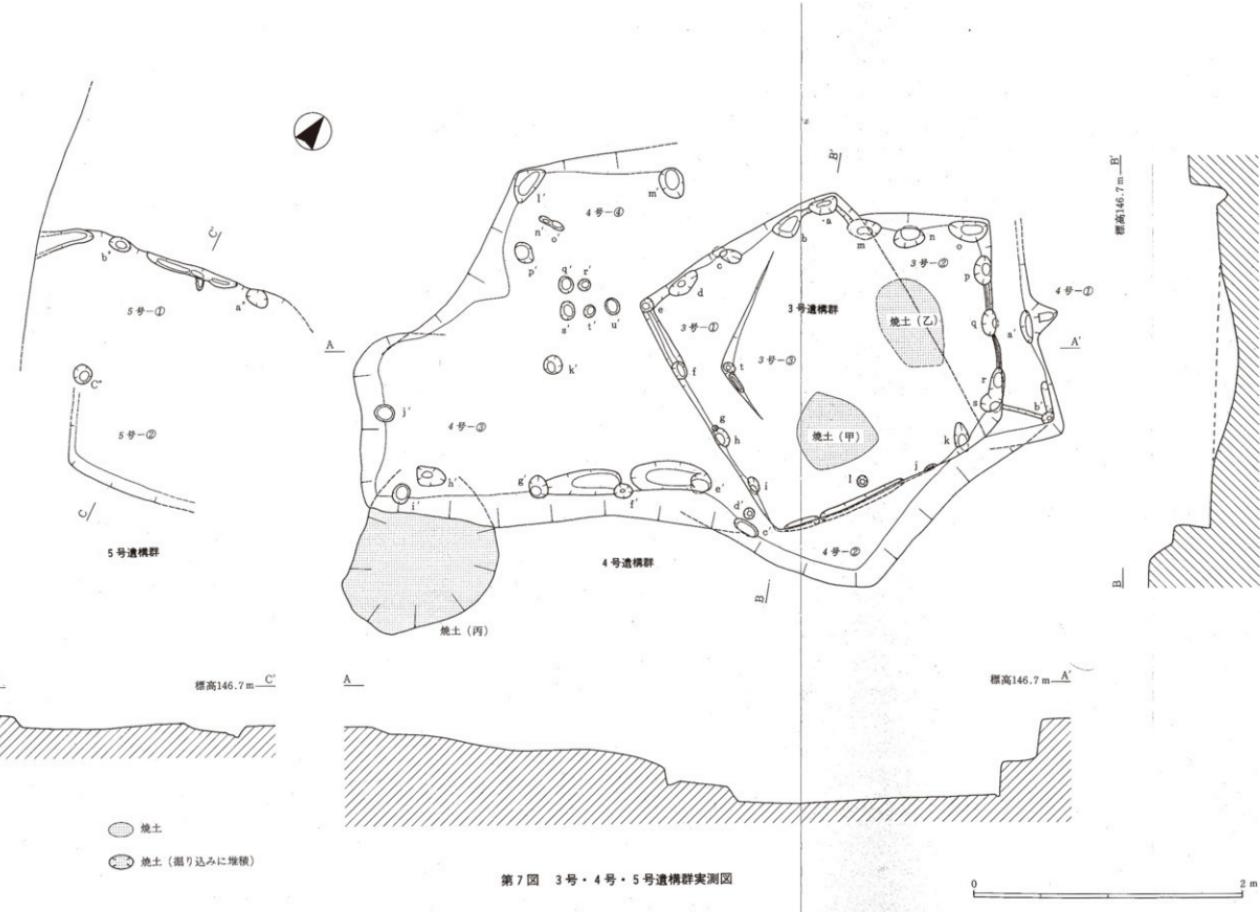
3号-②遺構は、平面形は元来方形を呈していたと推定されるが、3号-①遺構によって切られており、長さ約1.5mの北東壁と、北西壁及び南東壁の一部が残存していた。床面はほぼ平坦で、床面から溝状の掘り込みと7基のピット(ピットm~s)が検出された。溝状の掘り込みは北東壁沿いに不連続に1条検出され、長さ約25cm、幅約3~5cm、深さ約2cmをはかり、断面形はほぼU字形を呈する。ピットはいずれも周壁沿いに位置し、3号-②遺構の中心部の方向に傾斜している。ピットp~rは溝状の掘り込みを切って掘り込まれている。焼土(乙)は長径約70cmの不整橢円形を呈し、厚さ約6cmをはかり、レンズ状に堆積している。

さらに、3号-①遺構の内部に3号-③遺構が検出された。3号-③遺構は3号-①遺構による削平のため、一部が「く」の字形の掘り込みとして確認されたに留まる。床面は若干窪んでおり、周壁沿いに1条の溝状の掘り込みとピットtが検出された。

前述のように、3号-①遺構と3号-②遺構はほぼ同様の内部構造を示している。3号-③遺構も同様の構造である可能性が高い。

3号-①・②・③遺構の各々の関係については、3号-①遺構の床面は3号-②遺構の床面より約15cm高いにもかかわらず、焼土(甲)が3号-②遺構に崩されることなく残存していることから、3号-①遺構の方が3号-②遺構よりも新しいといえる。

3号-③遺構は3号-①遺構によって削平されているので、3号-③遺構より3号-①遺構の方が新しいといえる。ただし、3号-②遺構と3号-③遺構の前後関係は不



第7図 3号・4号・5号遺構群実測図

明である。

4号遺構群

当遺構群は全体として削平がひどく、特にそれが北西部から西部にかけて甚だしいため、明確にできなかった部分が多い。しかし、その全体の平面形から、4号-①・②・③・④の4基の遺構が切り合って形成されたものであることは推定が可能である。

4号-①遺構は平面形は北西部が削平されており、しかも大部分を3号遺構群によって切られ、北東壁と南東壁の一部を残すだけであるが、元来は北西-南東方向を軸とする方形を呈していたと推定される。北東壁はその中央あたりかと思われる部分に三角形の張り出しがみられる。床面はほぼ平坦であり、2条の溝状の掘り込みと2基のピット（ピットa'・b'）が検出された。溝状の掘り込みは北東壁沿いのものと、ピットb'から当遺構中心部へ向かって伸びているものがある。前者は3号遺構群の各遺構と類似しているが、後者は幅が狭く、周壁から遊離している点で異なっている。ピットa'は北東壁の張り出しの直下、ピットb'は周壁の東隅に位置する。

4号-②遺構は4号-①遺構によって切られ、4号-③遺構と切り合っている。元来は南-北方向を軸とする方形を呈していたものと推定される。床面はほぼ平坦であり、2基のピット（ピットc'・d'）が検出された。

4号-③遺構は4号-②、4号-④遺構と切り合っているが、その復元形は南西-北東方向を長軸とし、長辺2.5m以上、短辺約1.3mの長方形を呈すると推定される。床面は、北東方向にやや傾斜し、不連続の2条の溝状の掘り込みと7基のピット（ピットe'～k'）が検出された。他の類似遺構に比して著しく狭長で、2遺構の複合が懸念されるが、南東壁下の溝状の掘り込みやピットの状況では、それを2群に分けることが困難である。

4号-④遺構は特に削平が著しく、平面形も不明確である。床面は北東に向かってやや傾斜しており、10基のピット（ピットl'～u'）が検出された。これらのピットの多くが周壁下を遊離している点では他の遺構と異なっている。

3号遺構群の各遺構と比べて、4号-③遺構は溝状の掘り込みはやや幅広（約25cm）であるが、ほぼ同様の内部構造を示す。他の4号-①・②遺構、また遺構としてはやや曖昧であるが4号-④遺構は異なった内部構造であるかもしれない。

4号-③遺構南側に焼土（丙）が検出された。平面形は直径約1.1mの不整円形を呈している。4号-③遺構を切って掘り込まれており、厚さ約15cmをはかる。レンズ状に堆積しており、底部中央には直径約20cm、15cmの2個の珊瑚塊が据えられていた。

遺物は土器片、石器が出土した。なお、3号遺構群と4号遺構群の遺物は一括して取り上げた。土器片は約4700点と大量に出土しAI・II類、CI類に属するものが多い。石器は破片を含めて83点を数え、うち石皿片が大半を占め、次いで有溝砥石が多い。

3. 5号遺構群（第7図）

5号遺構群はC-14、D-14グリッドにかけて検出された遺構群である。5号-①（北西側）、5号-②（南東側）の2基の竪穴遺構とそれに伴なう溝状の掘り込み、ピットにより構成される。遺構群全体に黒褐色土が堆積していたが、削平が著しく、各遺構のごく一部が検出されたに留まる。また、5号-①遺構を切って構築された遺構の存在が探知されたが、時間上の都合により未発掘に終わった。

5号-①遺構はその北壁が残存しているだけであるが、壁沿いに不連続の1条の溝状の掘り込みと2基のピット（ピットa'・b'）が検出された。その北西端は未発掘遺構により切られている。

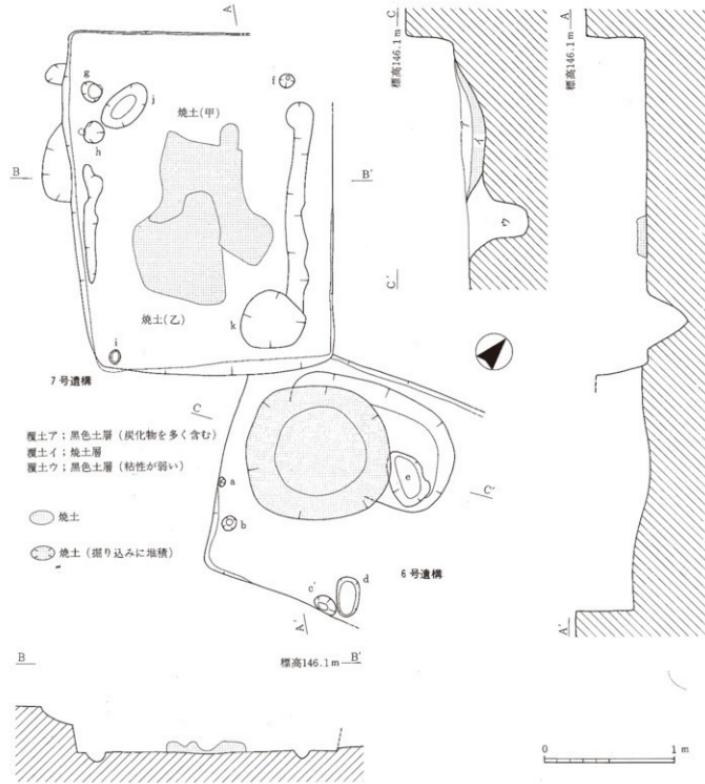
5号-②遺構も全体の平面形は不明確である。南西の隅が残存しており、西壁の推定ライン上にピットc'が検出された。

5号-①・②遺構の関係は、両者の間に掘削機械によると思われる溝が2条検出されるなど著しく擾乱されており、不明である。遺物は土器片、石器が出土している。土器片はAI・II類が多く、石器は敲石、石皿片など5点が出土した。

4. 6号・7号遺構（第8図 図版5～7上）

6号・7号遺構はF-11、G-11グリッドにかけて検出された竪穴遺構である。7号遺構は6号遺構の西側を切って構築されている。両遺構の東側は擾乱を受けていて、6号遺構の北東側一辺と7号遺構の北隅の周壁は破壊されている。破壊の度合は7号遺構より6号遺構の方が大きい。

6号遺構は平面形が一辺約2mの隅丸方形を呈し、高さ約40cmのほぼ垂直な周壁を



第8図 6号・7号遺構実測図

有していたと推測される。遺構は東一西方向の軸を有し、床面はほぼ水平である。床面からは大形の掘り込み 2 基とピット 5 基が検出された。覆土は黒褐色を呈し、粘性が弱く、多量の土器片を含んでいた。

大形の掘り込みは遺構の西側に偏在し、平面形が直径約 1 m の円形のものと、平面形が長径約 1.4 m、短径約 0.8 m の楕円形で、ピット e を有するものの 2 基である。円形の掘り込みは楕円形の掘り込みの西側を切って構築されている。円形の掘り込みに充満していた覆土は 2 層に分かれる。上部層（覆土ア）は厚さ約 10 cm でレンズ状に堆積し、黒色を呈し、多量の炭化物と少量の土器片を含んでいた。下部層（覆土イ）は焼土で、厚さ約 10 cm でレンズ状に堆積し、その中央部が赤色を呈し、粘性が強く、その周辺部は暗褐色を呈し、粘性は強くない。楕円形の掘り込みに充満していた覆土は厚さ約 20 cm のレンズ状の堆積層で、ピット e にも充満しており、黒色を呈し、粘性は極めて弱い。ピット e は楕円形で長径約 40 cm、短径約 25 cm、深さ約 30 cm である。

ピット a～d は、残存状況のよい西壁と南壁に沿って検出された。ピット a～c は、円形で直径約 5～10 cm、深さ約 10 cm であり、ピット d は楕円形で長径約 30 cm、深さ約 10 cm である。遺物は土器片のみが出土した。AI・II 類に属するものが多い。

7 号遺構は平面形が長軸約 2.5 m、短軸約 2 m の隅丸長方形を呈し、高さ約 40～50 cm のほぼ垂直な周壁を有する。遺構は、北西～南東方向の軸を有し、床面はほぼ水平である。床面からは、溝状の掘り込みとピット 6 基、焼土 2 基が検出された。遺構の南隅は、珊瑚塊の小さな地隙を盛土で埋めて床面を構築してある。また、南隅のピット i には柱の基部が炭化した状態で遺存していた（図版 7 上）。なお、7 号遺構は時間不足のため床面検出に終始したことを記しておかなければならない。

溝状の掘り込みは北東壁と南西壁に沿って各一条ずつ検出された。北東壁沿いのものは、ピット k と通じており、長さ約 1.5 m、幅約 15 cm、深さ約 6 cm で、断面形は U 字形を呈する。南西壁沿いのものは、長さ約 1 m、幅約 10 cm、深さ約 5 cm で、断面形は U 字形を呈する。ピット f～i は遺構の北隅（ピット f）、西隅（ピット g・h）、南隅（ピット i）に配されており、円形で直径 10～20 cm、深さ 10～15 cm である。ピット j は遺構の西側に配されており、楕円形で長径約 30 cm、短径約 20 cm、深さ約 15 cm である。ピット k は遺構の東隅に配されており、円形で直径約 40 cm、深さ約 30 cm の漏斗状を呈

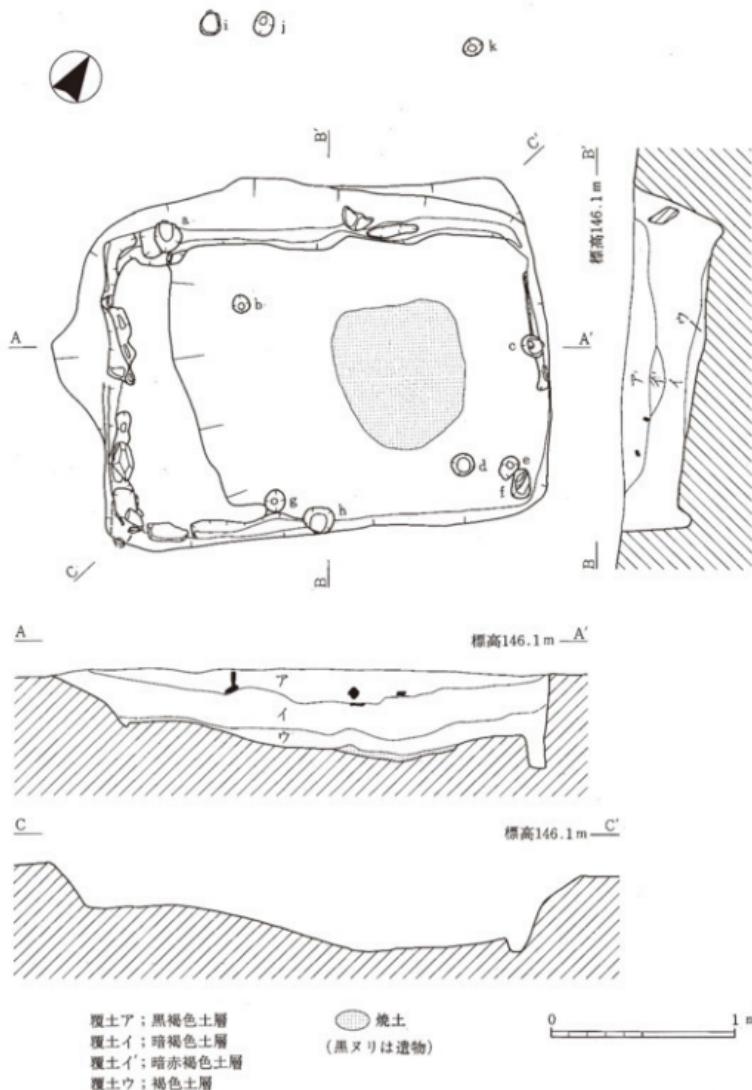
する。焼土は2基検出された。焼土（甲）は床面中央にあって、床面より10cm程立ち上がった構造物を形成している。その上面はほぼ平坦であるが、その南東側は半円形に大きく窪んでいる。したがって、焼土（甲）の上面平坦部の形は、歪な馬蹄形を呈している。焼土（甲）は橙色を呈し、粘性がかなり強い。焼土（乙）は焼土（甲）の南東側から扇状に広がっており、床面より厚さ約5cmでレンズ状に堆積し、明橙色を呈し、粘性は弱い。

床面直上には、焼土（甲・乙）の部分を除いて、地山の色に近い黄褐色土が薄く堆積しており、その上に礫を少量含む炭化物の層が全面に広がっていた。炭化物の層は中央部で厚さ約3cmをはかり、周囲に近づくと薄くなることが認められた。炭化物の中には樹木の部分的な形状を留めたものがある。1つは径約8cmの構造材として使用されたと思われる木材の痕で、南東壁と南西壁に沿って各1本分ずつ検出された。前者の合計長は約1mで、後者では約70cmまで追跡できた。また、前者はピットiの柱の上部である可能性がある。もう1つは指程の大きさの樹枝の群れの痕で、遺構の東寄りに座布団1枚ほどの広がりで検出された。樹枝はその方向がまちまちで隙間なく積み重なっていたと推察された。なお、この層に含まれていた礫は、特に強い火を受けてはいないようである。

炭化物の層の上はいわゆる覆土で多量の礫、珊瑚塊、焼土粒、炭化物を含んでおり、黒褐色を呈し、粘性は6号遺構のものより弱い。礫と珊瑚塊はともに拳大のものが多く、火を受けた跡は認められない。遺構の廃棄後、順次堆積した状況であった。遺物は各層にわたって出土したが、覆土中に極めて多く、炭化物の層と床面からの出土はわずかであった。土器片はAII類、CI・II類に属するものが多い。石器は破片を含めて30点が出土し、うち磨石ないし磨石に類する石器、石皿が特に多い。

5. 8号遺構（第9図 図版7下）

8号遺構はF-11・12、G-11・12グリッドにかけて検出された竪穴遺構である。当遺構は北東—南西方向の長軸をもつ。平面形は長軸約2.6m、短軸約1.9m、深さ約30~50cmの隅丸長方形を呈し、南西壁肩部中央が外に張り出している。床面からはテラス状の台、溝状の掘り込み、ピット、焼土が検出された。



第9図 8号遺構実測図

当遺構内の覆土はア、イ、イ'、ウの4層に分層できた。覆土アは黒褐色土層、覆土イは暗褐色土層、覆土ウは褐色土層であり、いずれも粘性をもち、焼土粒、炭化物を含む。覆土イ'は覆土イの中で焼土粒、炭化物が特に多い部分で、暗赤褐色を呈する。

床面は凹凸が著しく、しかも北西方向へ傾斜している。床面の南西側にテラス状の高い部分があり、その表面は他の床面より凹凸が少ない。この部分は南西壁に沿って、北西壁下から南東壁下まで広がり、長さ約1.7m、北西部幅約20cm、南東部幅約45cmをはかる。

溝状の掘り込みは周壁に沿って検出され、断面形はいずれもほぼU字形を呈する。北東壁・南東壁に沿うものは短く浅く、幅約5~10cm、深さ約4cmをはかる。南西壁に沿うものは2、3の掘り込みの連結によるもので、幅約4~10cm、深さ約5~18cmである。北西壁に沿うものは長さ約1.9m、幅約5~12cm、深さ約4~10cmをはかり、溝自体両端から中央に傾斜している。

ピットは、西側に2基（ピットa・b）、東側に6基（ピットc～h）の計8基が検出された。橢円形を呈するもの（ピットa・e・f）と円形を呈するもの（ピットb～d・g・h）とがある。ピットa・c・hは溝を切っている。ピットaは長径約14cm、短径約13cmで南東方向に傾いており、ピットc・hは直径約11~14cmで遺構中央部方向に傾き、2基とも深さ約10~18cmをはかる。他の5基（ピットb・d～g）は小さく、深さ約5~8cmである。また、ピットfはその床面にもう1つピットを掘り込んだ二重の掘り込みになっている。

焼土は床面中央よりやや北東側に検出された。平面形は長軸約80cm、短軸約70cmの不整形を呈し、約2~5cmの厚さで皿状に堆積していた。

遺物は土器片、石器が出土し、覆土ア・イから出土したもののが多かった。土器はA II・III類、C II類に属するものが多い。石器は破片を含めて23点が出土し、うち有溝砥石が14点出土した。

遺構外北西側からピットが3基（ピットi～k）検出された。覆土はいずれも遺構の覆土と同じである。ピットi・jは長径約11cm、短径約10cm、深さ約5~7cmの橢円形を呈し、ピットkは直径約9cm、深さ約8cmの円形を呈する。

6. 9号・10号遺構（第10図 図版8）

9号・10号遺構はG-12・13、F-12・13グリッドにかけて検出された遺構である。両遺構は切り合い関係にあるが、その切り合い部分では両遺構の掘り込みの肩・床面を確認することができなかった。しかし、断面の観察によると、10号遺構は9号遺構の覆土に掘り込まれていることから、10号遺構は9号遺構に後出する。

9号遺構は北東-南西方向の長軸をもち、平面形は長軸約3m、短軸約1.5m、深さ約20~30cmの不定形を呈すると思われる。壁面及び床面からピット、焼土が検出された。

当遺構内の覆土はア、イ、ウの3層に分層できた。覆土アは粘性をもつ黒褐色土層、覆土イはやや粘性の強い灰黄褐色土層、覆土ウは粘性の強いにぶい黄橙色土層である。いずれも炭化物を含むが、覆土ウはわずかにしか含まない。

壁面及び床面は凹凸がはげしく、しかも床面は北側に傾斜している。

ピットは、当遺構内から6基（ピットa~f）が検出された。橢円形を呈するもの（ピットa・d・f）と円形を呈するもの（ピットc・e）と不整方形を呈するもの（ピットb）とがある。ピットaは長径約19cm、短径約12cm、深さ約16cm、ピットbは一边約14cm、深さ約25cmをはかる。他の4基は小さく、深さ約5~10cmである。ピットeには覆土イが、他のピットには覆土ウが充填されていることから、ピットeは他に後出すると思われる。

焼土（乙）は遺構内北東側から検出された。平面形は長軸約90cm、短軸約60cmの不定形を呈しており、約2~8cmの厚さでレンズ状に堆積していた。遺物は土器片、石器が出土した。

10号遺構は、北東-南西方向の長軸をもつ。平面形は元来、長軸約1.5m、短軸約1mの隅丸長方形を呈していたと推定される。内部構造は不明である。床面は、北側に傾斜している。当遺構内の覆土は粘性をもつ黒褐色土層で炭化物を含む。遺物は土器片のみ出土した。

両遺構から出土した遺物の量は他の遺構に比べ非常に少なく、土器はそのほとんどが微細片であった。

10号遺構の北西側からピットが2基（ピット h・i）検出された。いずれも楕円形を呈し、ピット h は長径約20cm、短径約19cm、ピット i は長径約20cm、短径約15cmである。両ピットの所属時期は不明であるが、これらは10号遺構の覆土に掘り込まれ、床面にまで達していないことから、この遺構に後出するものであると思われる。

10号遺構の北東側から焼土（甲）が検出された。平面形は一辺約40cmの隅丸方形を呈すると思われる。この焼土は10号遺構を切ってはいないが、この遺構の北東壁肩部の上に検出されているので、10号遺構に後出するものである。

この焼土の北側に直径約23cmの円形を呈するピットが1基（ピット g）検出された。このピットは焼土（甲）を切っており、焼土に後出するものであろう。ピット内にはII層の土が充填されていたが、後述する11号遺構との関係は不明である。

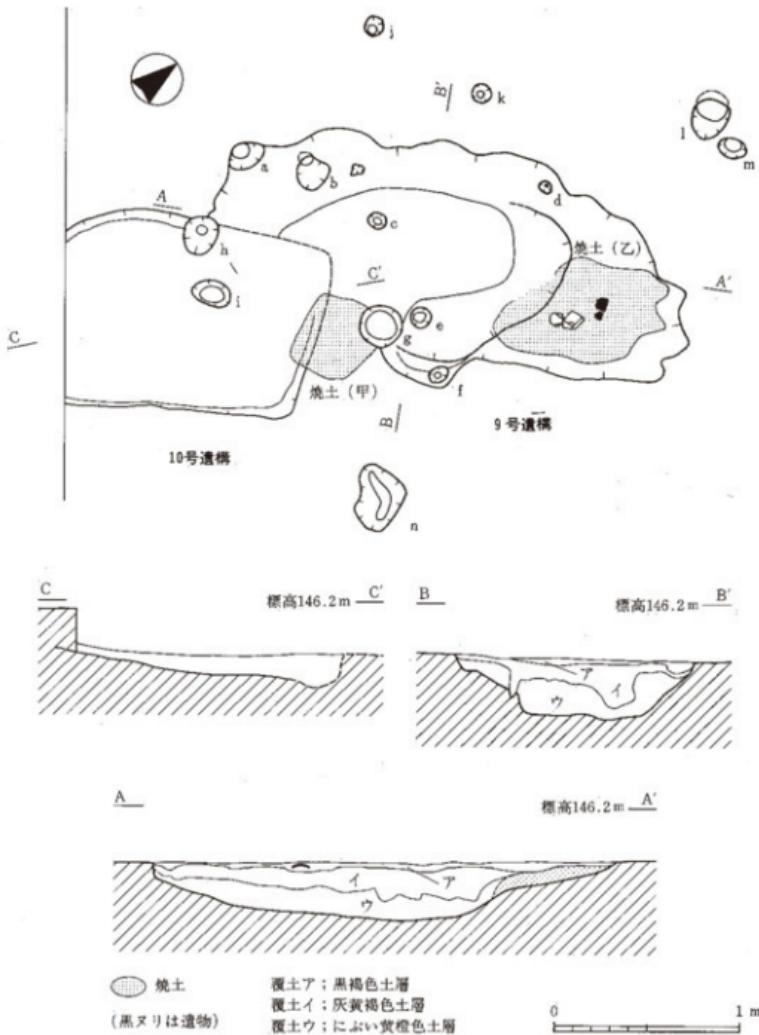
以上のことから時期的には古い順に 9号遺構→10号遺構→焼土（甲）→ピット g となる。

9号遺構の西側から4基（ピット j～m）、東側から1基（ピット n）の計5基のピットが検出された。楕円形を呈するもの（ピット l・m）と円形を呈するもの（ピット j・k）と不定形を呈するもの（ピット n）とがある。ピット l は長径約22cm、短径約19cm、深さ約18cm、ピット n は長軸約25cm、短軸約22cm、深さ約20cmを有する。他の3基は小さく、深さは約8～15cmである。これら5基のピットと9号・10号遺構との関係は不明である。

7. 11号遺構（第11図 図版9）

11号遺構はE-12・13、F-12・13グリッドにかけて検出された遺構である。当遺構は北東～南西方向の長軸をもつ。平面形は長軸約3.2m、南西部幅約1.8m、北東部幅約1.5m、深さ約30～50cmのひょうたん形を呈している。当遺構の南東部からピットが、遺構内及び肩部から焼土塊、珊瑚塊が検出された。

当遺構内の覆土はア、イ、ウの3層に分層できた。覆土アは粘性の弱いにぶい黄褐色土層で、焼土粒を若干含む。覆土イは色・質とも覆土アとほぼ同様であるが、焼土粒、炭化物を多く含む。覆土ウは炭化物を特に多く含み、黒褐色を呈する。これは覆土イ内、床面中央付近及び北東壁直下に確認された。床面中央付近の堆積は、長径約



第10図 9号・10号遺構実測図

50cm、短径約40cm、厚さ約3cmの楕円形を呈する。北東壁直下の堆積は長さ約80cm、幅約4cm、厚さ約1cmで壁に沿って帯状に伸びている。

北東側の壁面は強く火を受けており、鮮やかな赤褐色を呈している。床面は凹凸が少なく、北東・南西側から中央に向けて傾斜している。

焼土塊は覆土内、床面、壁面及び東側肩部から検出された。東側肩部のものは長さ約1.7m、幅約8cm、高さ約10cmをはかる。反対側肩部にもこれと同様のものが形成されていたと思われ、両側から向かい合うようにして中央に張り出し、上部構造をなしていたのであろう。他の焼土塊はこれが崩落したものである。

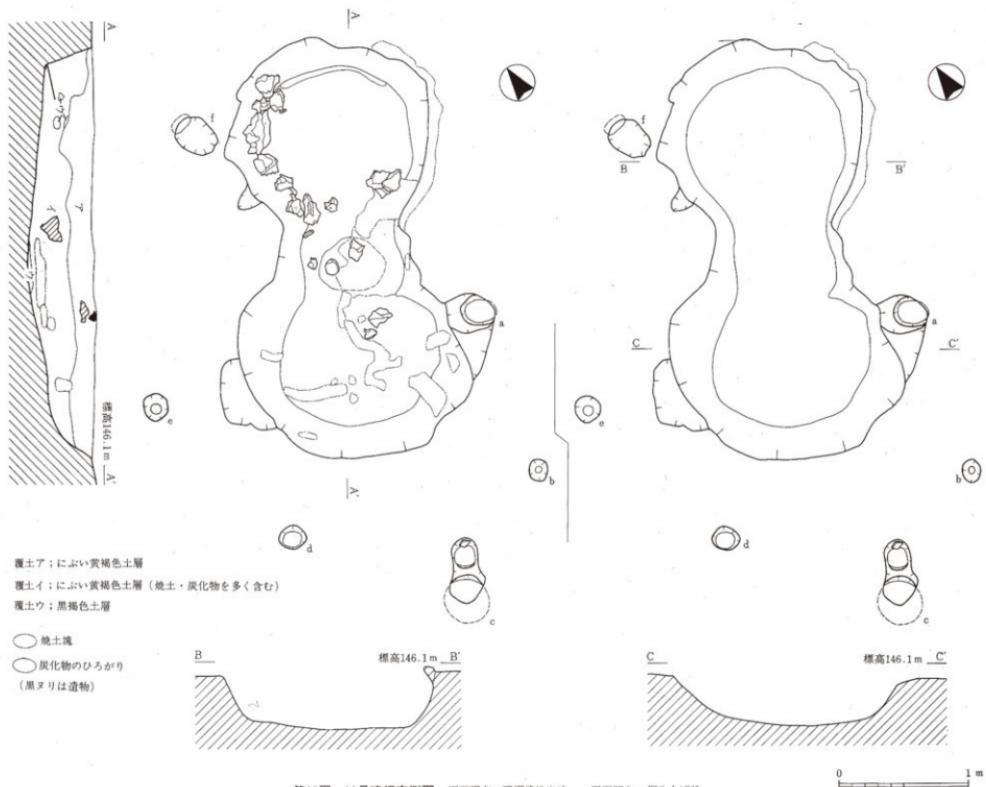
珊瑚塊は、壁に沿って据えられてはいるが、11号遺構に伴なうかどうかは確認できなかった。

ピットは南東壁肩部東側に1基（ピットa）検出された。直径約25cm、深さ約30cmの円形を呈する。

以上のことから、当遺構は大きなかまどのような施設であったと考えられる。例えば北東部の上部構造の上に煮沸用の大きな容器を据え、南西部に人が入って下から火を焚き、時によっては南西部に炭を搔き出したのであろう。上述のように珊瑚塊がこの機能に関係するかどうかは不明である。遺物は土器片、陶器片が出土したが、出土量は極めて少ない。陶器片はいわゆる南蛮焼の小片である。

11号遺構の南側から2基（ピットb・c）、西側から3基（ピットd～f）の計5基のピットが検出された。楕円形を呈するもの（ピットb・d～f）とひょうたん形を呈するもの（ピットc）とがある。ピットfは、長径約35cm、短径約25cm、深さ約40cmをはかり、ピットb・d・eは、それよりも小さく、長径約18～21cm、短径約15～19cm、深さ約15～20cmをはかる。ピットcは、長軸約50cm、深さ約20～40cmで、その床面に2つの掘り込みをもつ。いずれのピットにもII層の土が充填されていた。

今回調査された遺構の特徴をまとめると、III層から掘り込まれていたと思われるもののうち、3号・4号遺構群、6号・7号・8号遺構は堅穴遺構であり、しかもすべてが柱穴と思われるピット、焼土を有している。したがって、これらの遺構・遺構群は、住居址であると考えられる。なお、3号・4号遺構群、7号・8号遺構はいずれも溝状の掘り込みを有しているが、3号・4号遺構群、8号遺構のものは壁直下に構



第11図 11号遺構実測図 平面左; 理層発出時 平面右; 墓上後

築されており、7号遺構のものは壁に平行に走っているが、壁直下ではなく、前者とは性格を異にすると思われる。1号遺構は炉であり、住居址の一部であると考えられるが、断定はできない。また、2号遺構との関係は不明である。5号遺構群は溝状の掘り込み及びピットの配置状況が3号・4号遺構群、7号・8号遺構のそれと類似しており、住居址の可能性をうかがわせる。9号・10号遺構の性格は不明である。なお、11号遺構は前述のように大きなかまどのような施設であったと考えられる。

(岩崎・野中・藤井)

四、遺 物

1. 土器・陶磁器・土製品（第12～17図 図版10～15上）

土器

発掘面積に比して土器の出土量は多く、約9500点に達する。中でも遺構からの出土が大半を占め、とりわけ3号・4号遺構群に集中している。しかし、土器の大部分は細片であり、器形を復元できるものは少ない。また、器面の風化、磨耗も著しく、調整方法の判明するものはわずかであった。このうち器形、文様などを推定できるものは約400点である。これを器形により下記のように分類し、さらに文様、口縁の形態などにより細分した。

A類：深鉢、及びこれに類するもの

B類：鉢、及びこれに類するもの

C類：壺、及びこれに類するもの

脣部・外耳・底部

また、土器の質（胎土・焼成・色調など）については3種類に大別した。

1種：緻密で、重量感がある。粗砂粒を含むものもある。赤褐色、あるいは橙色を呈し、比較的焼きしめが利いており、硬質である。

2種：細砂粒を含み、1種より硬度・焼きしめとも劣る。橙色を呈する。

3種：胎土は均一で、粒子が非常に細かい。焼成は不良で軟質・軽量である。多孔

質で、橙色を呈する。

以上、3種類に大別したが、これらは分類上の大凡の基準であり、個々の土器で多少の相異がみられる。

A類：深鉢、及びこれに類するもの

AI類 (18~25・27・28・74・80・116・147・173~179)

口縁部に刻目文・刺突連点文を施した2条の突帯を横方向に貼り付け、突帯間に斜行沈線文・綾杉文その他の沈線文を施した深鉢形土器である。平口縁と山形口縁がある。口径は約9~12cm (80・176) である。土器の質は、3種に属するものが大半を占めるが、1種に属するもの (80・147・175・177) もある。

突帯上の文様は、刻目文 (18~20・176) と、刺突連点文とに細分される。後者には刺突連点文が1列のもの (23・28・147・173) と、先端が叉状になっている施文具で施された2列のもの (20・21・27・74・80・175・177) とがある。

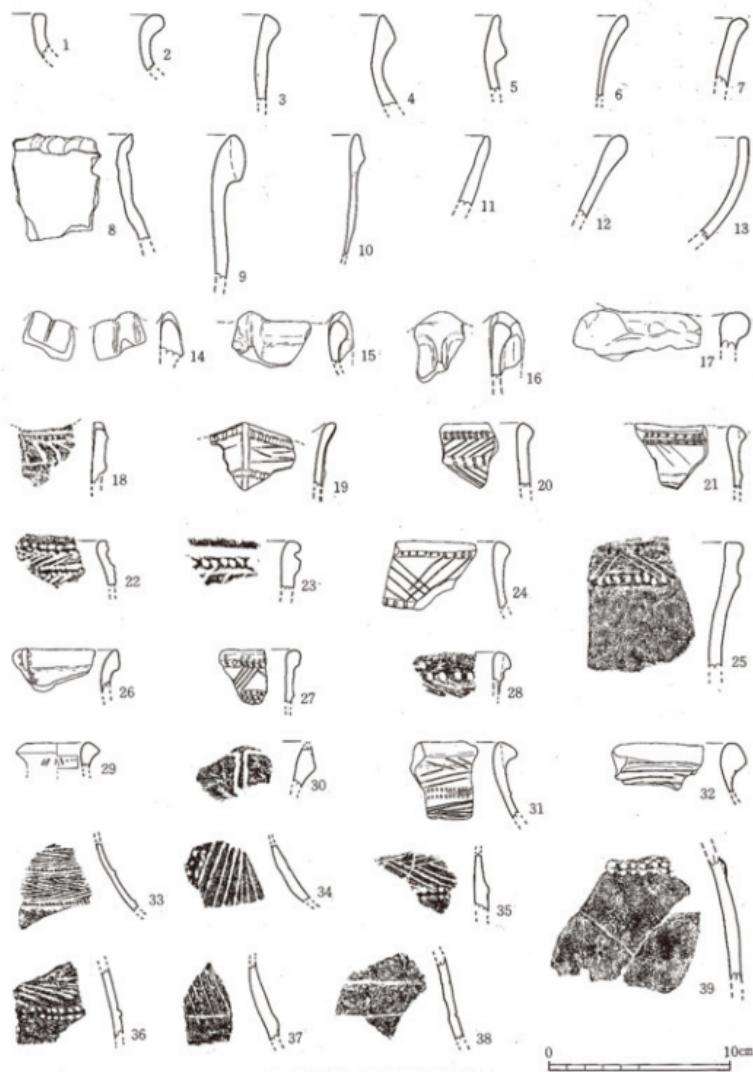
18・19は、山形口縁をもち、2条の突帯間に斜行沈線文 (18)・綾杉文 (19) を施したものである。また19は、山形突起部から縦方向に1条の粘土紐を貼り付けてある。20は、口縁上部の突帯には刻目文を、下部の突帯には刺突連点文を施し、突帯間及び下側に斜行沈線文を施したものである。27・80は、叉状の刺突連点文を施した突帯間に4~5本の斜行する沈線群を鋸歯状に施したものである。さらに27はその下側にも同様に施文されている。74・116・174・176~179は、口縁上部の突帯を省略したものである。74・176・177は、1条の突帯上に1・2列の刺突連点文を施し、突帯の上側には4~9本の斜行する沈線群を鋸歯状に施したものである。174は肥厚した口縁部に横方向に1本の沈線を施文し、その下側には斜行する3本の沈線が施されたものである。178は綾杉文を、179は横方向の沈線文を口縁直下に施したものである。

AII類

口縁部が外反ぎみに肥厚する無文の深鉢形土器であり、口縁断面形によりa・bに細分した。

AII類 a (4・40・45・46・50・60・61・65・66・71・81・92~100・127・135~138 ・153~156・160)

口縁部が外反ぎみに肥厚し、その断面形が三角形を呈する深鉢形土器である。平口



第12図 3号・4号遺構群出土土器実測図(1)

3号・4号遺構群内覆土；1～12・14～29・31～39
3号—①遺構床面；13 4号遺構群ピットe'；30

縁と、山形突起をもつもの（40）とがある。口径は、20～21cmのもの（50・81）と約9.5cmのもの（40・46）とがあり、山形突起をもつものは後者に属する。土器の質は、50・60・81・94・99が1種に属するのを除けば、2種と3種がほぼ同数を占めている。

40は、山形突起をもつ口縁部であるが、この山形突起は貼り付けによるものではなく、口唇部を削り落したもので、突起は4個である。45・50・98は、やや脣部の張るものである。45は2種に、98は3種に属する。

AII類 b (3・17・43・49・62～64・67・82・101～107・119・130・139～141・146
・157～159・161～163・165)

口縁肥厚部の稜がAII類aよりもふく、断面形がカマボコ形になる深鉢形土器である。平口縁と、山形突起をもつもの（17）とがある。口径は、約23.5cmのもの（49）と10～13.5cmのもの（43・130・146）とがある。土器の質は、3種が大半を占め、1種（43・62～64）、2種（17・67・119・140・141）も若干みられる。

17は山形突起を貼り付けるために、口縁部の一部を押し潰している。43・49・63・67・82は脣部が張っている。82は、内器面に条痕がみられる。64は、1種に属するが外器面は赤味を帯びた暗灰色である。

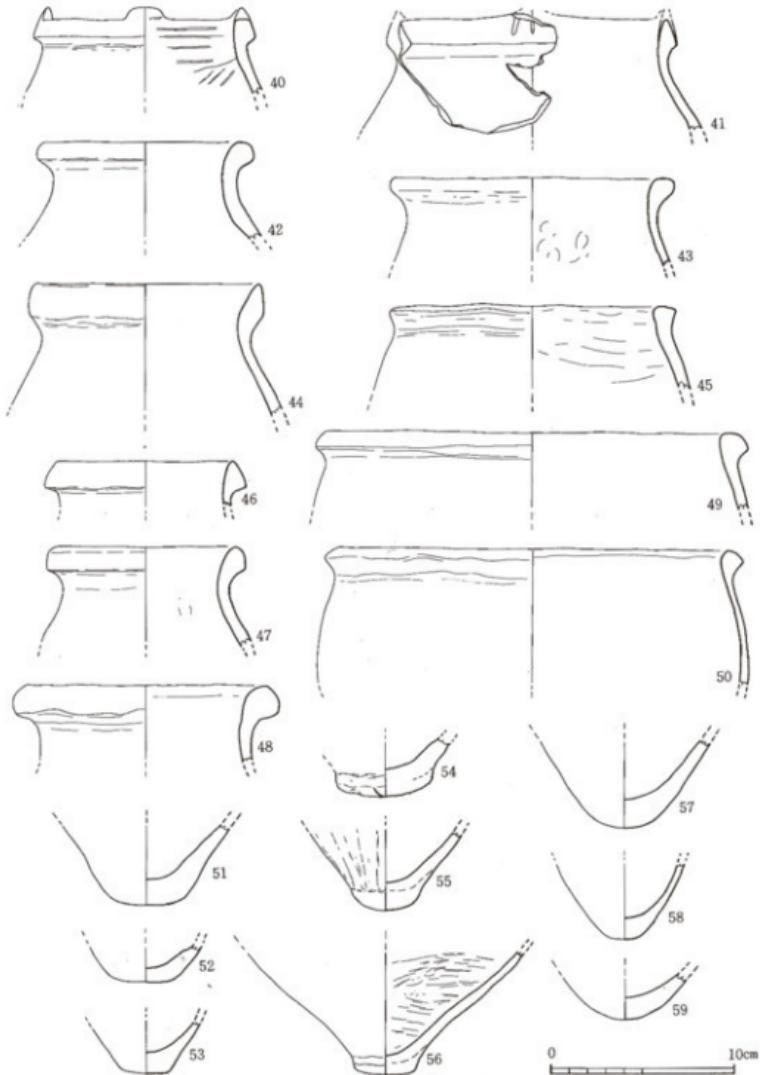
A III類 (5・10・108～115・167)

口縁部の断面三角形の肥厚部が著しく幅広になり、かつ三角形の頂点が下方に垂下したため、全体に上下に長い三角形の口縁肥厚部をもつ深鉢形土器である。各稜がにふく、帶状の肥厚に近いものと、稜が明瞭で口唇部が尖り、口縁下部が稜をなして肥厚しているものとがある。前者には108～112・167があり、後者には5・10・113～115がある。すべて平口縁である。口径を復元できるものはない。土器の質は2種と3種があるが、後者が前者を量的に上回っている。

A IV類 (6・7・69・76・143・164)

口縁部が肥厚しない無文の深鉢形土器である。山形口縁（164）と平口縁とがある。口縁部が外反ぎみのものや、また3種に属するものが大半を占める。

69は、2種に属し口縁部は外傾きみである。164は、口縁部が内反ぎみのもので橙色を呈している。



第13図 3号・4号遣構群出土土器実測図(2)

3号・4号遣構群内覆土；40~44・47~55・57~59

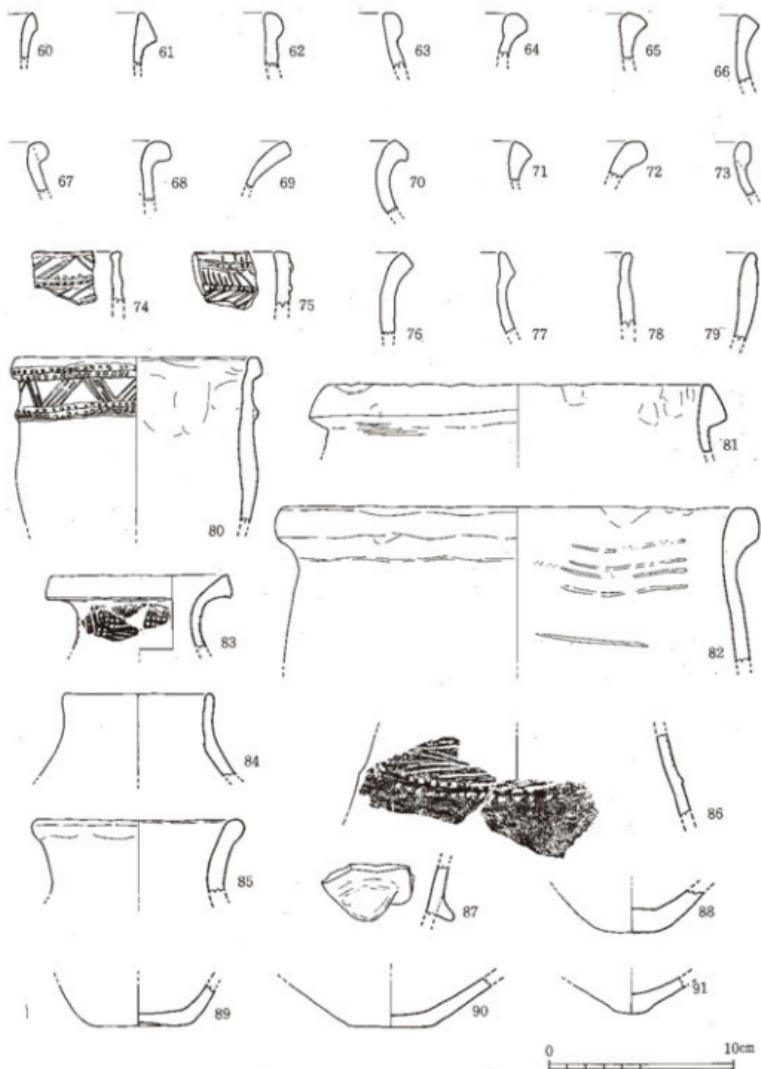
3号—②遣構床面；46・56 4号遣構群ビットp'；45

AV類 (8・9・14~16・30・68・75・77・78・117・118・142・144・148・166・168
・172・181・183・184・187・188)

AI類~AIV類に分類されない深鉢形土器である。

8は、口縁部に幅約1cmの粘土帯を貼付し、外反ぎみに整形したもので、粘土帶には指による整形痕がみられる。1種に属し、外器面は灰褐色を呈している。9は、口縁部が外反ぎみで幅約2cmの粘土帯をもつ。1種に属し、外器面は褐色を呈している。14は、山形突起をもつ口縁部で突起部内・外器面に3本の縦方向の短沈線文が施されていたと思われる。3種に属する。15・16は、山形突起をもつ口縁部で突起部から縦方向に方柱状の粘土紐が貼り付けてある。15は3種に、16は2種に属する。30は、外反ぎみに肥厚し、断面形が三角形を呈する口縁部である。口縁部には沈線による幾何学文が施されている。2種に属し、黒褐色を呈している。68・142・168・188は口縁部が直立ぎみに肥厚し、その断面形がほぼ方形を呈しているものである。3種に属する。142の口縁下部には、調整の際の条痕がみられる。188は、長さ約2.8cmの三日月状の外耳を口端より約1.5cmのところに貼り付けたもので、橙色を呈している。75は、2条の突带上に刻目文を施し、突帶間及び突帶の下側に斜行沈線文を施し、口縁上部には縦方向の短沈線文を施したものである。やや内反ぎみであり、3種に属する。77は、断面形が三角形の口縁部で、2種に属するが、焼成は良好である。78・118は、口縁部が肥厚せず胴部よりも薄いものである。78は1種に、118は3種に属する。144も、外反ぎみに口縁部が薄くなっている。117は、口縁上部の一部分を削って山状にしたものである。166は、口縁部の内器面がカマボコ形に肥厚したものである。172は、断面観察により、口縁部で粘土を内側に折り返して口縁部を肥厚させたことがわかる。色調は褐色を呈している。183は、口径が約10cmで、口縁下部に斜行沈線文を施したものである。184は、口径が、約12cmで、口縁下部に横方向のやや幅広の沈線を1本施し、口縁部下側に1本の縦方向の沈線を施したものである。183・184は、ともに橙色を呈している。

148は、幅の狭い突帶の上に、先端の平坦な施文具で刻目文を施した胴部片で、突帶の上側に1条の刺突連点文を施してある。1種に属し、灰褐色を呈している。181は、胴部片で、1条の横方向の突帶上に刺突連点文が施されている。187は、刺突連



第14図 6号・7号造構出土土器実測図

6号造構内覆土；60~64・74・75・78・79・84・89 焼土内；80
7号造構内覆土；65~71・73・76・77・81~83・85~88・90・91 焼土内；72

点文を施した1条の突帯の上側に斜行沈線文を施した胴部片である。

B類：鉢、及びこれに類するもの

鉢形土器の出土は6点にすぎない。口縁部が肥厚しないものが大半で、胴部の張るもの（13・79・129）と張らずに外傾するもの（11・12）とがある。土器の質は、79が2種であるのを除くと、他は3種に属する。口径を復元できるものはない。

11・129は口縁部が胴部よりも薄いものである。12は口縁部がやや肥厚し、その断面形がカマボコ形を呈している。

C類：壺、及びこれに類するもの

CI類（26・29・31～36・39・83・86・126・128・180・182・185・186）

口縁部から胴部にかけて縦横に粘土紐を貼り付け、その両側に刺突文を施し、その上下左右に、綾杉文や斜行沈線文を施した壺形土器である。口径は、約3.5cmのもの（29）と約9cmのもの（83）とがある。3種に属するものが大半を占める。

26は、口縁部から縦方向に粘土紐を貼り付け、その両側に刺突連点文を施したもので、2種に属する。29は、小形であり、短い斜行沈線文と刺突文とが施されている。3種に属し、灰色を呈している。31は、両側に刺突連点文を施した横方向の1条の粘土紐の上下両側に綾杉文を施したもので3種に属する。32は、横方向の沈線文を口縁下部から頸部に施したものである。2種に属する。83は、しまった頸部に縦横に粘土紐を貼り付け、その両側に刺突連点文を施し、粘土紐間に沈線文を施したものである。126・180は、肥厚した口縁部下にそれぞれ綾杉文、縦方向の沈線文を施したものである。

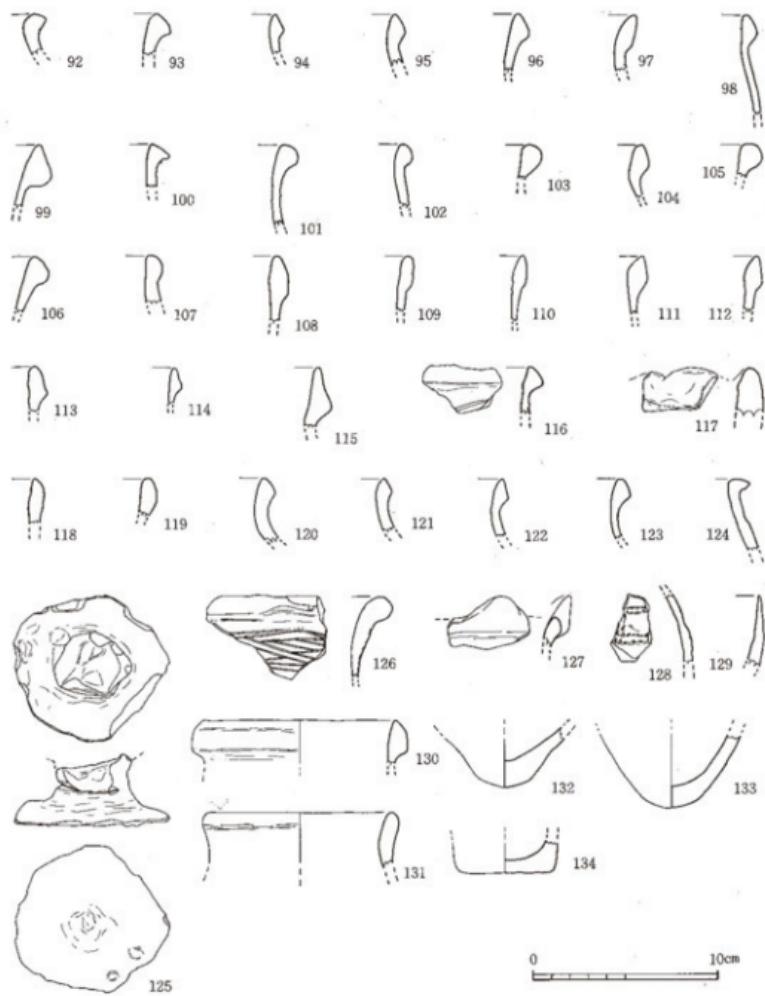
CII類

口縁部が外反ぎみに肥厚する無文の壺形土器である。口縁部断面形により、a・bに細分した。

CII類a（44・47・70・120～124・145・169～171）

口縁部が外反ぎみに肥厚し、その断面形が三角形を呈する無文の壺形土器である。平口縁のみで、口径は約9.5～12.5cm（44・47）である。土器の質は、2種と3種が大半を占める。

121は、頸部が直立ぎみのもので、1種に属する。123は、3種に属し、口縁部は黒



第15図 8号遺構出土土器実測図
8号遺構内覆土；92～134

褐色を呈している。124の口縁肥厚部は、断面観察の結果、粘土帶を貼り付けたものではなく、口唇部で外側に折り返したものであると判定される。1種に属し、外器面は灰赤色を呈している。

CII類 b (42・48・72・73)

口縁部が外反ぎみに肥厚し、その後がにぶく、断面形がカマボコ形を呈する無文の壺形土器である。すべて平口縁で、口径は約10~13cm (42・48) である。2種に属するものが大半を占める。48は1種に属する。72は2種に属するが、口縁肥厚部は灰褐色を呈している。

CIII類 (2・85・131)

口縁部が外反ぎみであるが、ほとんど肥厚していない壺形土器である。口径は約10cm (85・131) で、土器の質は3種に属する。85は、やや口縁部が肥厚しており、黒褐色を呈している。

CIIV類 (1・84)

口縁部が直立し、肥厚していない壺形土器である。84は、口径が約7cmで1種に属する。内器面は凹凸が著しい。

CV類 (37・38・41)

CI~CIIV類に分類されない壺形土器である。

37は、1条の突帯を横方向に貼り付け、その上側に斜行沈線文を施した胴部片である。2種に属する。38は、横方向に2本の沈線文を施した胴部片である。1種に属する。41は、口縁が外反ぎみに肥厚し、その断面形が三角形を呈するものである。山形突起をもち、突起部外器面には3本の短沈線文が施されていたと考えられる。3種に属する。

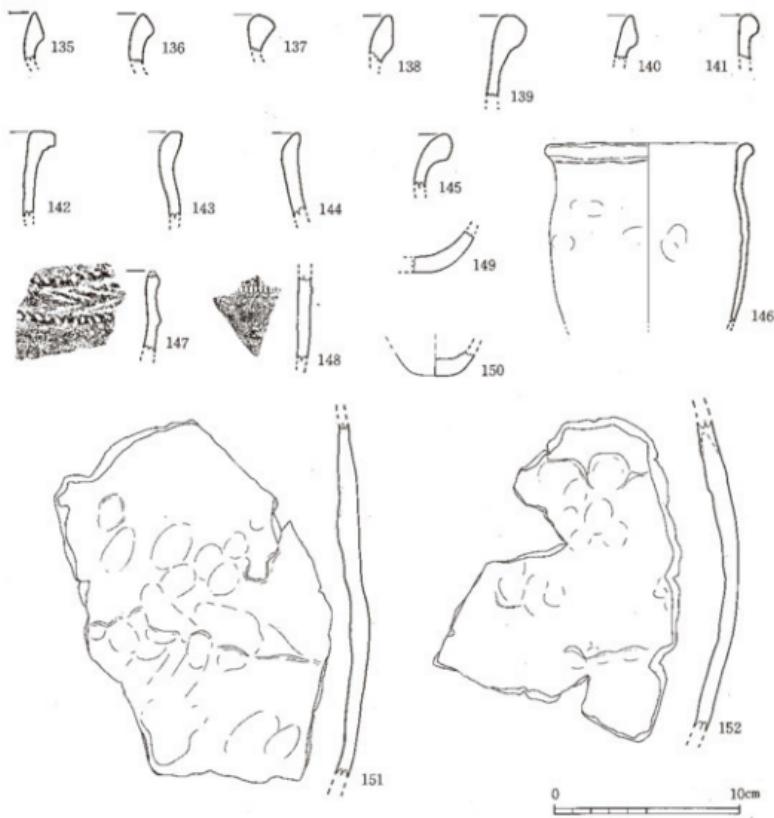
胴部 (151・152)

151・152は、大形土器の胴部片である。ともに3種に属し、灰褐色を呈している。内器面には、指ナデ調整痕や接合痕がみられる。

外耳 (87・188)

87・188は、三日月状を呈する外耳を有した土器で、ともに橙色を呈している。

底部 (51~59・88~91・125・132~134・149・150・189~196)



第16図 1号・9号・10号遺構、3号・5号遺構群出土土器実測図

1号遺構内覆土；142～145・148

3号-①遺構床面；151・152

5号遺構群内覆土；135～141・147・149

9号遺構内覆土；146 10号遺構内覆土；150

底部は、脚台付底部・高台付底部・平底・丸底・乳房状尖底・尖底に分類される。

脚台付底部は1点(125)だけ検出された。底径は約8cm、高さ約4cmで2種に属する。高台付底部も1点(192)だけ検出された。3種に属する。

平底(51～53・88～90・134・149・150・190・191・194～196)は、134が1種であ

るのを除くと、2種と3種とがほぼ同数を占める。89は、上げ底ぎみで、2種に属する。90は、わずかに台の形状を示しており、2種に属する。88は、丸底ぎみである。丸底（59・189・193）は、すべて2種に属する。

乳房状尖底（54～56・91・132）は、2種に属するものが大半を占める。55は、2種に属し、外器面には縦方向の調整がなされている。56は、1種に属し、内器面には横方向の条痕がみられる。132は、3種に属し、外器面には煤が付着している。

尖底（57・58・133）は、ともに2種に属する。

今回の調査では、深鉢形土器が主体をなしており、特にAII類がその中心をなしている。鉢形土器・壺形土器は少なく、特に鉢形土器は6点のみであった。壺形土器は、CI・II類が大半を占めている。

土器の質は、2種と3種が大半を占めている。特に3種は、各器形にわたって多く、過半数近くを占めている。1種は、2・3種に比してかなり少ない。2種は、AII・III類、CII類に顕著である。

土器の大きさは、深鉢形土器・壺形土器ともに大小に大別できる。深鉢形土器では、20～24cmのものと9～14cmのものとが、壺形土器では9.5～13cmのものと3.5～7cmのものとがある。ともに9～13cmのものがその主流を占めている。

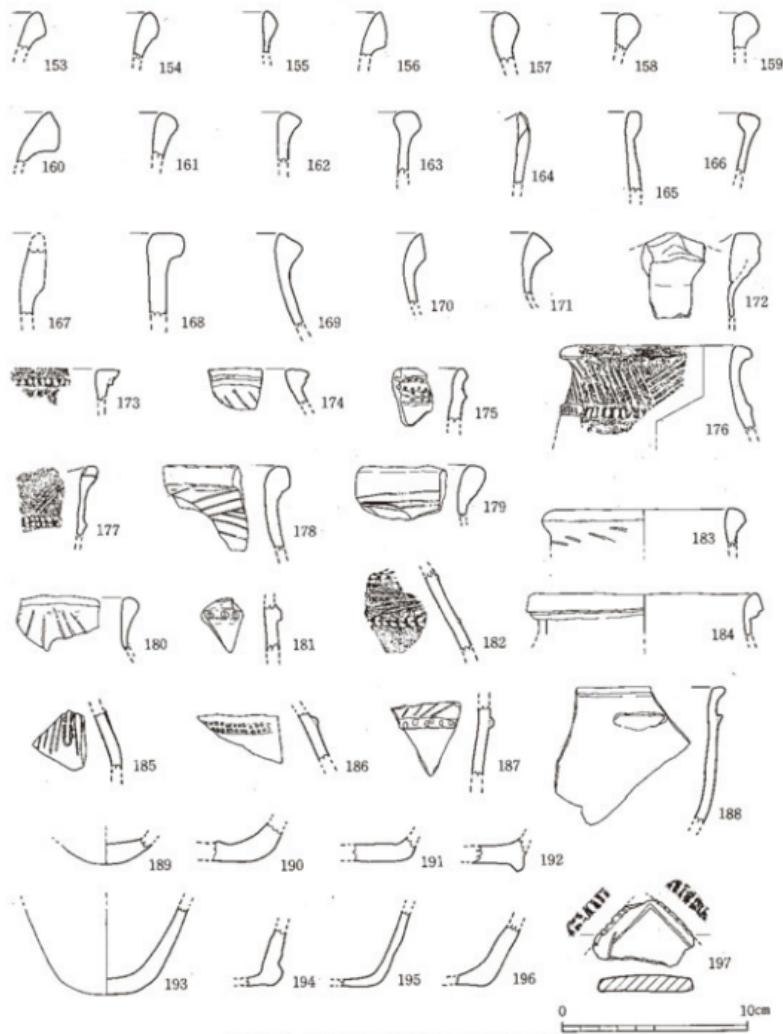
出土土器のうち、AI類にはいわゆる面繩西洞式に比定されるものが含まれる。AII類、CII類は字宿上層式に、CI類は喜念I式土器にそれぞれ比定される。AIII類はカヤウチバンタ式に類似している。

陶磁器

3号・4号遺構群覆土上面よりカムィヤキ窯系陶片が1点出土した。内外器面に叩き目のある胴部片である。器面は灰色、断口は赤褐色を呈している。11号遺構からも陶片が1点出土した。これは、いわゆる南蛮焼の小片である。また、I層より青磁片が1点出土した。これは、口縁部がカマボコ形に肥厚しており、碗状の器形をなすと思われる。細片のため、図示しなかった。

土製品（197）

197は、板状の土製品の残部らしく、平面形が1辺約5cmの三角形を呈し、厚さ約1cmである。表面には、側辺に沿って沈線が1本施されており、側面には刻目が5～



第17図 遺構外出土土器及び表採土器実測図

I層；153・154・156・159・160・163・167・175・181・196 II層：192

表採(川村氏・休岡氏・英氏採集分含む)；155・157・158・161・162・164～166

168～174・176～180・182～191・193～195・197

6個施されている。橙色を呈しており、刻目を施した山形突起をもつ土器片を再利用したものと思われるが、用途は不明である。

(横井・吉内)

2. 石器（第18～22図 図版15下～20）

今回の調査で出土した石器（表採を含む）は、破片を含めて石斧12、敲石42、磨石ないし磨石に類する石器60（うちいわゆるクガニイシ12）、石皿44、砥石31（うち有溝砥石29）、所属不明の石器2を数える。数量は多いが、石斧・砥石などの他はほぼ食糧加工工具（石皿・クガニイシなど）に限られ、農耕・漁撈・狩猟などを示す石器は見出されなかった。また石斧以外の石器片は、ほとんど砂岩製であることも特徴的である。なお磨石は細片のため、図示できなかった。

石斧（1～7・9・10）

1～4は両刃の石斧であり、厚手（1～3）と薄手（4）とある。いずれも基部を欠損している。1は凝灰岩製で、全体に丁寧な磨研が施されている。両側縁がほぼ平行し、刃縁は弧をなし、軸線に対しわずかにねじれている。横断面は長楕円形に近いが、側面がやや平たい。刃部の研ぎ出しの角度は急であるが、刃部に欠損が少なく、鋭利である。研ぎあげた後、あまり使用しないうちに折損し、遺棄されたものであろう。正面には横方向、側面には縦方向の擦痕が認められる。2も凝灰岩製で、全体に丁寧な磨研が施されている。両側縁が平行し、刃縁は緩い弧をなす。横断面は凸レンズ状に近い長楕円形であるが、両側面にやや平坦な面をもつ。刃部は、わずかに刃こぼれがみられる程度で、鋭利である。正面・側面ともに縦方向の擦痕が認められる。3は火山岩質の石材を用い、全体を啄彫により整形した後、側面以外に丁寧な磨研を施しているが、側面と正面の一部に啄彫痕を留めている。両側縁は平行しており、刃縁は弧をなす。横断面は隅丸長方形に近い。刃端は磨耗によって丸みを帯びている。正面に縦方向の擦痕が認められる。4は粘板岩製で、全体に磨研が施されているが刃部以外は粗い。両側縁は平行し、刃縁はわずかに弧をなす。両側面が平坦なために、正面との境は稜をなしている。横断面は扁平で中央にやや膨らみをもっている。刃部は両刃であるが、研ぎ出しの角度が表裏一様ではない。石材の性質のためか、薄く剥離して生じた損傷が著しい。



第18図 出土石器実測図(1)

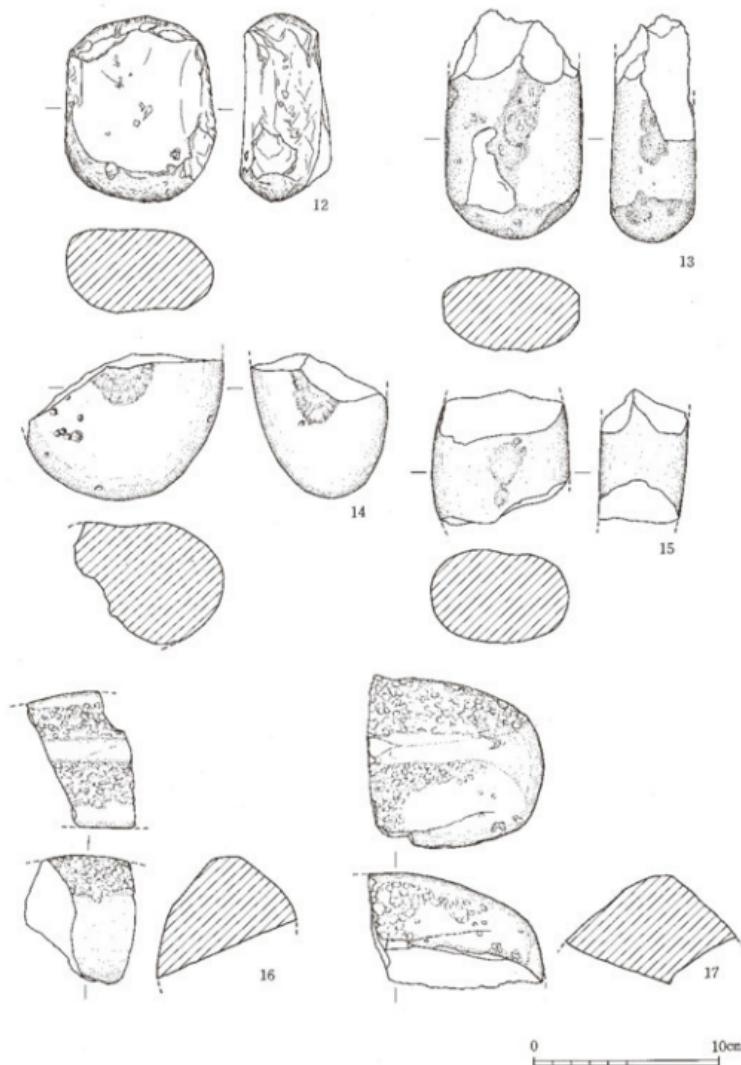
3号遺構群床面；1 3号遺構群内覆土；3・7 7号遺構床面；9
 D-12グリッドII層；10 D-13グリッドI層；2・4・5
 D-14グリッドI層；8 E-12グリッドII層；11 表採；6

5～7は片刃の石斧である。5は凝灰岩製で、全体に丁寧な磨研が施されている。基部は欠損しているが、短冊形の平面形がうかがえる。両側面は平坦で、正面との境に稜をもつ。正面は軽く膨らんでいる。刃縁は弧をなし、わずかに刃こぼれがみられる。縦方向の擦痕が随所に認められる。6は発掘区東の畠地より採取したものである。凝灰岩製で、全体に丁寧な磨研が施されている。基部は半円形を呈し、両側縁が平行し、平面形はかんなの刃のような形をしているが、厚手である。刃縁はわずかに弧をなす。両側面と基部はひと続きのやや平坦な面をなし、図の表面の左側縁に装着痕らしき凹みを有する。横断面は長楕円形に近いが、片側の側面は平坦である。刃部に刃こぼれと縦方向の擦痕が認められる。完形で、重量は約100gである。7は砂質泥岩製で、基部を欠損しているが、短冊形の旧状が想定される。全体に磨研が施されているが、側面以外は粗い。刃縁は緩い弧をなす。横断面は長楕円形を呈する。刃部は磨耗のため銳利さに欠ける。

9は玢岩製の厚手両刃石斧である。両側縁は、基部から刃部に向けて広がり、刃縁は凸出している。両側面の基部よりノッチを有する。横断面は楕円形を呈する。全体を啄彫による整形後、正面にのみ磨研を施してあり、刃部は特に丁寧である。刃端は磨耗と挫屈が著しく、極端に鈍磨している。刃端の慢減後、磨る、もしくは撗ぐために転用したと考えられる。完形で、重量は約280gである。10は砂岩製で、基部のみの残欠である。平面形は長台形で、横断面はやや角ばった楕円形である。啄彫による整形後、全体に磨研を施してある。一方の側面はほぼ平坦で、正面との境は稜をなし、基部より4cmのあたりに軽いノッチを入れてある。長軸に対して斜めに折損している。南西諸島北部圏に多い長さ20cm以上の笏形の石斧であったと推定される。折損後何かに転用しようとしたらしく、折損部を整形しようとした痕が認められる。部分的に薄くはがれているが、火を受けたかどうかはさだかでない。表裏ともに中央に凹みをもち、一時敲石にも転用されている。

敲石（11～15）

11は砂質泥岩製で、打裂によって粗く整形している。磨研が施されているが、自然面も一部にみられる。平面形は隅丸長方形に近く、横断面は長楕円形を呈する。表裏ともに中央に浅い凹みを有する。磨研の後に打裂を加えてあり、再生品であることが

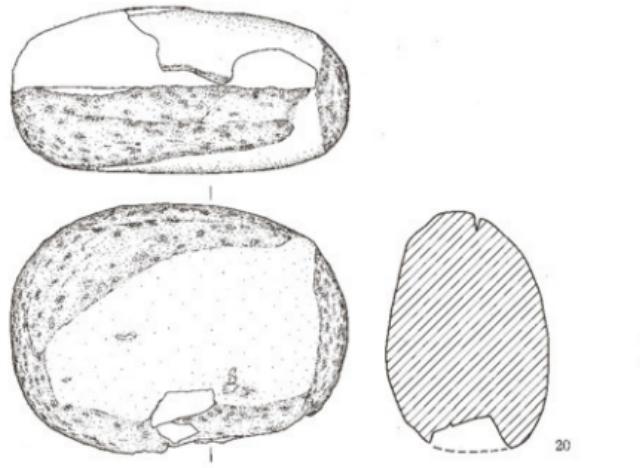
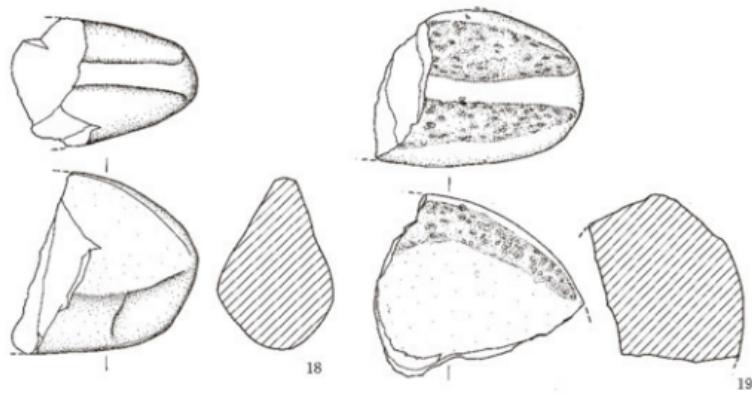


第19図 出土石器実測図(2)
 3号遺構群床面；13 3号遺構群内覆土；14
 7号遺構内覆土；15～17
 D-11グリッドⅠ層；12

わかる。両側面にノッチを有し、旧形は石斧であったと推定される。刃部の破損ないし磨滅の後、敲石に転用されたらしい。重量は約200 gである。12は凝灰岩製で、平面形は隅丸長方形、断面形は扁楕円形を呈する厚手の石器である。自然縁を擂磨用に使用したもので、これと対をなす石器の丸い凹みの中で作動されたものらしく、両端は特有の丸味を維持したまま慢減している。敲石としても使用され、片面に大きな欠陥部がある。重量は660 gである。13は砂岩製で旧形は断面楕円形の厚手の石斧であつたらしく、入念な磨研の痕が残っている。上端を欠損後、打裂を加えて整形しようとした痕がある。下端は丸く擂磨されており、その様相は前述の12に酷似している。正面・側面ともに敲打による浅い凹みをもち、敲石としても使用されている。重量は約800 gである。14も砂岩製で、約半分を欠損している。平面形・断面形ともに楕円形を呈していたと思われる。非常に滑らかで光沢を有するが、磨研によるものではなく自然面のままである。図の表面と側面に、敲打による凹みを有する。15はハンレイ岩製の石器を転用したものである。磨研の痕が残っているが、中央部のみの残欠で、旧形はやや扁平な卵形であったと思われる。横断面は楕円形を呈する。表面中央に敲打による凹みを有し、裏面にもわずかに敲打痕が認められる。

クガニイシ（16～20）

16は砂岩製で、上部の中程の破片である。上面の両側を啄彫によって凹め、凸帯を形成しており、啄彫痕はこの凹みにのみ認められる。他部は非常に滑らかで、光沢を有し、凸帯の上面は特に顯著である。17は礫質砂岩製で、上部と肩部を残している。上面の両側に啄彫痕が顯著で、わずかに凸帯を形成する。啄彫後、全面に磨研を施してある。上面は特に滑らかであり、明確な稜がはしる。形にゆがみがあり、横断面では片方の肩が上がっている。18は砂岩製で、約半分を欠失している。啄彫による整形の後、啄彫痕を消すように磨研が加えられ、わずかにその痕跡を留めている。磨研は全体に及び、凸帯の上面と下辺部は特に滑らかであり、上面には稜がはしる。全体は3.5kg程と考えられる。19は礫岩製で、4分の1以上を残している。楕円形の転石を利用し、上面の両側を啄彫により凹めてあるが、凸帯部を形成する程ではない。他部は自然面のままである。残存している部分で約3 kgあり、旧状はかなりの大形品であったと思われる。20も礫岩製の転石を利用したもので、上面と下面の一部を欠損して



0 10cm

第20図 出土石器実測図(3)

3号遺構群内覆土；20
7号遺構内覆土；18・19

いるが、平面形・断面形ともに楕円形の旧状がうかがえる。図の表面の中央に自然面を残しているが、他部には啄痕が明確である。上面の両側にわずかな凹みをもつて、クガニイシとして扱った。重量は約8kgであり、両手でも扱いにくい重さである。

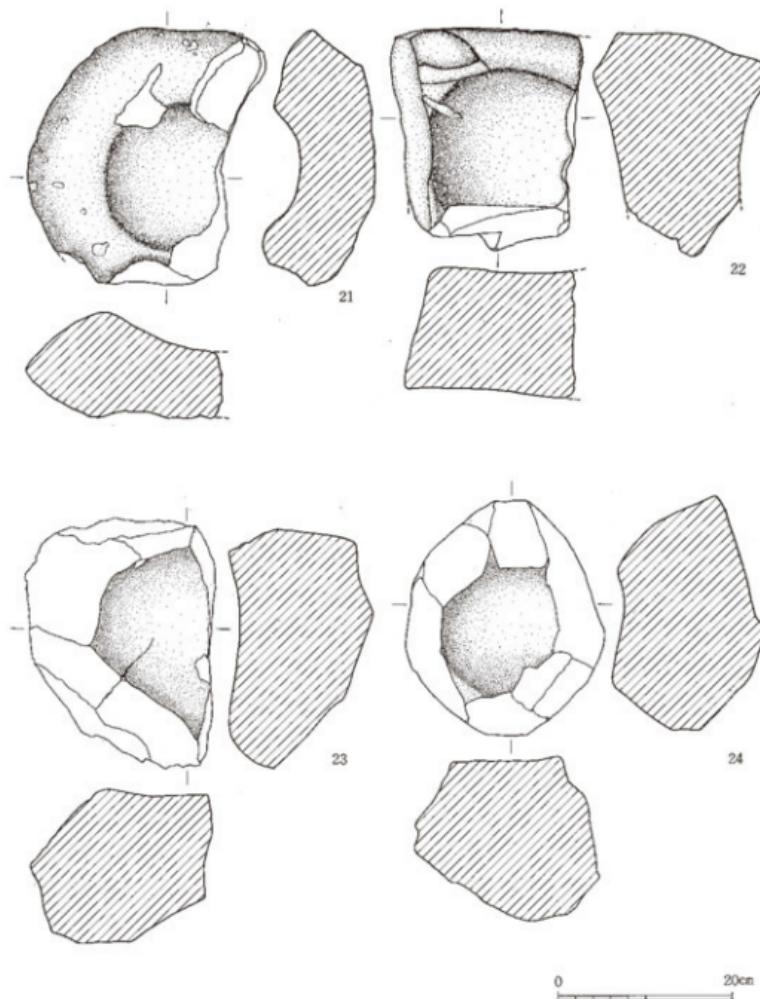
石皿（21～24）

21～24はいずれも砂岩製である。21は3分の1以上を欠損しているが、径40cm程の円形あるいは楕円形の旧状をうかがわせる。10cm程の縁を残し、中央は深く凹んでおり、中は滑らかである。この凹みの径は15cm前後、深さは4cm前後である。上述の12・13の相手方である可能性がある。22は矩形の石皿の4分の1程の破片である。表裏とも深い凹みがあり、図の表面の凹みは径20cm前後、深さ4cm前後、裏面の凹みの径はわからないが、深さは3cm前後である。図の表面の凹みが裏面のそれよりも滑らかである。縁と側面にも磨研が施されている。23・24はともに発掘区北東の畠地より採取したものである。23は周囲を欠損しているため、旧状はうかがえない。凹みは広く、かつ浅い。裏面の2面に磨耗が認められるが、平坦であり、使用面か、据えたための擦れか判然としない。24も周囲を欠損している。図の表面の使用面は浅く凹んでおり、わずかに縁を残している。裏面にも磨耗した1面があるが、平坦なままであり、どのような理由による磨耗か判然としない。

なお、以上の石皿の破壊は耕作機械によるものではない。もともと堅牢なはずの石皿が、なぜこのような破損状況で出土したのか不審である。

砥石（25～31）

25～30はいずれも砂岩製の有溝砥石である。25はほぼ完形であるが、他はいずれも欠損品である。平面形は様々であるが、断面形は25が長楕円形、28が三角形を呈する他は平坦な台形状である。使用面は、29は1面のみであるが、他は表裏両面であり、28は3面ともである。溝は、28の2面が1本ずつであるが、他はいずれも複数の溝が交錯している。多いものは1面に6本を数える。溝の幅も様々であり、約3～9mmである。6mm前後のものが最も多い。溝の深さは約1～5mmである。4mm前後のものが最も多い。溝の断面はいずれもU字形を呈する。26の裏面を除くと、いずれも平坦な面を使用しており、26の表面、27・28の裏面、29の表面は磨研によって平坦にしてある。重量は約25～60gである。



第21図 出土石器実測図(4)

3号遺構群内覆土；21

4号遺構群床面；22

表様；23・24

31も砂岩製の砥石であるが、溝をもたない。平面形は楕円形に近く、断面形は台形を呈する。全体に研ぎによる磨耗が認められるが、特に研ぎの集中した面が4面あり、砥石特有の曲面を現出している。重量は約170gで、有溝のものと比べると重い。

その他の石器（8・32）

8は粘板岩製で、つるはしの先端のような形をしており、基部を欠損している。図の第1面は凹んでおり、特に擦痕が集中するが、その方向は多様である。図の第2面は平坦に近く、左右両方向から斜めにはしる擦痕が多く認められる。他の2面は丸みを帯びているが、ともに縦方向の擦痕が認められる。先端に向かう程表面が滑らかである。木材などの細部加工工具と思われる。ただし、その形がやや謹厳さを欠いているため、例えば1のような厚手両刃の石斧の耳のあたりの残欠を再利用したものである可能性もある。

32は砂岩製で、用途不明の石器である。平面形は三角形に近く、上辺はやや膨らむが、他の2辺は内湾している。横断面は隅丸長方形であるが、下端に向かう程細くなる。縦断面も下端が細くなる。図の第3面上部の欠損部を除いて、全面に丁寧な磨研が施されている。下端に向けては特に顕著である。重量は85gである。

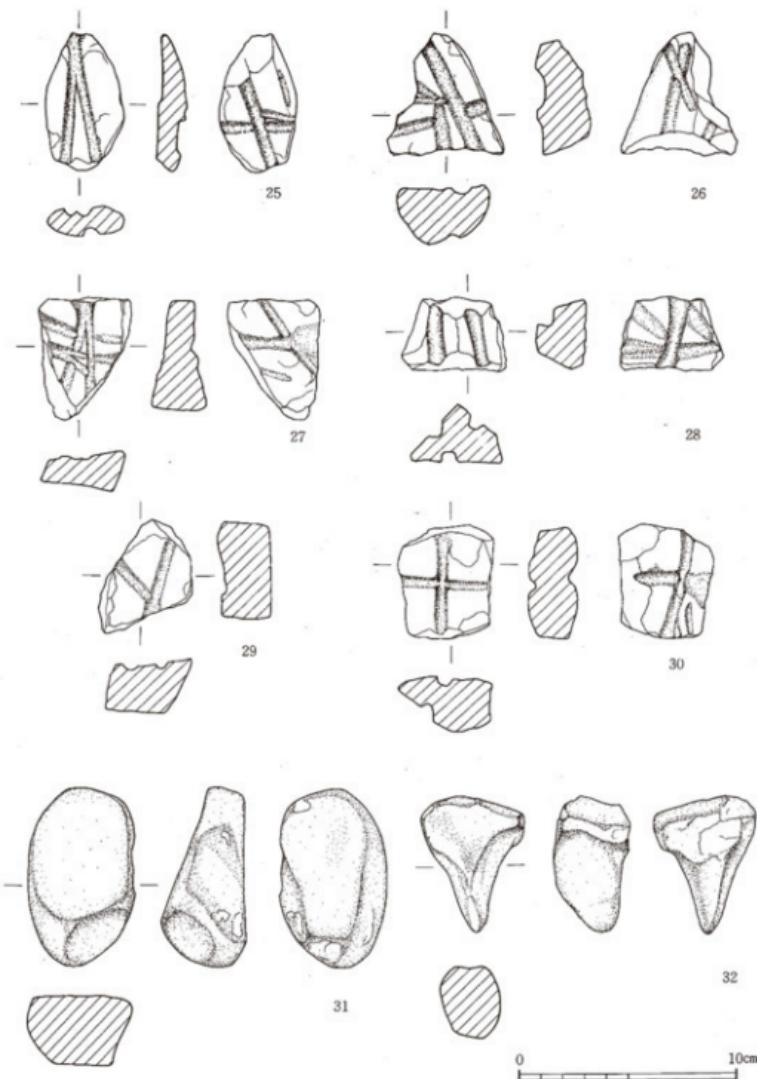
なお、3号・4号遺構群の覆土中より、白雲母塊が出土した。大きさは約4×4cm、厚さ約5mmで板状を呈している。(網田)

註 白木原和美「クガニイシ」『法文論叢』第41号 熊本大学法文学会 1978年

五、まとめ

今回の調査は、喜界では初めての本格的な発掘調査であった。当初の期待通り、宇宿上層式の時期（縄文晩期相当期を中心とする）の住居址群が検出された他、ひょうたん形を呈したかまど状遺構など計11組の遺構が検出された。遺構はさらに広範囲にわたって存在しており、遺跡全体は段丘端に沿って5000m²以上の広がりをもつ集落址であると考えられる。

遺構の主体をなす住居址は、方形ないしは隅丸（長）方形のプランを呈する竪穴式



第22図 出土石器実測図(5)
3号遺構群内覆土；25～29・31
5号遺構群内覆土；32 8号遺構内覆土；30

住居である。ただし、大きなものでも1辺3mを超えるものはない。いずれも竪穴内に焼土と壁に沿った柱穴と思われるピットを有し、さらに壁直下に溝状の掘り込みを有するもの（3号・4号・8号）もある。溝状の掘り込みは、奄美では初の検出例であるが、同様の溝が本土では、板などを立てた擁護壁・化粧壁用の溝、あるいは湿気抜き・排水機能を有する溝として理解されている他、沖縄のシヌグ堂遺跡^{註8}では壁面化粧の積石の基礎用の掘り込みとして報告されている。当遺跡のものもそのいずれかであろうが、一般的にみられるような壁沿いに一周するタイプのものと異なるので、同一に論じるには多少の疑問が残る。

上部構造については、柱穴相互の関係に不明な点が多く、具体的な復元が困難である。しかし、柱穴の比較的残りのよいものでみると、3号-①・②遺構は壁沿いの柱穴がいずれも遺構の中心部に向かって傾いているため、切妻のような構造は考えにくく、寄棟あるいは入母屋系統の地上葺降し屋根であった可能性がある。^{註9}8号遺構も同様に考えることができよう。

ただし、葺降しの屋根とすれば、屋内面積が著しく狭くなる。ハンタ遺跡の竪穴の面積は平均約4m²、広くても5m²程度であるから、1人当たりの必要面積が約2.5～3m²であるとすれば、火を焚いて1人の生活がやっとの状態である。この南島における住居址の狭さは解明すべき問題点の1つであり、サモト遺跡で石組の周辺部を大きく取り込んだ上部構造の可能性が指摘されているものの、今だに定説といったものはない。^{註10}

建築材については、7号遺構の炭化柱が南西諸島特有の亜熱帯広葉樹であるアデクであることが確認された（付説II参照）。この木は非常に硬く曲がりが多いため、現在は建築材としても家具材としても使われることは少ない。ところで、奄美の植生の極相はシイの密林であり、大島も徳之島もその森林はほとんどシイ林である。シイは奄美の建築材の主要なものである。しかし、異常なことに、喜界島にはシイ・カシの類がないのである。伐られてしまったのか自然条件によるのか確かめた研究はないようであるが、pHが高すぎるのだろうという意見を述べる人はいる。7号遺構のアデクの柱は喜界島にもともとシイ・カシの類がなかったことを示唆している。

11号遺構は、薩摩半島の上加世田遺跡^{註4}で、かまど跡とされているものに酷似する。また、上加世田では同じ層位に12～15世紀の遺物を多く含み、大きな時期差はないと

思われる。同様の構造を有する遺構の存在は、両地域のつながりを意味し、非常に興味深い。ただし、製糖関係の遺構か、との印象を語る古の存在は注意を要する。

土器はいわゆる面縄西洞式・喜念 I 式・宇宿上層式を主体とするが、特に切り合い関係が確認された 6 号・7 号遺構でその変遷を大まかに追うことができる。

6 号遺構では、AI 類（面縄西洞式の有文深鉢）、AII 類（宇宿上層式の無文深鉢）、CIV 類（口縁が肥厚しない無文壺）が主として出土した（第14図）。AI 類は 74・80 にみられるように突帯上の施文が、喜念 I 式に典型的な叉状工具による刺突連点文であり、突帯間の沈線も繊細になっていることから、喜念 I 式に移行する直前のものと思われる。これに対し、6 号遺構の後に構築された 7 号遺構は、AII 類、CI 類（喜念 I 式の有文壺）、CII 類（宇宿上層式の無文壺）を主とする。6 号遺構の AI 類は 7 号遺構の CI 類につながると思われ、その結果、7 号遺構においては AI 類が消滅する。また、逆に壺は、有文と無文の 2 種類となり、バリエーションも豊富になる。AI 類から CI 類への変化は、大田布貝塚などで興味ある資料が出土しており、推移の過程が取りざたされるようになってきた。また、壺の隆盛は、弥生時代の変遷の例にみられるように、生活体系の大きな変化を示すとも考えられ、見過せない。

この後 CI 類は、文様の簡略化から無文化へと進み、有文土器自体がなくなってしまうと考えられるが、この段階にあてはまるのが 8 号遺構の土器（第15図）であろう。8 号遺構の土器はほとんどが AII・III 類と CII 類で占められ、わずかに検出された CI 類も文様の退化がかなり進行したものである。また器壁が全体的に薄くなるのも特徴である。このように土器の変遷を考慮すると、III 層から掘り込まれていたと思われる住居址は少なくとも 3 時期に分けて考えることができよう。1 時期における数は今回の調査区内では 1~2 棟といったところであろうか。

土器の質については、胎土分析によっていくつかの興味あるデータを得ることができた（付説 I 参照）。3 種類に分けた土器の質のうち、2 種、3 種の土器の胎土中に火山性ガラスや白雲母⁵、1 種の土器にはカリ長石・黒雲母が検出された。

2 種・3 種に含まれる火山性ガラスは、火山性の土壤が土器作りに使用された可能性を示している。喜界島をはじめ、奄美群島には火山がないものの、アカホヤ火山灰（AH）、始良 Tn 火山灰（AT）がこの地域にも降下しており、近くに臥蛇島などの

諸火山もあり、喜界島自体の粘土にも火山性ガラスが含まれる可能性が十分にある。しかし、白雲母は喜界島には産しないと言われている。だが、2・3種の土器が白雲母を含み、しかも白雲母塊が遺跡から出土したのであるから、必要な資材を移入した上で土器製作が行なわれたことは疑いの余地がない。また1種の土器の胎土から析出されたカリ長石・黒雲母は、花崗岩起源の土壌が使用された可能性を示している。花崗岩も喜界島には産しない。この場合、土器そのものの移入の可能性は否定しきれないが、奄美大島などからの粘土の移入による土器生産が考えられよう。

今回、奄美の土器に初めて胎土分析を加えたが、その結果は大変示唆に富むものであった。今後も調査の度にこの種のデータを蓄積したいものである。

石器は石斧・砥石の他は植物性食糧の加工具がほとんどであり、特に大形の石皿・いわゆるクガニイシが目立った。動物遺体が極めて少なかったことを考え合せると、当遺跡における植物質への依存度は相当に高かったのであろう。また、食糧加工具について、いわゆる敲石とされるものの中に擂磨用と判定されるもの（第19図12・13）があり、それらが凹みが小さくて深い型の石皿（第21図21）とセットをなし、いわゆるクガニイシは凹みが広くて浅い石皿（第21図23・24）とセットをなす可能性があることにも、その作業対象の探索に関連して若干の注意を必要とするだろう。

なお、いわゆる有溝の砥石は今回多量に出土したが、この種の砥石は、從来海岸砂丘上の遺跡で多く検出され、貝製品の研磨に使用されたのではないかとされている。^{註6}我々もその可能性を考えているものであるが、当遺跡の場合、その製品、未製品あるいは原材料が検出されず、その用途についての確証を得ることはできなかった。

以上、各項目にわたって述べてきたが、立地と遺構の性格を合せると、ハンタ遺跡は沖縄のシヌグ堂遺跡に類似している。この2つの遺跡は標高100mを超す段丘端に立地し、湧水点を近くにもち、縄文晩期相当期の方形ないしは隅丸方形プランを中心とした竪穴構群を有することなど、多くの共通点があげられよう。しかし、こと食物残滓に関しては、シヌグ堂遺跡には、貝・魚骨・獸骨が遺構内に豊富で、崖下には貝塚も形成されているのに対し、ハンタ遺跡にはそれらの残滓が皆無に近く、その集中的な捨場も見つかっていない。この点に関しては、ハンタ遺跡は吐噶喇のタチバナ遺跡に似ている。これらの差異は何によるのだろうか。海との距離をとってもハンタが約2kmで、

徒歩20分台であるから、単純に海への依存度の差に帰するわけにはいかないだろう。

一番の問題は、なぜ、高地でなければならなかったかという点だが、その占地の積極的な理由は不明のままである。初期的農耕の有無といった問題がからんでこようが、食糧加工具が多くなる他はその存在を積極的に証明する遺物は確認されていない。また、同時期に砂丘遺跡を形成した集団との関係から考えるにしても、ハンタ遺跡の土器・石器の原材料の中に、他の地域から海をわたって移入されたと思われるものがあることなどから、少なくとも両者が排他的な関係ではなかったことが推測され、高地に居住する必要性は浮かびあがってこない。最近、奄美の高地性遺跡への関心が高まり、該当遺跡も数ヶ所で指摘されているが、その意味を詰めるについては今少し類例の増加を待たねばならない。

(馬原・朴)

註1 タチバナ遺跡に同様の住居址がある (L.S.16・L.S.17など)。

熊本大学考古学研究室『タチバナ遺跡』『タチバナ遺跡(2)』1979・1980年

註2 千葉県焼山貝塚での1住居址中の遺体数からの推定、埼玉県上福岡遺跡の住居拡張面積からの推定などによる。

註3 熊本大学考古学研究室『サモト遺跡(2)』1984年

註4 加世田市教育委員会『上加世田遺跡-1』1985年

註5 鹿児島市立玉龍高校教諭 成尾英仁氏の御教示によると、これらの火山灰は奄美大島・沖永良部島などでは調査の結果確認されており、喜界島でも当然その存在が予測されるということである。

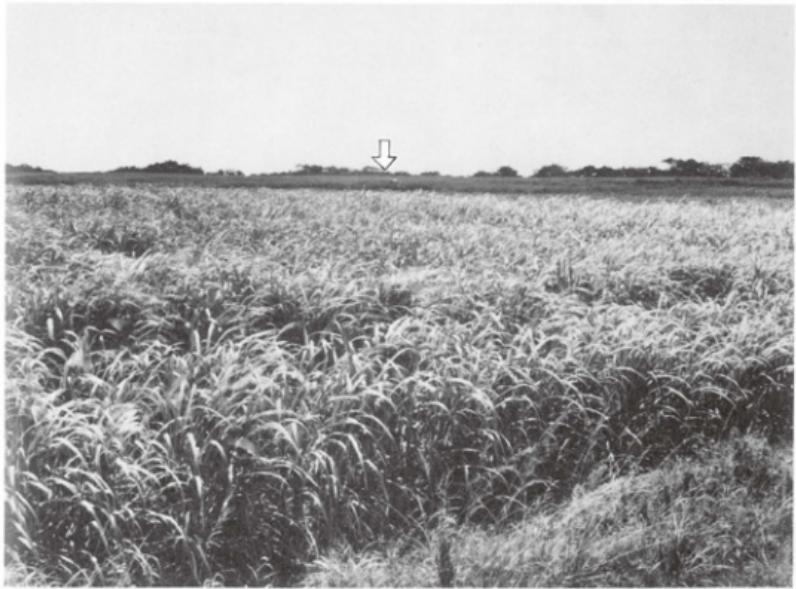
註6 奄美大島の長浜金久遺跡、ケジ遺跡、手広遺跡など

註7 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡』1985年 128頁

註8 沖縄県教育委員会『シヌグ堂遺跡』1985年

註9 南島における初期農耕論としては、多和田真淳氏の「ヤムイモ」「サトイモ」栽培説、国分直一氏の「イモ・アワ」栽培説などがある。

図版1



上：ハンタ遺跡遠景（北西より） 下：同 近景（東より）

図版2



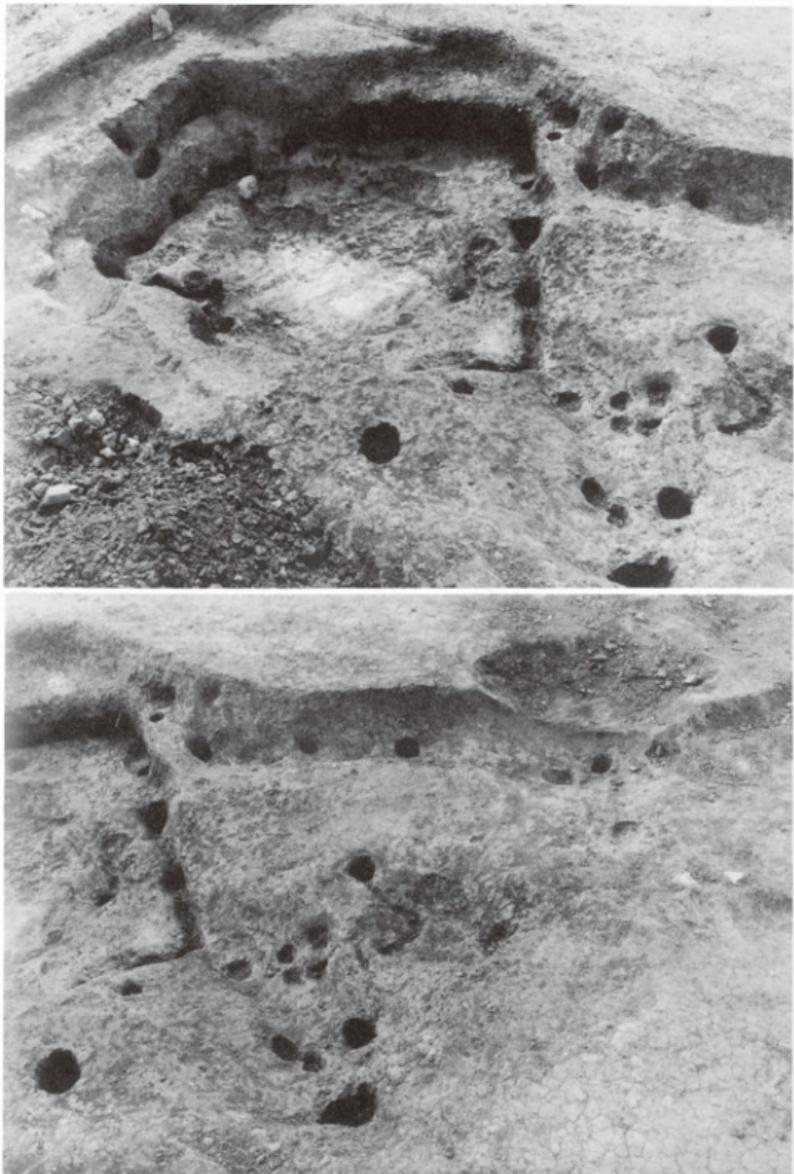
上：ハンタ遺跡現状（南より） 下：調査区全景（北西より）

図版 3



上：1号・2号遺構 掘出状況（北西より）

下：1号・2号遺構 振り上げ後（南西より）



上：3号・4号遺構群北東側 挖り上げ後（北西より） 下：同 南西側 挖り上げ後（同）

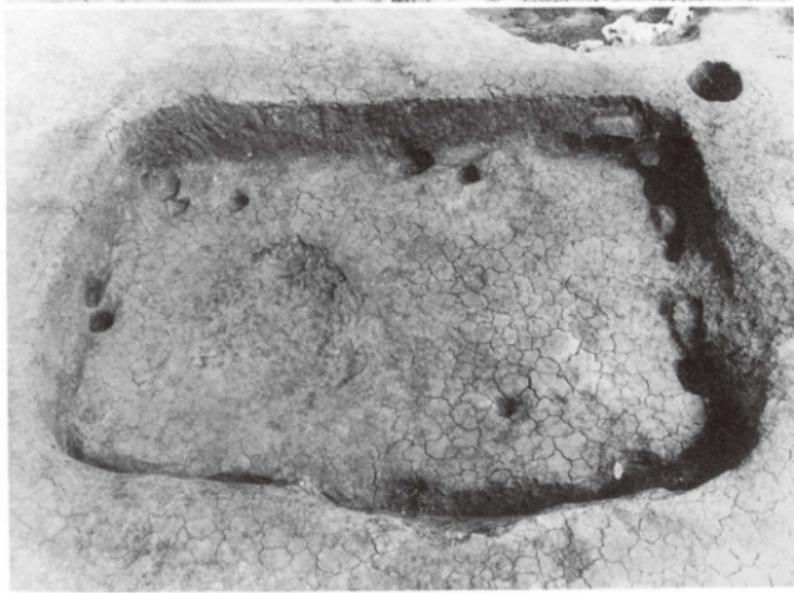


上：6号・7号遺構 検出状況（北東より） 下：6号遺構 掘り上げ後（東より）

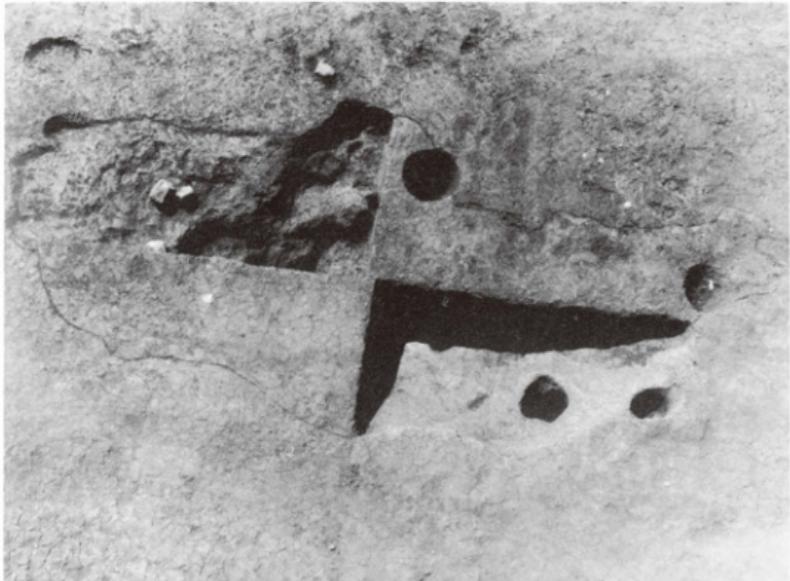


上：7号遺構 焼土、炭化物検出時（北西より） 下：同 挖り上げ後（同）

図版 7



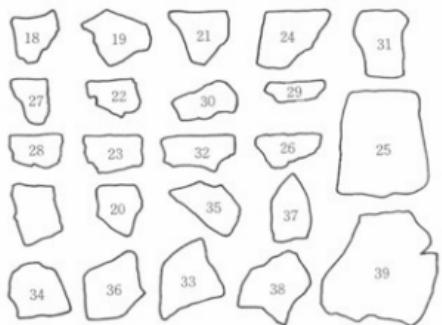
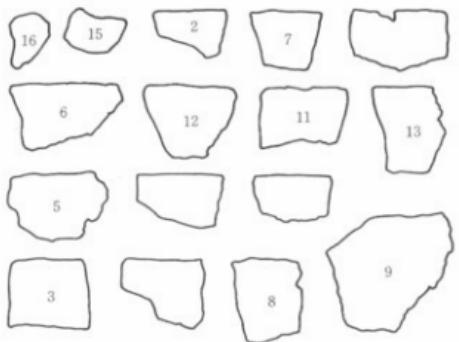
上：7号遺構 ピットⅠ検出状況 下：8号遺構 振り上げ後（北西より）



上：9号遺構 検出状況（北西より） 下：9号・10号遺構 掘り上げ後（同）

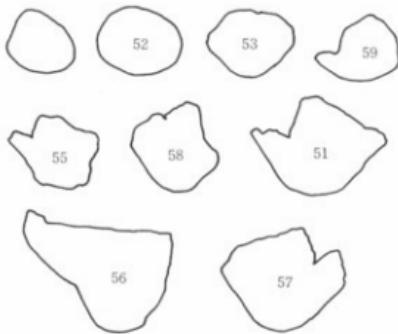
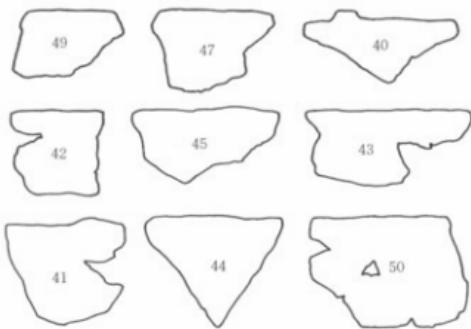


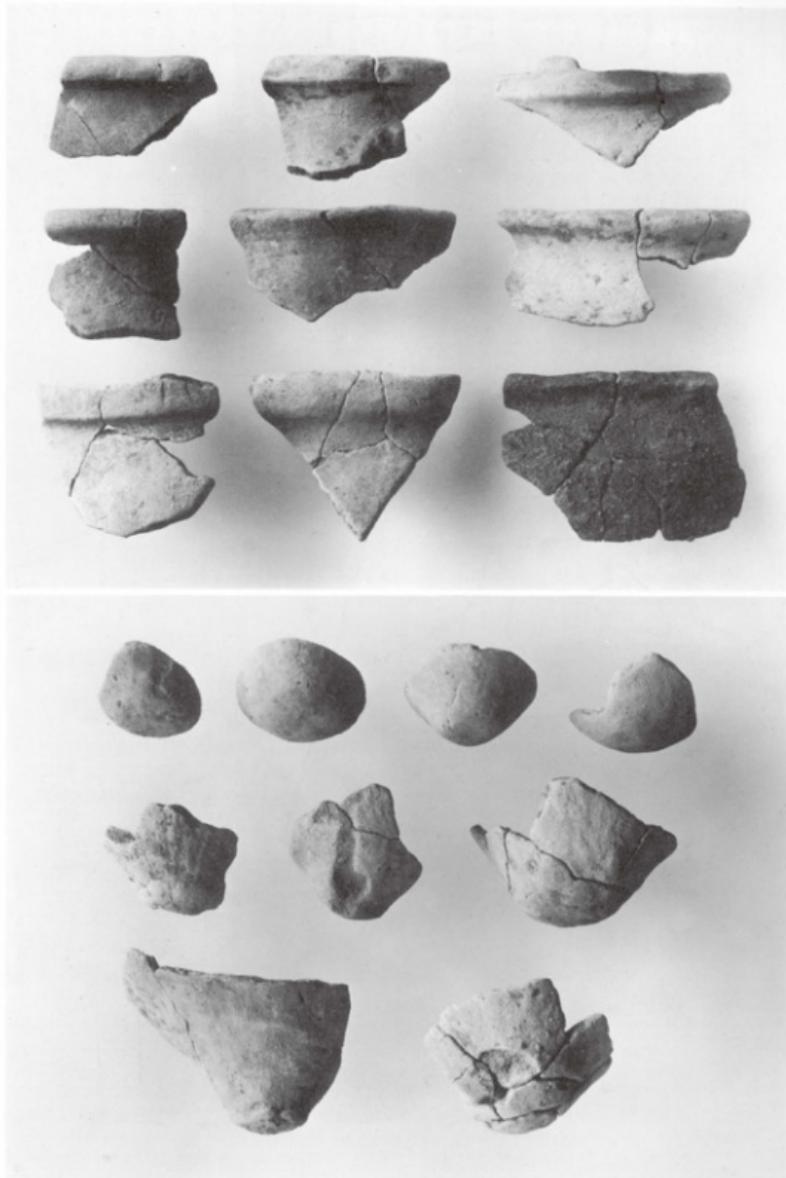
11号遺構 珊瑚塊・焼土塊検出時（南より）



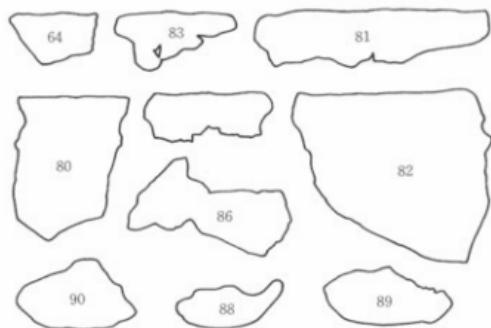
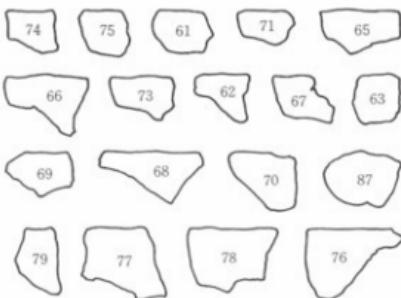


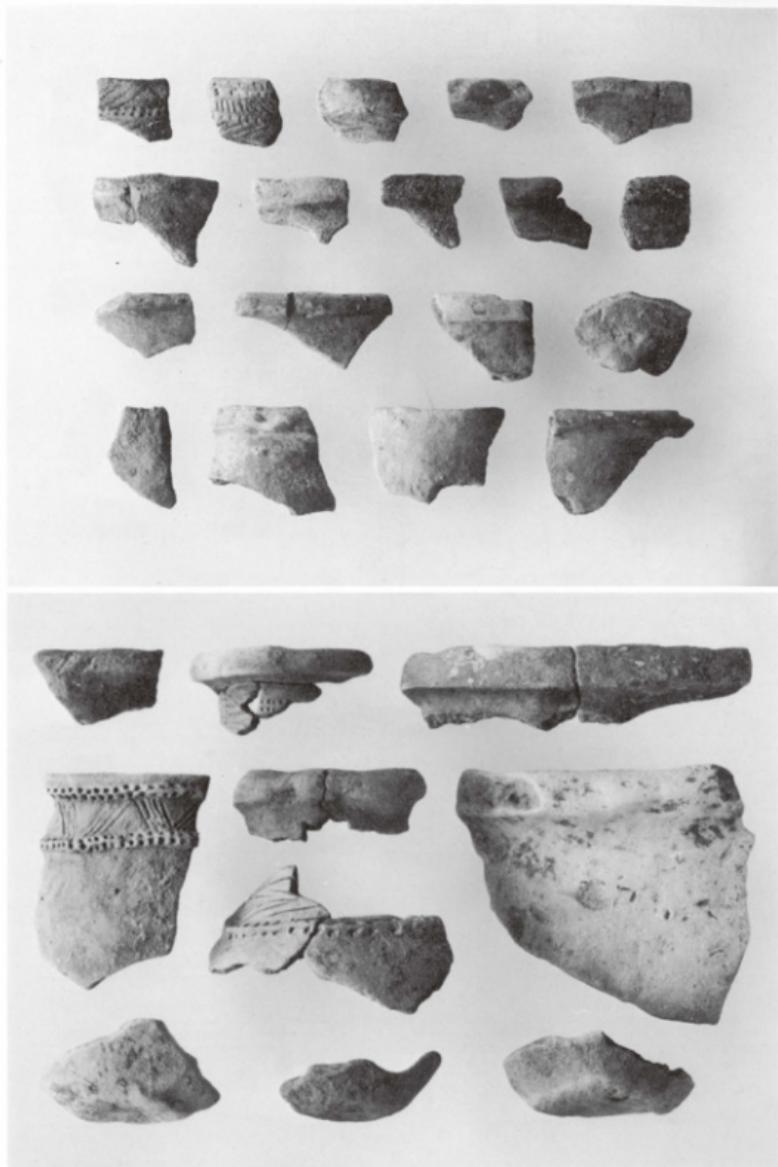
上：3号・4号遺構群出土土器 下：同



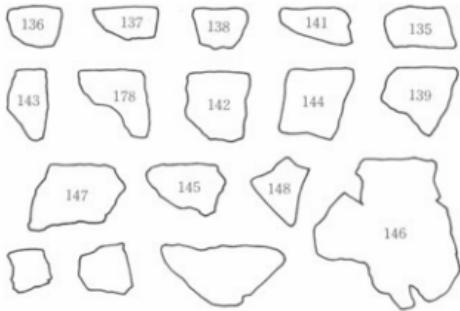
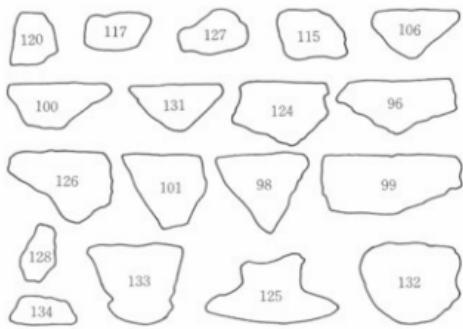


上：3号・4号遺構群出土土器 下：同





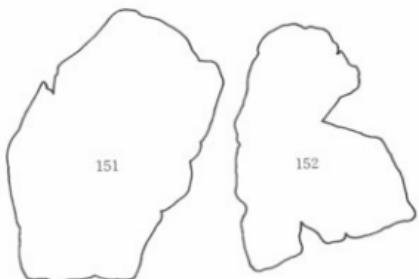
上：6号・7号遺構出土土器 下：同



図版13

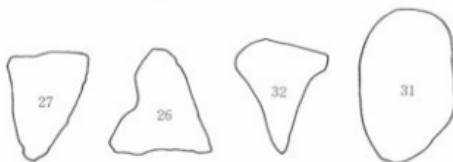
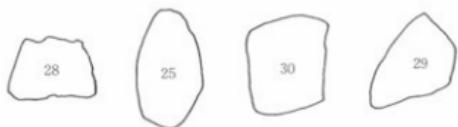
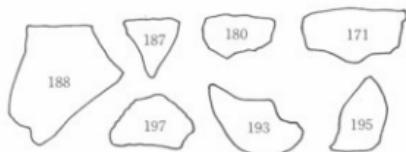


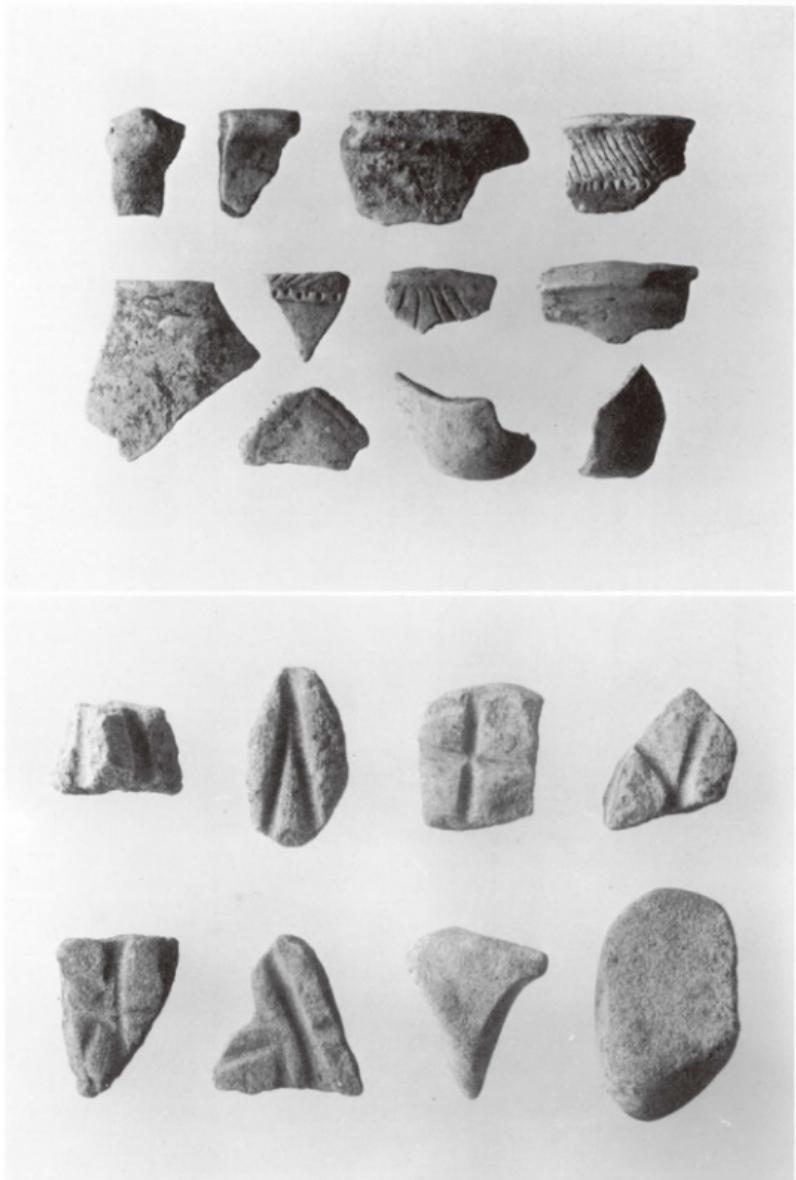
上：8号遺構出土土器 下：1号・9～11号遺構、5号遺構群出土土器等



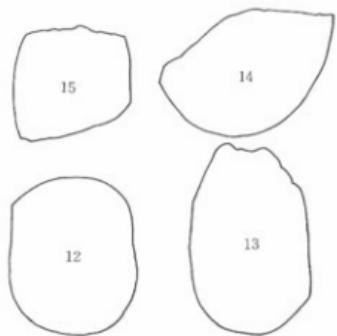
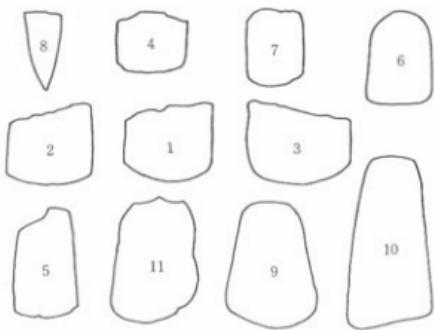


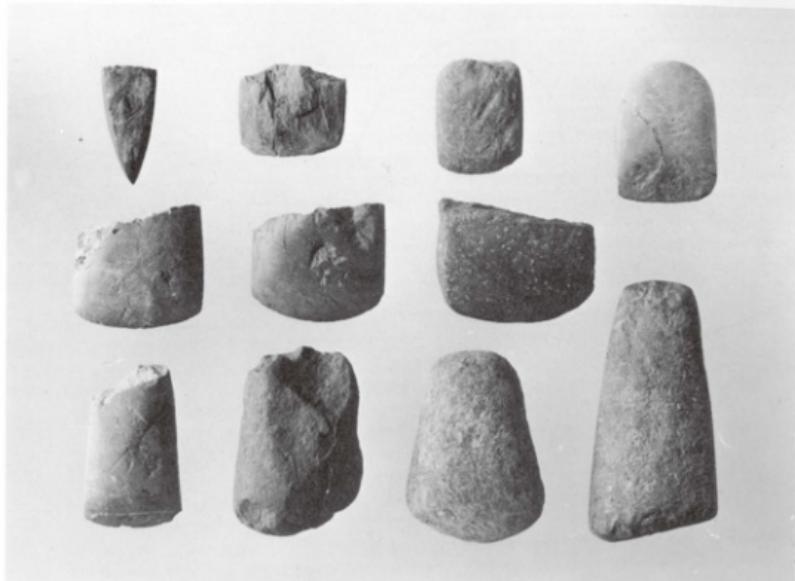
上：3号遺構群出土土器 下：同 裏面





上：表採土器 下：出土石器（砥石・その他の石器）





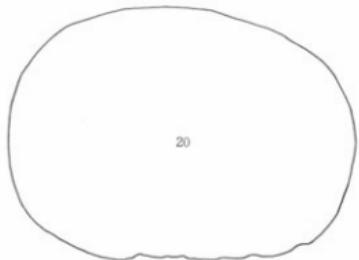
上：出土石器（石斧・敲石・その他の石器） 下：出土石器（敲石）



18



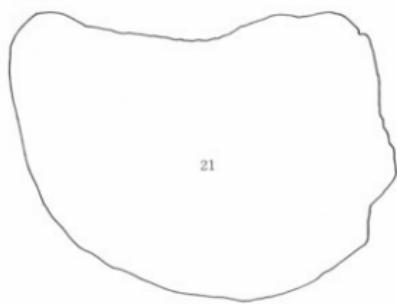
19



20



上：出土石器（クガニイシ） 下：同



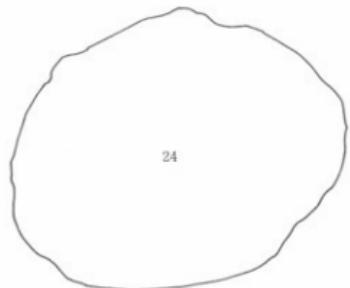
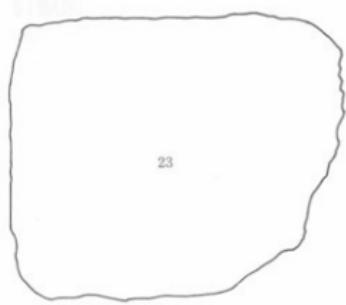
21



22



上：出土石器（石皿） 下：同

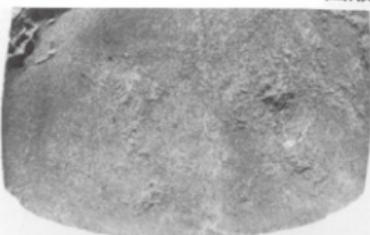




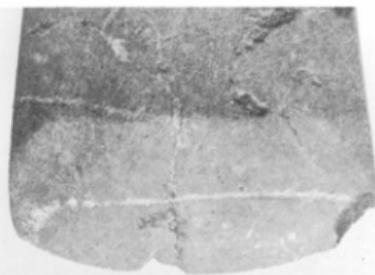
上：出土石器（石皿） 下：同



1



2



5



6



12



8



8

石器使用部拡大写真

付 喜界島遺跡分布調査

一、遺跡の概要

ハンタ遺跡の発掘調査と並行して、7月6日～17日の間、喜界島内の遺跡分布調査を実施した。調査は坂嶺在住の英啓太郎氏の御協力を得て、聞き込み、現状の確認、遺物の採集を中心に行なった。採集した資料はほぼ全島にわたるが、中でも英氏が近年精力的に遺跡踏査をされた島西部のものが最も多い。今回紹介する資料は、この比較的まとまった量のある島西部を中心とするものである。

なお、全島にわたる遺跡一覧表を末尾に付した。参照されたい。

1. 近年確認された遺跡

A. アギ小森田遺跡（地図番号6^{*} 第1～3図 図版1上・7～9上）

大字坂嶺字アギ・字小森田所在。

坂嶺集落より東へ約400m、海岸より350m、標高10mの砂丘上に立地する。前面には珊瑚礁が発達し、背後はかつて湿地帯であったらしい。また奥の段丘と接する地点からは湧水（フムンジャー）があり、小川となって遺跡を貫流し、海へ注いでいる。

遺跡は後世の客土によって地表下1.5～2.5mに埋没されていたが1985年、用水路改修時に遺物包含層の一部が露出、英啓太郎氏・坂嶺在住の木元五十二氏らによって発見された。この遺物包含層には、有機物を多く含んだ厚さ約10cmの土混じりの黒色砂層と、その下の厚さ約30cmの灰色砂層の2枚があり、いずれも縄文時代後期に相当する時期を中心とするものと思われる。遺物は、この包含層に含まれていたと思われる土器、石器、骨器、貝器の他、これらとは時期の異なる陶磁器、フィゴの羽口があり、英・木元氏によって保管されている。

土器（第1図1～22・30・31 図版7）

当遺跡における表採資料は、深鉢形を呈するものがほとんどであり、壺形と浅鉢形を呈するものは数点にすぎない。

深鉢形土器には、口縁部が肥厚するもの、口縁部が肥厚しないもの、口縁部に突帯を有するものがある。

口縁部が肥厚するものには、15・16がある。口縁部はカマボコ状に肥厚し、無文で

*地図番号は1・2頁を参照



第1図 表採土器・陶磁器実測図
アギ小森田遺跡

ある。土器の質は、ハンタ遺跡の分類（35・36頁参照）による2種に相当し、色調は赤褐色を呈している。口縁部が肥厚しないものには、1～8・14・17がある。1・3は縦位と横位に、2・14は横位に粘土紐が貼りつけられている。1・3は、粘土紐に爪形文が施されており、粘土紐間には数本の平行沈線による山形文が施されている。4～8は、口縁部が直立あるいはやや外傾し、口唇部は平坦になっている。また口縁が山形を呈するもの（4・5・8）もある。4・5・7は、沈線文と爪形の刺突文、6は沈線文と刺突文、8は沈線文によって文様が構成されている。胎土は緻密で砂粒を含み、焼成は良好でよく焼きしまり、色調は暗褐色を呈している。17は口縁部がやや外反し、器壁は薄い。口唇部と口縁下部には、ねじ切られた禾本科植物の茎によって施されたような文様がみられる。口唇部にあるものは、斜行沈線文であり、口縁下部のものは、蛇行ぎみの平行沈線文である。胎土は緻密でよく焼きしまり、色調は褐色を呈している。口縁部に突帯を有するものには、9～12がある。9の口唇部及び口縁部突帯には沈線文が施されている。10～12の突帯には、押引きによる沈線が施され、突帯下には数本の平行沈線が施されている。10～12は2種に相当し、色調は黄褐色・黒褐色を呈するものが多い。

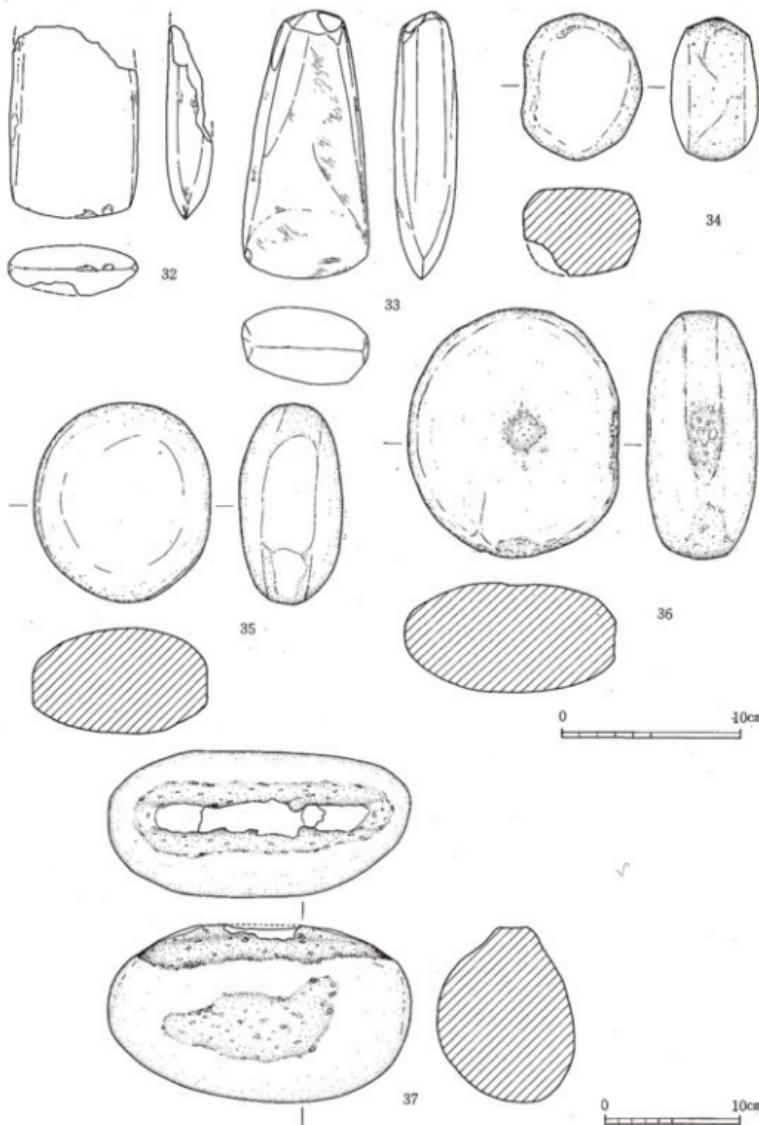
13は壺形であると思われ、口縁部がカマボコ状に肥厚しやや外反する。頸部には刺突連点文が施された粘土紐が貼り付けられ、この下には沈線文が施されている。18は浅鉢形を呈し、口縁部には突起がみられる。どちらも3種に相当し、色調は13が橙色、18が黄褐色を呈している。

19～22は胴部片である。19は刻目をもつ突帯が縦横両方に貼り付けられ、突帯間に斜行する平行沈線文が施されている。20・22には鋸歯状の沈線文、21には横位の平行沈線文と斜行沈線文が施されている。30・31は平底の底部片である。焼成は良好で、焼きしまっており、胎土は緻密である。色調は橙色・赤褐色を呈している。

1・3は面縄前庭式に、4～7は嘉徳I式に、8は嘉徳II式に、19は面縄西洞式に、13は喜念I式に、15・16は宇宿上層式に、17は兼久式に相当する。

陶器（第1図25・26 図版8上）

25・26はカムィヤキ窯系陶片である。焼成は良好で硬く焼きしまっており、色調は青灰色を呈し、断口は赤褐色を呈している。内外器面はともにロクロによるナデ仕上



第2図 表採石器実測図
アギ小森田遺跡

げがなされている。25は口唇部が平坦になっており、やや肥厚している。26は肩部片で、外器面には波状の沈線文が4本施されている。

磁器（第1図23・24・27～29 図版8下・9上）

23・24・27・29は青磁、28は白磁である。23は細片であるため、器形の類推は困難であるが、24は皿形、27は碗形を呈している。23は口縁部が三角形に肥厚している。十分に磁化しており、オリーブがかかった灰色の釉がやや厚く施されているが、内外器面はともに細かい貫入がはしり、光沢は失われている。24は口縁部がやや強く屈曲し、外に向かって開いている。よく磁化しており、オリーブがかかった灰色の釉が施されている。一部に貫入がみられるだけで光沢は失われていない。27は、口唇部が丸味を帯び、緩やかに外に向かって開いている。良質の磁器で、灰色がかかった緑色の釉が薄く施されている。外器面は光沢を有しているが、内器面は光沢を失い、口唇部は釉が剥落している。外器面には片切り彫りの鎬蓮弁文を削り出している。

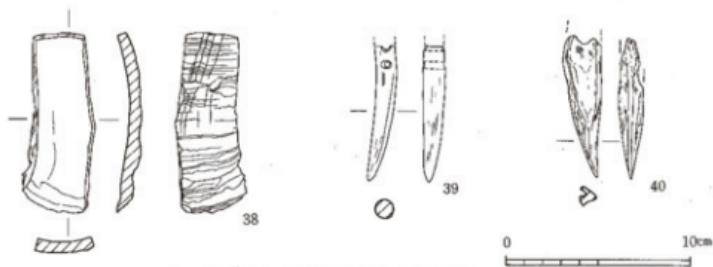
28・29は高台部片である。28は削り出しによる高台をもつ。乳白色の釉がやや厚く内器面に施され、外器面は露胎である。胴部の立ち上がりもかなり急で、壺形の底部と思われる。29は削り出しによる高台をもち、高台部は凹凸がかなりみられ、高台内部にもヘラ削りの痕が残っている。胎は緻密で、灰色がかかった緑色の釉が施されている。豊付及び高台内部は、露胎であり、内底面には割花文が施されている。

石器（第2図32～37）

石斧（32・33）

32は薄手両刃の石斧の残欠である。全体を入念に磨研しているが、側面にわずかに啄彫痕が残る。両側縁はほぼ平行し、刃縁は緩やかな弧をなす。横断面は紡錘形に近い。刃部はわずかに刃こぼれがみられる程度で、鋭利であり、使用頻度の低さがうかがわれる。基部が折損した後、遺棄されたものと思われる。33は厚手両刃の石斧である。全体を丁寧に磨研しているが、基部の磨研はあまり丁寧でない。両側縁は基部から刃部に向かって開き、刃縁は弧をなす。横断面は長楕円形の両端を切った形に近いが、裏面はやや膨らんでいる。刃部はわずかに刃こぼれがみられる程度で、鋭利である。

磨石（34・35）



第3図 表採骨器・貝器実測図
アギ小森田遺跡

34はやや小形の磨石である。裏面の一部は欠損している。平面形はソラマメの形に類似しており、横断面は隅丸長方形に近い。表裏両面に、入念に磨研されて滑沢を有する滑らかな面がみられる。周縁には磨耗により生じたやや粗い面が一巡しており、表・裏面との接線はシャープな稜をなしている。35は34に比べ大形である。平面形は楕円形に近いが、表面の右端は平たくなっている。横断面は長椭円形の両端を切った形に似ている。この石器も34と同様、表裏両面には入念に磨研されて滑沢を有する滑らかな面があり、周縁には、磨耗により生じたやや粗い面が一巡していたと思われるが、図の側面には、磨耗によって生じた面をさらに磨研することにより、平坦面を作り出している。

凹石（36）

36はやや大形の凹石である。平面形は楕円形に近いが、表面の右端は潰れており、大豆の形に近い。横断面は長椭円形の右端が潰れた形をしている。表面中央には、敲打による浅い凹みを有する。側面中央には敲打による浅い凹み、上下端には敲打痕がみられ、周縁には磨耗により生じた粗い面がみられることから、敲石・磨石としても使用されたと思われる。

クガニイシ（37）

いわゆるクガニイシである。楕円形の自然礫を利用している。上面の両側を啄彫によって抉り凹め、凸帶を形成するのが特徴である。凸帶は両端を残すのみでその凸帶中央部は欠損している。啄彫の後、ほぼ全面を磨研しているが、啄彫痕は、凸帶を形

成するための凹みと表面中央部に残っている。凸帯上の磨研は、特に丁寧で滑らかである。下部は使用により潰れている。

貝器（第3図38）

ヤコウガイ製の貝器である。平面形は縦約9cm、横約3cmのはば長方形である。軽く湾曲している。内面は真珠光を発して美麗であるが、外面には外皮が残る。先端以外の縁辺は丁寧に磨研されており、滑らかである。先端は磨耗して片刃状を呈している。用途は不明である。

骨器（第3図39・40）

39の現存長は約7.5cmである。全面は丁寧に磨研されており、滑沢を有する。平面形は、先細りの形をしており、横断面は円形を呈する。上部は孔の中央から折損しており、少くとも2個の孔があったと思われる。旧状、骨の種及び用途は不明である。40はイノシシの尺骨と思われる部位を利用した刺突具の先端部である。現存長は7.5cmをはかる。ほぼ全面に使用によって生じた滑沢がみられるが、図の表面の凹部には自然面が磨け残っている。先端のみに磨研を加えて、先を鋭く研ぎ出している。沖縄伊波貝塚、荻堂貝塚などで完形の資料が出土している。

B. 前田遺跡（地図番号7 第4図 図版1下）

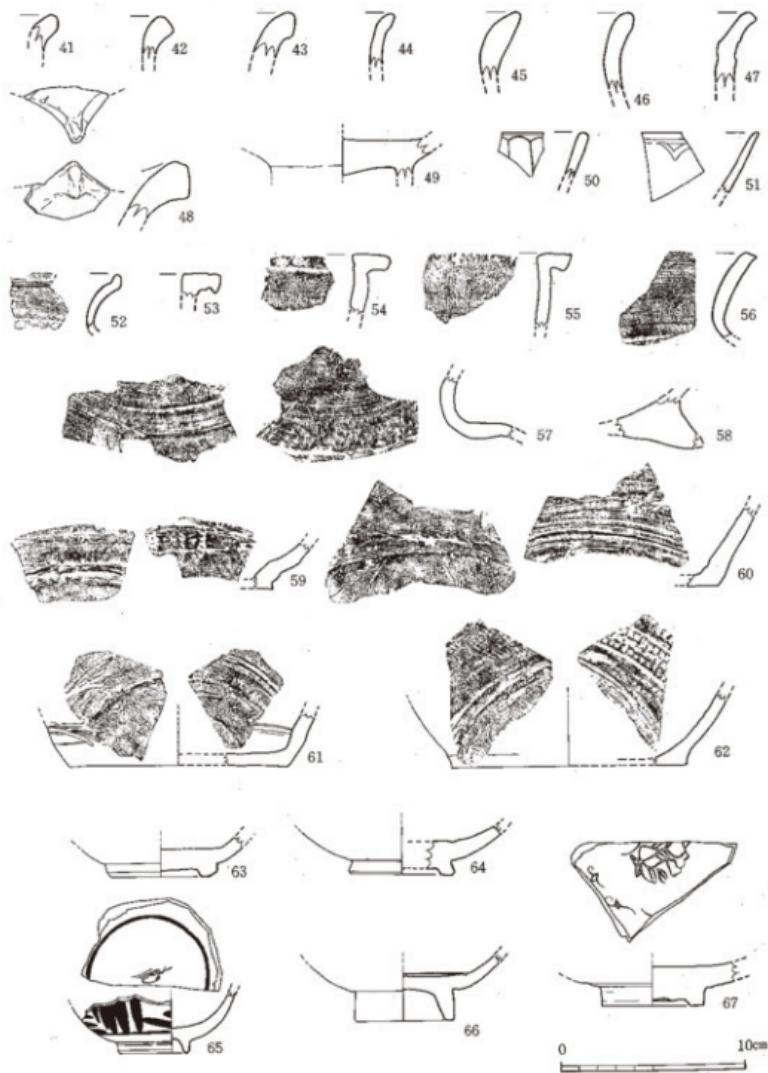
大字坂嶺字前田所在。

坂嶺集落の背後、海に向かい緩やかに傾斜する1段目の段丘端に立地する。海岸より300m、標高25mの地点である。付近には、湧水点（トランメンヤー）の他、白川・神川（ハンミヤー）などの小川があり、東には神山（ウツムスク）が鎮座する。

遺跡は、1985年農地改良の際、英・木元氏によって発見され、焼土塊の散在が観察された他、土器、陶磁器、石器などが採集されている。遺物は両氏によって保管されている。

土器（第4図41～48）

丸い口唇部だけが急に外反するもの（41）、その外部の先端が三角形に肥厚ぎみのもの（42～44）、反対に内部が肥厚ぎみのもの（45）、肥厚せず口唇部が平坦なもの（47）がある。採集点数があまり多くないため、これらがどの器形に属するのかは明確でない。48は山形口縁の破片である。口縁部は三角形に強く肥厚し、山形部は上か



第4図 表採土器・陶磁器実測図
前田遺跡；41～50 川越遺跡；51～67

ら見ると外に張り出している。土器の原体は四方に張り出しをもつ形のものと思われる。土器の質には、1種のものと2種のものがあり、色調は橙色、赤褐色、褐色を呈している。調整はナデによるものが主流である。41~46は、宇宿上層式に相当する。

陶磁器（第4図49・50）

49・50は青磁である。50は口縁部片であるが、細片であるため器形の類推は困難である。断口は粗い感じで、灰色がかかったオリーブ色の釉が厚めに施されている。内外器面はともに細かい貫入がはしり、光沢は失われている。外器面には、陰刻による文様が施されている。49は、高台を一部残している。器壁はかなり厚く、灰色がかかった緑色の釉が厚く施されているが、細かい貫入がはしり、光沢は失われている。

なお、この他にカミイヤキ窯系陶片が數点採集されているが、細片のため図示することができなかった。

C. 川堀遺跡（地図番号9 第4図 図版2上・9下）

大字中熊字川堀所在。

前田遺跡の南西約400m、同じ段丘面を少し上がった所にある。海岸からの距離約500m、標高40mをはかる。東側には小川（ナーバンガー）が、北側には湧水点が存在する。この遺跡も農地改良の際、英氏によって発見された。遺物には、土器、陶磁器、石器、フイゴの羽口、滑石片などがあり、英氏によって保管されている。

土器（第4図58）

大部分が細片で部位不明であり、底部1点のみを図示した。低い脚台あるいは、厚みのある上げ底であると思われる。3種に属する。

陶器（第4図52~57・59~62 図版9下）

52・56・57・59~62はカミイヤキ窯系陶片である。焼成は良好で硬く焼きしまっており、色調は青灰色を呈している。52は口縁部が大きく外反し、口唇部に立ち上がりをもつ。56は口唇部が平坦になっており、口縁部は直線的に外反する。いずれもロクロによるナデ仕上げが内外器面に施されている。57は頸部片である。器壁はやや厚く、頸部はしまり、肩部が張っている。内外器面はともにロクロによるナデ仕上げが施されている。59~62はすべて平底の底部片である。外器面にはロクロによるナデ仕上げが施されており、61・62は一部に叩き痕を残している。内器面にはロクロ痕が残り、

59・62には叩き痕が残っている。

54・55は、すり鉢の口縁部片で、口縁部が直角に折れ曲がっている。内外器面には淡黄色の釉が施されているが、光沢はない。内器面には数本の沈線が縦方向にはしつている。

53は、口縁部が直角に折れ曲がっており、口唇部には1本の沈線が施され、淡黄色の釉が内外器面に施されている。

磁器（第4図51・63～67 図版9下）

51・64・67は青磁、63・66は白磁、65は染付である。

51は細片であるため器形の類推は困難である。口縁は、緩やかに外に向かって開いている。胎はやや粗く、器壁は薄い。灰色がかかったオリーブ色の釉が薄く施されているが、光沢は失われている。外器面には片肉彫りの蓮弁文が施されているが、かなり便化している。64・67は高台をもつ。64の高台は、やや外に向かって開いている。灰色がかかったオリーブ色の釉が高台内部にまで薄く施されている。67の高台は内部に削り痕が残っている。灰白色の釉が内器面にのみ薄く施されている。内底面には割花文の花弁文が施されている。

66は貼り付けによる高台をもつ。胎は淡黄色を呈し、あまり緻密ではない。灰白色の釉が薄く施されており、疊付及び高台内部は露胎であり、高台外器面には釉が流れている。見込みには沈線が施されている。63は削り出しによる低い高台をもつ。胎は緻密で、淡黄色の釉が施されている。疊付及び高台内部は露胎である。高台外器面には釉が流れている。

65は胎が白色を呈し、極めて堅緻である。内外器面には青色の釉で文様が施され、この上からさらに透明の釉が施されている。

D. 島中遺跡（地図番号16 第5・9図 図版2下・10・12下）

大字島中所在。

島中集落の北東端、^{チ-ズ?}中城と呼ばれる高まりから緩やかに下る斜面上に遺物が散布する。海岸からの距離は約1.0km、標高は約50mである。遺跡の前後に湧水点が各1ヶ所あり、背後のものは付近に小規模な湿地帯を形成している。

当遺跡は1986年英氏によって発見され、陶磁器、石器、フイゴの羽口などの表採資

料が同氏によって保管されている。

今回は中城についての伝承を入手することができなかつたが、その名が示すように「グスク」であったとすれば、当遺跡とは密接な関係があつたと考えられる。

また1965年遺跡に近接した農道の敷設時、島中住の豊原シゲ子氏によって磨製石斧が採集されている。

陶器（第5図68・69 図版10上）

68・69はカムィヤキ窯系の陶片である。68は頸部から肩部にかけての破片である。焼成は良好で、硬く焼きしまつてゐる。色調は青灰色を呈するが、断口は赤褐色を帶びてゐる。内器面の口縁部にはロクロによるナデ仕上げがなされ、頸部より下には青海波文がみられる。外器面には浅い横位の沈線と波状の沈線が施されている。69は平底の底部片である。器壁はかなり厚く、外器面にはロクロによるナデ仕上げがなされているが、内器面にはロクロ痕が残つてゐる。

磁器（第5図70～73 図版10上）

70・72は青磁の碗である。貼り付けによる高台をもち、口縁部は欠失している。よく磁化しており、淡黄色の釉が施されている。かなり風化し、無数の貫入がはしり光沢は失われてゐる。71は白磁であり、高台部のみが残つてゐる。胎には気泡がみられ、やや粗く、灰白色の釉が施されている。高台内部は露胎である。高台は削り出しによるものであり、外器面にはヘラ削りの痕が残つてゐる。73は胎が緻密で、外器面には暗褐色の釉が施されている。疊付部分は磨耗してゐる。高台は削り出しによるものである。

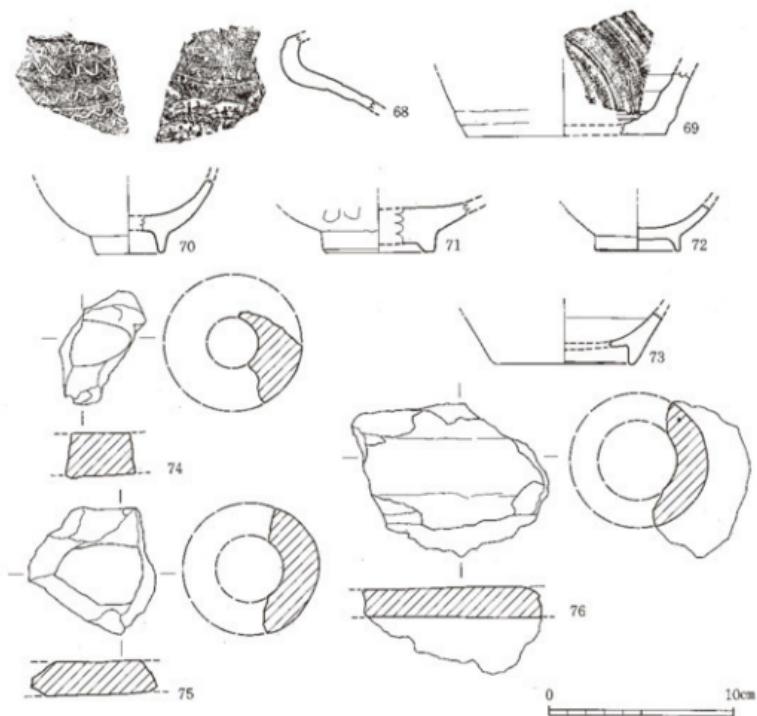
石器（第9図127・128 図版12下）

石斧（127）

127は、基部から大きく折損した小形の両刃石斧の残欠である。ほぼ全面を丁寧に磨研してゐる。両側縁はほぼ平行し、刃縁は弧をなす。横断面は長楕円形を呈すると思われる。刃部は使用による挫屈が著しい。基部から大きく欠損した後遺棄されたものと思われる。

不明石器（128）

128は長さ約12.4cm、幅約3.6cm、長さに比して幅が著しく狭い。粗割り、調整剝離



第5図 表採陶磁器・フィゴの羽口実測図

島中遺跡

によって形が整えられているが、啄痕は見られない。鑿のような機能をもつ石器の未製品の可能性がある。

フィゴの羽口（第5図74～76 図版10下）

74～76は筒状をなす土製のフィゴの羽口の破片であり、特に76には鉄錆が固着している。色調は橙色を呈し、胎土は多孔質であり、軟質である。内径は74が約2.5cm、75が約3.5cm、76が約4cm強で、図の左から右に向かってやや小さくなるが、外径はいずれも7cm強で、ほぼ同一である。このことはフィゴの羽口の外見は長い円柱形をなすものの、内部の通気孔は一方に向かってすぼまる形であったことを示している。

カミ カチツ
E. 上嘉鉄遺跡（地図番号26 第6・7図 図版3・11上・12上）

大字上嘉鉄所在。

上嘉鉄集落の北側に急崖をなす段丘の縁辺一帯に広がる。海岸からの距離は約700m、標高30~40mをはかる。付近には水源が多く、段丘上やや奥まった所にマッチチャ、段丘直下にヤンガー、ウッカーなどと呼ばれる湧水点が連なる。

遺跡は、農地改良の際、英氏、上嘉鉄小学校長盛山末吉氏によって発見され、土器、陶磁器、石器などの遺物が採集・保管されている。両氏の話を総合すると、土器、石器がマッチチャ付近に多いのに対し、陶磁器は、段丘端の突出部（大供地区）付近に多いようである。

土器（第6図77~94・98・106~108 図版11上）

88・94は壺形、89は浅鉢形を呈すると思われる。その他は細片であるが、ほぼ深鉢形に属すると思われる。深鉢形土器には、口縁部が三角形に肥厚するもの（77・78・80・82・83・85~87・90・93）、カマボコ状に肥厚するもの（79・81・84）、帯状に肥厚するもの（92）があり、すべて無文である。93には口縁部に縱方向の粘土紐の貼り付けがみられる。88は口縁部がカマボコ状に肥厚し、94は三角形に肥厚している。前者は無文で、後者は刺突連点文が施された粘土紐が貼り付けられている。89は、口縁部が肥厚せず、緩やかに外に開いており、無文である。91・98は脇部片で、91は粘土帯の貼り付けがみられ、98には沈線文と刺突連点文がみられる。これらは3種に属し、色調は橙色・赤褐色を呈するものが大半である。106~108は底部片である。106は丸底、107は平底、108はくびれた平底である。また108の外器面には葉圧痕がみられる。106は3種に属し、色調は橙色を呈している。107は1種に属し、色調は橙色を呈している。108の胎土は鉱物粒を含み硬く焼きしまっており、色調は明るい橙色を呈している。77~88・90・93は宇宙上層式に相当し、89の胎土はこれに類似している。94・98は喜念I式に相当し、92はカヤウチバンタ式に類似している。108は兼久式に相当する。

陶器（第6図100・101・103 図版11上）

100・101・103はカミイヤキ窯系の陶片である。焼成は良好で、硬く焼きしまっており、青灰色を呈し、断口は赤褐色を呈している。100は、断口は暗青灰色を呈してお



第6図 表採土器・陶磁器実測図

上嘉鐵遺跡

り、鉢形を呈すると思われる。口縁部が直立しており、内外器面はロクロによるナデ仕上げが施されている。101は胴部片であり、器形は不明である。器壁はかなり厚く、外器面はロクロによるナデ仕上げが施されているが、内器面は叩き痕が残っている。103は平底の底部片である。器壁はやや厚く、内器面には凹凸がみられる。内外器面ともロクロによるナデ仕上げが施されている。

磁器（第6図95～97・99・102・104・105 図版11上）

96・97・99・102・104・105は青磁、95は染付である。

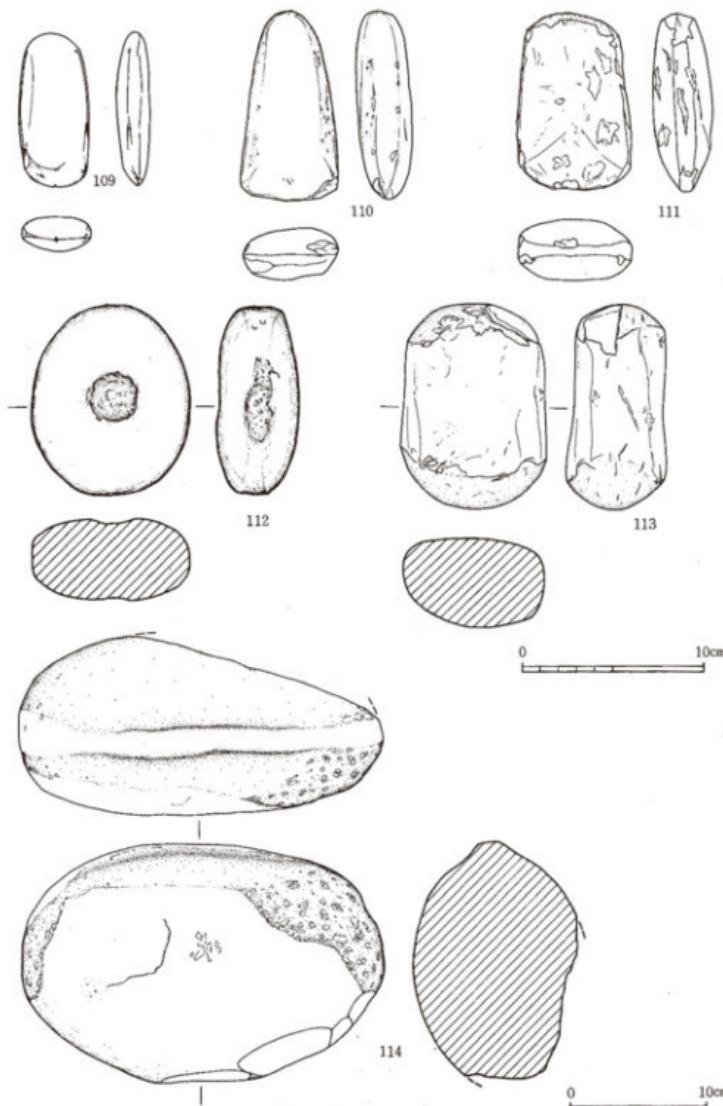
96・97は細片であるため、器形の類推は困難である。96は口縁部がくびれており、器壁は薄い。胎は堅緻で、灰色がかかった緑色の釉が薄く施されている。97は口縁部が玉縁状を呈している。胎は淡黄色を呈し、堅緻ではあるが磁化はやや不十分である。淡褐色の釉が薄く施され、細かい貫入がみられる。99は皿状を呈すると思われ、口縁部は湾曲し、内面に凹みを有している。内器面にはヘラ削りの痕が残っている。釉は全面に薄く施されており、光沢は失われている。102・104は碗である。102は口縁部と高台部を欠失している。器壁はかなり厚く、外器面には劃花文、内底面には人物などが描かれている。104は口縁部を欠失している。高台は削り出しによるものと思われ、露胎である。内底面には劃花文が施されている。105は削り出しによる高台片である。器壁はかなり厚く、高台内部は露胎である。内底面には劃花文が施されている。

石器（第7図109～114 図版12上）

石斧（109～111）

109は小形で扁平な片刃の石斧である。全体を丁寧に磨研している。両側縁は軽く外湾し、基部と刃縁はほぼ半円をなす。両側面はほぼ平坦で、正面との境は棱をなしている。横断面は長楕円形の両端を切った形に近い。刃端にはわずかに刃こぼれがみられる程度で、鋭利である。

110・111は厚手の両刃石斧である。110は全面を丁寧に磨研しているが、表面に啄痕の残る部分がみられる。基部は半円形を呈し、両側縁は基部から刃部に向かって開き、刃部は凸出している。横断面は長楕円形に近いが、裏面は平たくなっている。刃部は磨耗してにくくなってしまっており、刃器としての用途を果たし難い。111も厚手の石斧である。ほぼ全面を磨研しているが基部は粗い面のままであり、啄痕を残す部分



第7図 表採石器実測図
上嘉鉄遺跡

もみられる。基部は緩やかな弧をなし、両側縁は刃部に向かってわずかに開き、刃部は弧をなす。横断面は角の丸い扁平な八角形に近い。刃部は表裏両面から扇形に研ぎ出されているが、刃端は磨耗が著しく、鈍磨している。基部も同様に鈍磨しており、刃端の慢減後、磨る、撫くなどの用途へ転用された可能性がある。

凹石（112）

これは、平面形が卵形、横断面が長楕円形を呈する転石を利用した凹石である。表裏両面に敲打による円形の浅い凹みがある。側面中央及び上下端には敲打痕が残っており、敲石としても使用されたと思われる。

敲石（113）

113は平面形、横断面とも隅丸方形を呈する厚手の石器である。これは、ハンタ遺跡から出土した敲石（51頁第19図12）と同様、自然礫を擣磨用に使用したもので、上下端は特有の丸味を維持したまま慢減している。上下端が収まるような凹みを有する白石と組み合わせ、その凹みの中で対象物を叩き潰し、擣磨するために用いられたと思われる。

クガニイシ（114）

いわゆるクガニイシである。ひと抱えほどの大きさではじめから仕上がりの形に近い平面形・横断面とも楕円形の自然礫を利用している。上面の両側を啄彫によって抉り凹め、凸帶を形成しているが、凸帶の両端では稜が明確でない。啄彫の後、ほぼ全面を磨研しているが、凸帶を形成するための凹みと左右両端に、啄彫痕が残っている。裏面から下部にかけて欠損し、表面下部には挫屈痕がみられるが、使用によるものかどうかは不明である。

F. 上砂遺跡（地図番号8 第8・9図 図版10上・12下）

大字坂嶺字上砂所在。

ハンタ遺跡から北東へ約700m、同じ段丘面の標高125mの地点に立地する。前面に急崖があり、付近に湧水点（ミイガー）があることなどは、ハンタ遺跡の立地とはほぼ変わらない。

遺跡は、1985年農地改良の際、英氏によって発見され、土器、陶器、石器などの遺物が同氏によって保管されている。

土器（第8図115 図版10上）

口縁部は肥厚せず、口縁上部がやや外傾し、口縁は低い山形を呈する。焼成は良好であり、色調は赤褐色を呈している。胎土は緻密で硬質である。文様は口唇部と口縁部に施されており、口縁部には交叉した平行沈線文が施されている。嘉徳II式に相当する。

陶器（第8図117・119・120・123 図版10上）

117・119・120・123はカムィヤキ窯系の陶片である。いずれも細片であるため、器形の類推は困難である。焼成は良好で硬く焼きしまっており、色調は青灰色を呈している。内外器面はともにロクロによるナデ仕上げが行なわれているが、123の外器面には叩き痕が残っている。117は口縁部が外傾しており、口縁部下端が下方に拡張され、2段の棱を有し、沈線が1本施されている。119・120は頸部片である。頸部はしまり、肩部が張っている。いずれも無文である。123は平底の底部片である。

石器（第9図131 図版12下）

131はやや大形の凹石である。平面形は隈丸方形を呈する。表裏両面に円形を呈する広く深い凹みを有する。両側面及び上下端には敲打痕が残っており、敲石としても用いられたと思われる。この他にも凹石の残欠がある。

G. 大城久遺跡（地図番号4 第8・9図 図版11下・12下）

伊砂集落の東、第1段丘が舌状に突出した部分にあり、海岸から約300m、標高30~40mをはかる。1986年笠利町歴史民俗資料館中山清美氏、英氏によって発見され、陶磁器、石器、フイゴの羽口、鉄滓（付説III参照）、滑石片（図版11下・2段目右端）が採集されている。

また付近の伊砂集落からもフイゴの羽口、石器が若干出土している。

陶器（第8図125・126 図版11下）

125・126以外はいずれも細片ばかりである。125・126はカムィヤキ窯系陶器底部片である。焼成は良好で硬く焼きしまっており、色調は青灰色を呈している。125は内外器面ともロクロによるナデ仕上げが施されている。126は内器面にロクロ痕と叩き痕を残している。

磁器（第8図116・121・122）

116・121・122は青磁である。116は細片であるため、器形の類推は困難である。口縁部の先端がややくびれ、緩やかに外に向かって開いている。胎は堅緻で、灰色がかった緑色の釉が全体に薄く施されている。内外の器面には細かい貫入がはしつてある。外器面にはロクロ痕が残っている。122は口縁先端部がやや外反し、外に向かって緩やかに開いており、碗形を呈すると思われる。胎は堅緻で、器壁もかなり薄い。外器面には、灰色がかった緑色の釉が薄く施されている。121は削り出しによる高台片である。胎は堅緻で、器壁はかなり厚い。青灰色の釉が施されており、高台内部は露胎であるが、疊付には釉が流れている。内底面には割花文の一部がみられる。

石器（第9図133 図版12下）

この石器は当遺跡付近の伊砂地区から表面採集されたものであるが、採集地点が明確でないためここに一括した。

これは小形の凹石である。一部を欠失しているが、平面形は隅丸方形に近いと思われる。横断面は隅丸方形を呈する。表裏両面の中央に敲打による浅い凹みがある。両側面及び下端には敲打痕が残っており、敲石としても使用されたと思われる。

H. その他

a. 長嶺地区遺物散布地（地図番号27 第8図）

大字長嶺所在。

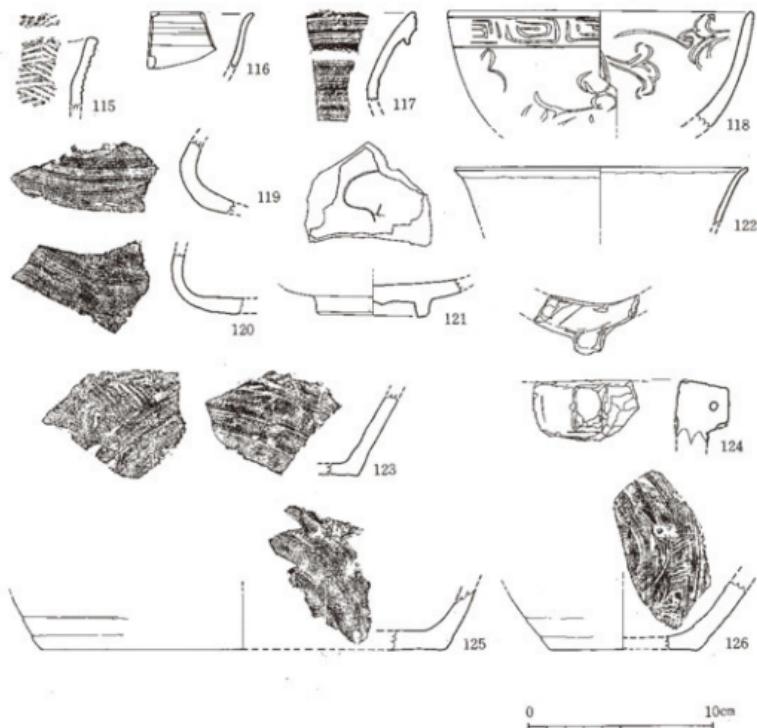
百之台を最高点とする隆起珊瑚礁は、その北東側では、断崖とはならず長い斜面を形成しているが、遺跡はその斜面の中程、長嶺池のそばにある。東シナ海岸、太平洋岸までそれぞれ1.2km、標高は約100mである。

遺跡は1984年、中熊在住の尚美貴子氏により発見され、同氏採集の滑石製石鍋片（第8図124）の他、カミイヤキ窯系陶片が採集されている。石鍋は立方形の外耳を口縁部に有するもので、外耳には横方向の孔が貫通している。喜界島出土の石鍋としては、志戸桶の当地から出土のものが知られているが^{注2}、これは口縁の下に羽釜状の鋲をもつもので、当遺跡の石鍋は、これとは形態が異なる。

b. 柏毛地区遺物散布地（地図番号13 第8図 図版11下）

大字西目字柏毛所在。

西目集落の北西端、川堀遺跡の南約250mの地点にある。標高は約60m。付近には



第8図 表採土器・陶磁器・石鍋実測図
上砂遺跡: 115・117・119・120・123 柏毛: 118
大城久遺跡: 116・121・122・125・126 長樂: 124

柏毛の泉と呼ばれる湧水点がある。遺物には土器、陶磁器、石器があり、主に英氏によって採集・保管されている。第8図118は青磁の碗である。胎は堅緻で器壁はやや厚い。灰色がかった緑色の釉が内外器面にやや厚く施されており、下位になるにつれ厚くなっている。外器面には陰刻の雷文・唐草文、内器面には唐草文がそれぞれに施されている。

c. 下田の滝周辺地区遺物散布地（地図番号2 図版11下）

大字伊実久所在。

伊実久集落の西方、下田の滝付近の段丘下標高7~8mの砂丘上から、今回土器片を採集した。細片のみで図示しうるものはないが、黒褐色の薄手のものと褐色の厚手のものがある。特に後者には混入物に大粒の白色粒が目立ち、穿孔されているものが1点ある。近くにある伊実久貝塚の土器は、宇宙上層式を主体としているといわれるが、当地点の土器は、これとは異なるようである。

d. ハンタ遺跡周辺採集遺物（地図番号15 第9図）

ハンタ遺跡の南約50mの畑から石器（尚美貴子氏採集、第9図130）が採集されている。

これは小形で、平面形が橢円形、断面形が卵形を呈する。表裏両面をそれぞれ啄彫によって円形に軽く凹め、その円の上端に孔を両側から穿っている。啄彫の後、ほぼ全面を磨研しているが、上端と下端には啄彫痕が残ったままである。この石器は形状から、鍤として用いられたと考えられるが、紐ずれなどの痕跡は認められない。

e. 浜川邸採集遺物（地図番号18）

大字赤連所在。

赤連在住の浜川岩一氏の宅地内から、石斧の残欠、磨石などの石器とともに、黒雲母白雲母片岩が出土している。このような雲母片岩は、喜界島や奄美大島にはないといわれており、それ以外の地域からの移入品と思われる。ハンタ遺跡出土の白雲母塊とともに興味ある遺物である。

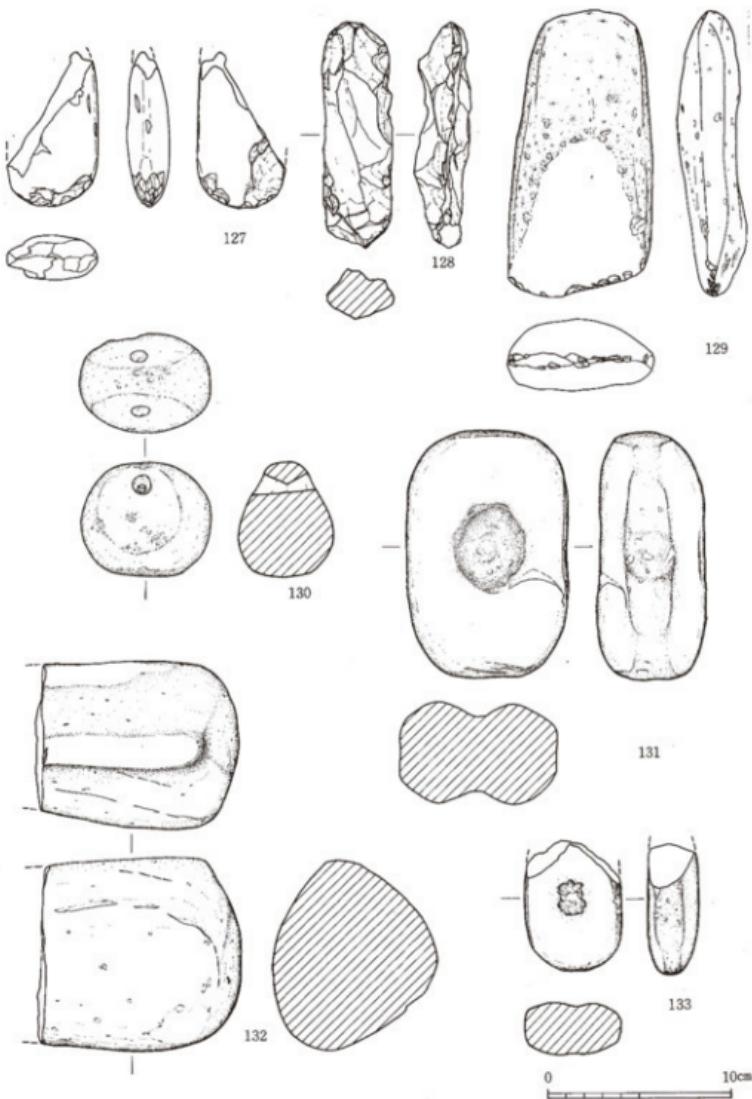
2. 周知の遺跡

遺跡として過去に紹介されたもののうち、今回4遺跡について、新しい資料・情報を得ることができた。これに遺跡の現状を交え、以下に述べることとする。

A. 湾天神貝塚（地図番号19 第9図 図版4上・12下）

大字湾所在。

湾小学校の北側、広い礁原をもつ海に向かって緩やかに傾斜する砂丘中に突出した隆起珊瑚礁を基盤とする小独立丘上に立地する。この独立丘は、海岸線の湾入部の北縁に向かって伸びた様相を呈し、海岸からの距離約350m、標高は約15mである。ま



第9図 表掲石器実測図

島中遺跡；127・128 荒木貝塚付近；129 ハンタ遺跡周辺；130
上砂遺跡；131 湾天神貝塚；132 伊砂一帯；133

た直下の市街地には豊富な湧水がある。現在、当地には天神が祀られており、地域信仰の対象となっている。

当貝塚は山崎五十磨氏によって発見された後、三宅宗悦氏、多和田真淳氏らに紹介^{註3}されており、1957年には九学会の調査も行なわれている。遺物としては土器（有文・無文）、石器、貝製品、獸骨などが報告されている。^{註4}

現在、当貝塚は九学会調査時と比べてさほど大きな改変は加えられていないようであるが、神社境内にわずかに貝が散布する程度で遺物はほとんど見当らない。今回の調査では石器を1点（第9図132）採集するに留まった。

これは、いわゆるクガニイシの残欠である。ほぼ半分を欠失している。上面の両側を啄彫によって軽く凹め、凸帯を形成している。凸帯の右肩には角がある。啄彫の後にはほぼ全面を磨研している。

B. 総合グラウンド遺跡（地図番号20 第10図 図版4下）

大字湾字久大真所在。

湾地区の中心部から西に約1km、「俊寛の墓」の南約200m、北に向かって緩やかに傾斜する砂丘上にある。海岸からの距離約800m、標高15~20mである。

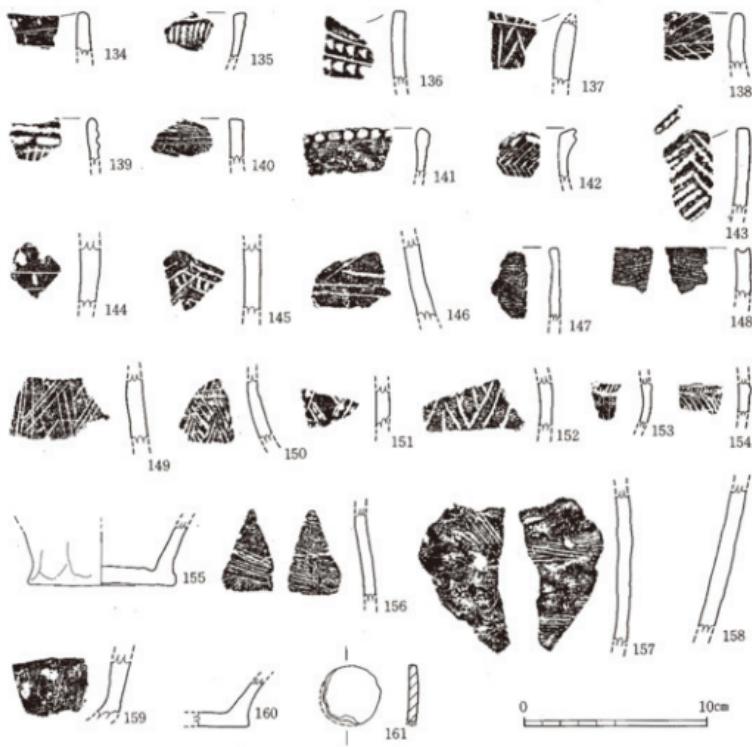
遺跡は、1972年喜界町総合グラウンド建設の際、グラウンドの南隅の崖面に遺物包含層が露出したのを、町教育委員会が発見した。現在、遺物包含層の状況などは不明な点が多いが、現喜界町自然休養村管理センターの方まで200~300mにわたって土器片が点在している。

遺物は土器を中心で、現在町中央公民館に保管されている。

土器（第10図134~160）

当遺跡における表採資料は細片が多数を占め、器形の類推は困難である。

134~143・147・148は口縁部片である。134~143は有文であり、口縁部が肥厚するものと肥厚しないものがある。前者には139・141・142があり、肥厚部には刺突連点文が施されており、139・142にはさらにこの下に沈線文が施されている。なお139・142の2点の肥厚部は、貼り付け突帯の一部とも思われるが細片のため不明である。後者には134~138・140・143があり、口縁が山形を呈するもの（134・136・137・143）、口縁部が内湾するもの（135）がある。文様には、押引き文によって構成されたもの（143）、



第10図 表採土器・土製品実測図
総合グラウンド遺跡

刺突文と沈線文によって構成されるもの（134・136）、沈線文によってのみ構成されるもの（137・138・140）がある。主に口縁部に施されているが、143は、口唇部にも施されている。147・148は無文であり、条痕がみられる。

144・145・150・151・153・154は、口縁部であると思われるが、口唇部を欠失している。144・145・151は、沈線文と刺突文によって文様が構成されており、145は上面観が方形を呈していたと思われ、151には焼成前の穿孔がみられる。150は沈線文によって文様が構成されている。153・154は、細かい刻目をもつ粘土帯が貼り付けられ、その下に沈線文が施されている。

146・149・152・156～158は胸部片である。146・149・152は有文で、沈線文が施されている。156～158は無文で、156・157には条痕がみられる。

155・159・160は平底の底部片である。155は底部がややくびれ、外器面はヘラによって調整がなされている。

これらの土器片の焼成は良好で、色調は赤褐色・黄褐色を呈する。

153・154は面縄前庭式、143は面縄東洞式、134～136・144・145・151は嘉徳I式、137・138・140・150は嘉徳II式に相当する。139・142は面縄西洞式に類似する。

土製品（第10図161）

ほぼ円形を呈すると思われる。色調は黄褐色を呈し、字宿下層式の胎土に類似する。

C. 中里貝塚（地図番号21 図版5）

大字中里所在。

中里集落の西はずれ、県道沿いの海に向かって傾斜する砂丘上にある。海岸からの距離約800m、標高20～30mである。砂丘の西側は標高10m前後の低地となっており、以前は湿地帯を形成していたと思われる。

遺跡は1952年多和田真淳氏によって発見され、土器、石器の出土報告がある。現在、遺物包含層と思われる30～50cmの暗褐色砂層が、道路及び耕作のために切り取られた断面にかなりの範囲でみられる。今回、遺物としてはイモガイ科、シャコガイ科などの貝類しか採集できなかったが、町中央公民館に中居種生氏寄贈の中里出土と伝えられる磨製石斧があり、この遺跡に関するものかと思われる。なお、多和田氏報文中の中里貝塚に統くとされるケンドンヶ崎貝塚群は今回確認できなかった。^{註6}

D. 荒木貝塚（地図番号23 第9図 図版6・12下）

大字荒木所在。

荒木集落の東方、集落からは1段高い段丘の先端にある。海岸からの距離は約500m、標高13m、また、西の荒木小学校遺跡とは250m、東の荒木農道遺跡とは500mの距離である。遺跡の東側には、近年までムヤが営まれていた隆起珊瑚礁崖がそり立ち、一帯はうっそうとした林となっている。

遺跡は1931年重野豊吉氏によって発見されたが、ザルガイ科を主体とするおびただしい量の貝の堆積が広がるのみで、人工遺物は出土していないという。現在、その貝層の一部が段丘に上がる道路によって切られており、地表下10~15cmに20~30cmの厚さでみられる。

付近の集落内には、西武増氏宅地内出土の石器（第9図129）や、輝為志郎氏採集の石器（現在不明）が、また光岡茂雄氏宅地内から貝が大量に出たという話があり、当遺跡との関係が考えられる。

石器（第9図129 図版12下）

129は、大形厚手両刃の石斧である。刃部は入念に磨研されているが、刃部以外は啄彫痕を残したままである。平面形は長台形に近い。横断面は長楕円形であるが、裏面は平坦になっている。刃部の研ぎ出しは表裏一樣でない。刃端には潰れ、挫屈痕がみられ、手荒い使用がうかがえる。

（馬原・岡・藤崎・上田・国見）

註1 『角川日本地名大事典』「46、鹿児島県」1983年の喜界町「原始」の項（876頁）に長嶺遺跡の記載があるが、同一の地点かどうか不明。

註2 遺跡一覧表の註9・11に同じ。

註3 遺跡一覧表の註2に同じ。

註4 遺跡一覧表の註4に同じ。

註5 遺跡一覧表の註5に同じ。

註6 遺跡一覧表の註4に同じ。

二、まとめ

喜界島における遺跡分布調査は、幾度か行なわれ、砂丘上に点在する遺跡やグスクなどが指摘されてきたが、今回の調査でもいくつかの新知見を加えることができた。それらを包括し、時代ごとに整理すると以下のようになる。

喜界島における縄文後期相当期までの先史時代遺跡は、まず島西部の標高10m前後の砂丘上を中心に展開する。本島では最古の赤連系土器を出土した赤連遺跡、宇宿下層系の土器を中心とするアギ小森田遺跡、総合グラウンド遺跡などがこれにあたる。一般に、奄美の先史遺跡は「前面に広い礁原を臨み、入江の口を扼しながらしかも清水に事欠かぬ砂丘の上にあり、背後に相当面積の湿原と、そのさらに背後に広い台地状地形が拡がっていることが多い」といわれるが、アギ小森田遺跡、中里遺跡などはほぼこの条件を備えており、他の遺跡もそれに近く、喜界においてもこのような地形が好まれたことがうかがえる。島の西部に遺跡が多いこともこれで説明されよう。

縄文晚期相当の宇宿上層式を中心とする時期になると、従来の立地をほぼ受け継ぐもの（伊実久貝塚、荒木小学校遺跡、アギ小森田遺跡など）と、砂丘を離れて段丘上に立地するもの（ハンタ遺跡、前田遺跡、上嘉鉄遺跡など）に分かれはじめる。後者はさらに標高150m近い高地にあるハンタ遺跡と、それ以外の標高25~40mの海岸砂丘から1段上の低位段丘にあるグループとに分けられる。段丘上に出現するこれらの遺跡は段丘端近くの湧水点をひかえた地点に立地するのが特徴であり、沖縄貝塚時代中期の諸遺跡や吐噶喇列島中之島のタチバナ遺跡などにも類似の要素が指摘できる。

宇宿上層式に後続する土器には、手広遺跡第5・6・9層出土のもの、宇宿港遺跡、サウチ遺跡、あやまる第2貝塚出土のもの（以上弥生時代相当）、さらに時期が下る兼久式土器（古墳時代相当か）などがあり、いずれも対岸の笠利半島方面で盛行しているにもかかわらず、喜界では兼久式土器がアギ小森田遺跡でわずかにみられる他は、この時期にかかるものは今のところ検出されていない。

再び遺物が多くなるのは、カムィヤキ窯系陶器が作られ、中国の江南系磁器、西九州産の滑石製石鍋が持ち込まれた13~15世紀を中心とする時期である。遺跡は、アギ小森田遺跡、上砂遺跡を除き、標高25~40mの第1段目段丘上の湧水点近くに立地す

るもの（前田遺跡、川堀遺跡、島中遺跡など）と、同じ段丘面でありながら、その突出部や切り立った崖に囲まれた地点に立地するもの（大城久遺跡、七城、上嘉鉄遺跡大供付近）に大きく分けられる。後者はいわゆる「グスク」に類するもので、それらしい地名・伝承が残っていることが多い。上嘉鉄遺跡に関しては、地名も伝承も残っていないが、地形などからみてこれらに含まれよう。前代と違ってほぼひとつの生活面にまとまった様相にありながら、遺跡の占地の性格が大きく2つに分けられる点に解明を要する問題点の1つがありそうである。

なお今回の分布調査の際、フイゴロないしそれに類するものが6地点（約10個）から発見され、そのうち5ヶ所には鉄滓もしくは鍛冶滓に似たものが点在していた。いずれも土器片、陶磁片の散在地と重複していたので採取して砂山寛之氏に分析と所見の開陳をお願いし、143頁以下に掲げさせていただいた。この地方の将来の遺跡分布調査や遺物の表面採集に際して、重要な参考資料になるはずである。（馬原・岡）

地図 番号	遺跡名及び遺物名	所 在 地	遺跡の種類	立 地	地	遺 様 及 び 遺 物	備 考	註
	(小野津)					石器(石斧)		
1	小野津小学校所蔵物 八幡山境内小祠遺物					カムイヤキ窯灰渣 石器(鐵石)		越前市吉氏遺跡採集 墓出土地点不明石跡點 16
	小野津一帯	(伊東久)					得本理一氏遺物採集所藏	12
2	下田の境周辺			砂丘上 台地先端	標高7~8 m	土器(宇宙上置式)・青磁・石器・獸骨・貝		
3	伊東久貝冢	貝冢			標高20m	土器(宇宙上置式)・青磁・石器・獸骨・貝	多和田真洋氏発見(1956年)・学会会場にて展示 14-17	
4	大丸八(ウガクシ)遺跡	(伊 彩) (ダスクリ)		段丘上	標高30~40m	カムイヤキ窯系陶片・青磁・滑石・ワイヤーの突破口・鐵錐(?)	美登太郎・中山清美氏発見 熊本大学保管 玉岡克己氏宅内蔵集	
5	伊 彩一帯	(坂 墓)		砂丘上 台地先端	標高10m 川	土器(圓底束腰形・深腹)・式中心・カムイヤキ窯系陶片・青磁・石器 (6枚)・圓底・テヌイシ・滑石・ワイヤーの突破口・貝殻・青磁・石片	英・木元五十二氏発見・遺物所藏 包含層確認	
6	アギ小森田遺跡	字7丁・小森田		砂丘上 丘陵先端	標高25m 川	土器(字名上置式)・カムイヤキ窯系陶片・青磁・安付(瓦形・滑石)	英・木元氏発見・遺物所藏	
7	前田 遺跡	字前田		段丘上	標高25m 潟水	土器・カムイヤキ窯系陶片・石器(凹凸)	英氏発見・遺物所藏	
8	上 砂 遺跡	字上砂						
	(中 焼)							
9	川 塚 遺跡	字川塚		段丘上 川	標高40m 潟水	土器(字名上置式)・カムイヤキ窯系陶片・青磁・安付(瓦形・滑石・板石)	英氏発見・遺物所藏	
10	中 焼	(先 内)		台地先端		陶磁器・石器(板石)	尚美貞子氏発見・遺物所藏	
11	先 内	(大朝ノ)		段丘上	標高20m	土器・陶磁器・石器(板石)	英氏発見・遺物所藏	
12	知無田・蛇間	字蛇田・蛇間						
	大朝戸一帯	(西 目)						
13	柏 毛	字柏毛		段丘上	標高40m 潟水	土器・カムイヤキ窯系陶片・青磁・白磁・石器(石斧・磨石)・埴生	英・木元氏・熊本大学発見・遺物所藏	
14	上 戸 間	字上戸間		段丘上	標高65~70m 潟水	土器・カムイヤキ窯系陶片	英氏発見・遺物所藏	

地区 番号	遺跡名及び遺物名	所 在 地	遺跡の種類	立 地	地 遺 様 及 び 遺 物	備 考	註
西 日 一 帯		宇半田 住居址	沿丘上	石器(石斧)	石器(石斧)	西元氏遺物採集; 中央公民館蔵	16
15 ハンタ遺跡	(島 中)	沿丘上	標高16m 渓水	土器・筆盒1式・字削上唇式・カムイヤキ陶片・石器	石器	新村博士・安田英作:「木戸川流域、遺物」(日本大学人文学研究叢書1966年); 向美賀子氏遺物採集; 所蔵	
16 島 中 遺跡	(島 中)	沿丘上	標高50m 渓水	カムイヤキ陶片・青磁・石器(石斧)・フイゴの割口	石器(石斧)	美・豊原レザ・氏遺物採集; 所蔵	
17 赤 連 遺跡	(赤 連)	砂丘上	標高9m 川	土器(赤連系)	土器(石斧・磨石)	九学会調査記録(1957年)	
18 武川郡保集遺物	(潟)	砂丘上	標高15m 渓水	土器・石器(石斧)・骨母丸	石器(石斧)	浜川氏遺物採集; 所蔵	
19 斎天神貝冢	貝 屑	砂丘上	標高15m 渓水	土器・石器(石斧・カガニイシ)・貝製品・骨管・貝	土器・石器(石斧)	斎天神下・斎天神(見1952年); 九学会調査記録(1957年); 六甲山会議会議録(1957年)	2・4・6-7 14・17
20 合成グラウンド遺跡	宇久大真	砂丘上	標高15~20m	土器(墓地I・II式中心)・土製品・貝	カムイヤキ陶系壺・石器(石斧・敲石)	吉井町教育委員会調査(1972年); 中央公民館蔵	14
中央公民館收藏物	(中 真)	貝 屑	砂丘上	標高20~30m	土器・石器(石斧)・貝	寺内田真厚(見1952年); 飯倉信蔵	
21 中里貝冢	(豊 木)	砂丘上	標高10m	人骨・石器(石斧)	砂丘上	寺内田真厚(見1952年); 飯倉信蔵	4・20
22 常水小学校遺跡	遺耕址	砂丘上	標高13m	石器(石斧)・貝	砂丘上	九学会調査記録(1957年)	
23 常木貝冢	貝 屑	丘陵先端	標高10m	人骨・土器(字削下唇式)・貝輪・玉類	砂丘上	斎藤新兵衛(見1951年); 斎藤氏遺物採集; 井本 大寺信重	4・6-7 14・17
24 常木桑道遺跡	(手久浦久)	砂丘上	標高10m	石器(石斧)	砂丘上	九学会調査記録(1957年)	4・14 5・14・17
25 手久浦久貝冢	(上桑鉄)	貝 屑	砂丘上	石器(石斧)	三宅常治(見1951年)		2・4・14
26 上桑鉄遺跡	宇佐山(77 (川 嶺))	砂丘上	標高30~40m 渓水	土器・筆盒1式・字削上唇式・カムイヤキ陶片・青磁・石器(石斧) 四石・鏡・アコニイシ	土器・筆盒・アコニイシ	美氏遺物採集; 上瀬谷小学校蔵 豊田末吉氏遺物採集	19
川 嶺 一 帯				カムイヤキ陶系壺・青磁・貝付	山口とうじ遺物採集; 四河原		12

項目 番号	遺物名及び遺物所在地名	所 在 地	遺物の種類	立 地	地 遷 様 及 び 亂 物	備 考	註
35	先山遺跡 (福原)	宇先山 (羽里)				黒兎島県教育委員会調査(1966年)	
	羽里一帯		カムイヤキ器系器			菅田かね氏遺物採集・所藏	
	(花畠治)		カムイヤキ器系陶片・青磁			美氏遺物採集・所藏	
	花良治 (轟 鈴)		陶磁器			美氏遺物採集・所藏	
27	長崎 (早町)	浪丘上 磨高100m 游水	カムイヤキ器系陶片・滑石製輪			前美食子氏遺物採集・所藏	
28	平家森	宇上牛田	台地上 磨高72m	地 面			1-17-18
29	早町中学校		砂丘上 磨高10m 游水	石器(石斧・燧石)	早町小学校遺物		
	早町小学校所藏遺物		石器(石斧)		野村茂輔・三井喜机氏遺物採集	16	
	塙道 (志口橋)		陶磁器			美氏遺物採集・所藏	
30	七城 宇幡ヶダ	グスク	台地生境 磨高30m 游水	土壘状遺構・カムイヤキ器系器			
31	川峰グスク	宇川峰		滑石製石器・削葉器・燒球形・燒球形・古今里		寺野氏遺物採集・所藏	
32	坂元	宇坂元		滑石製石器・カムイヤキ器系陶片・青磁・染付		寺野氏・遺物採集・所藏	
33	当 地			カムイヤキ器系器	竹下翠庭・竹下翠庭・竹下翠庭・所藏	3-18-12 .17	
34	坂 川	宇坂川2763	砂丘上 磨高15m 游水	玉環・滑石製石器	岡野公一氏見(1966年) 基町教育委員会遺物		
	志野橋小学校所藏遺物			土器・貝刀・貝	小林生昭遺物採集		
	(佐手久)						
	佐手久一帯			石器(石斧)		美島守氏・遺物採集・中央公民館蔵・坂木明氏・遺物採集 ・所藏・菅田昭治氏・遺物採集・生戸氏・小笠原氏・所藏	

遺跡一覧表 3

〔付 説〕

I. ハンタ遺跡出土土器の岩石学的分析

平野芳英

はじめに

土器の製作地推定の方法として、胎土分析は近年各地で行なわれている。その1つとして薄片にした土器の胎土を偏光顕微鏡で観察し、含有される鉱物、岩石の種類、量などをデータとして製作地を推定する岩石学的分析方法があり、この方法による分析結果も報告されている。^{註1} 今回、喜界島ハンタ遺跡出土の土器についてこの岩石学的方法による胎土分析を試みた。

試料

熊本大学考古学研究室から送付されてきた土器片は15点で、いずれも胴部片である。15点は以下のように5点ずつ3種に分類されていた。

1種：粗砂粒を含み重量感がある。橙色あるいは赤褐色。粘質の胎土を有する。雲母片らしきものを含む。

2種：細砂粒を含む。1種より硬度が劣る。橙色。雲母片らしきものを含む。

3種：比較的軽量。橙色。多孔質。雲母片らしきものを含む。

これらの土器片に87001から87015までの番号を与え、分析試料用の番号とした。

観察用ブレバラーートの作成

観察用ブレバラーートは、各土器片から2枚ずつ作成することをめざし、土器片を岩石用ブレバラーート(4.8×2.8cm)に載る大きさに切断し、カーボランダム#320・#500・#800、アランダム#1500・#2000を用いて鉄板、及びガラス板の上で研磨した。研磨する過程で、バルサムで煮込み、土器片中の岩石片などが脱落しないように配慮した。土器片の厚さは肉眼で測定できないが、岩石顕微鏡で岩石の観察に適する厚さといわれる0.03mm程度になるよう研磨したが、研磨途中の岩石片の脱落、削り過ぎなどがあり、今回の報告用に完成した観察用薄片は10枚、土器片7点分(1種2点、2種3点、3種2点)である。

観察方法

観察は、偏光顕微鏡を用いて、薄片中に含まれる粒径約0.05mmを超える鉱物岩石片を対象とした。今回の観察では、定性分析が主であり、定量分析については、今後方法を検討したい。

観察結果（図版13）

1種

87001 (KH 8号-1 No.104) 黒雲母片が多く、紫蘇輝石、普通輝石もみられる。カリ長石が含まれている。パーサイト構造をもつ長石もみられる。堆積岩の岩片が比較的多い。

87005 (KH 3号-1 No.153) 黒雲母片が多く、石英、斜長石などもみられる。カリ長石が比較的多い。堆積岩の岩片が比較的多い。

2種

87007 (KH 7号) 輝石類が含まれる。石英、斜長石が含まれる。種は不明であるが鉄鉱物片がみられる。堆積岩の岩片あり。

87008 (KH 3号-1 No.126) 普通輝石が含まれ、磁鐵鉱らしきものがみられる。堆積岩の岩片あり。

87009 (KH 3号-1 No.152) 石英、輝石類が含まれ、磁鐵鉱らしきものがみられる。堆積岩の岩片あり。

3種

87014 (KH 8号-3 No.181) 観察部分が少なく、岩石学的な傾向は把握できない。堆積岩の岩片が含まれる。

87015 (KH 3号-1 No.178) 石英、白雲母、輝石、斜長石などがみられる。白雲母片は他の鉱物と比較して小さい。堆積岩の岩片あり。

観察結果から

1種の2点には、自形性の強い黒雲母片やカリ長石が含まれていることが確認された。これらの鉱物は、花崗岩質岩石を起源とする鉱物と考えられる。

2種には、肉眼観察では白雲母片の微粒子が観察できるが、顕微鏡では、雲母片と思われる鉱物片が数多く認められるものの、その大きさから明確に白雲母と断定できるものはなかった。しかし、3種の87015の試料中に白雲母片を認めることができる。

また、2・3種には火山ガラスと思われるものが大量に含まれているようである。これらの火山ガラスは火山灰を含む火山性物質に含まれるものであり、このような物質を起源とするものである。

1種と2・3種に含まれる岩片や鉱物の量は1種の方が多く、肉眼観察によって行なわれた土器の分類傾向と一致するが、含有される鉱物や岩片の量の相違が土器製作技術とどのような関係にあるのか今後の課題としたい。さらに、1・2・3種問わず、含有鉱物の向きに方向性があるように観察された。こうした現象も土器の製作技術と何か関連があるのでないかと思われた。

なお、同じ試料についてクロスチェックの意味でX線回折分析を行ない、後日報告する予定である。

まとめ

1種の土器は花崗岩質岩石を起源とする鉱物を含む地帯で製作されたものであろう。2・3種の土器は、火山ガラスが含まれることから、火山灰を含む火山性物質からなる地帯で製作されたものであろう。また、白雲母片を含むことが確認され、肉眼観察の結果と一致する。

おわりに

今回の報告をするにあたり、岩石学的分析の機会をお作りいただき、またこれまで幾度となく叱咤激励していただいた熊本大学白木原和美先生、分析方法の手解きをしていただくとともに、今回の試料観察結果についても御指導をいただいた熊本大学教養部高橋俊正先生、研究法の導きや助言をしていただいた名古屋大学小谷凱宣先生、の諸先生方に厚く御礼を申し上げます。薄片の顕微鏡写真撮影については、島根県立松江教育センターの秦明徳氏、高尾彬氏にお世話になった。記して感謝の意を表します。また、甲元眞之先生はじめ文獻の複写など何かと協力をいただいた馬原和広氏他熊本大学考古学研究室の皆様に感謝致します。

註1 「自然科学の手法による遺跡、遺物の研究3—土器胎土分析の基礎的研究—」『千葉県文化財センター研究紀要8』 1984年

この紀要には、土器の胎土分析に関する研究史と方法及び文献とその概要がまとめられており恰好の手引き書である。

- 註 2 古城泰 千葉県企業庁跡千葉県文化財センター 「縄文土器の胎土分析」『千葉ニュータウン VI』 1978年
- 〃 「奥津貝塚出土土器の胎土分析」『古代探査—滝口宏先生古稀記念考古学論集』 1980年
- 〃 新東京国際空港公園跡千葉県文化財センター 「No.6 遺跡出土土器の岩石学的分析」『木の根』 1981年
- 清水芳裕 「縄文時代の集団領域について—土器の顕微鏡観察から」『考古学研究』第19巻 4号 1973年
- 〃 湖西線関係遺跡発掘調査団 「縄文土器の岩石学的分析—滋賀里遺跡出土の北陸・東北系土器について—」『湖西線関係遺跡調査報告書本文編』 1973年
- 〃 「岩石学的方法による土器の産地同定—伊豆諸島の縄文・弥生土器」『考古学と自然科学』第10号 1977年
- 〃 「胎土分析の方法とその効用」他『千葉県文化財センター研究紀要8』 1984年
- 照井一明 諸岩手県埋蔵文化財センター 「水沢市膳性遺跡出土の須恵器・土師器および粘土塊の岩石学的方法による産地同定」 1981年
- 〃 岩手県教育委員会 「土器胎土の岩石学的方法による分析結果」 1981年
- 西田泰民 「精製土器と粗製土器—胎土からの検討—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第3号 1984年
- などの研究報告がある。

II. ハンタ遺跡出土木炭の樹種と植生

大迫靖雄

I. 出土木炭の樹種鑑定

(1) No50 (1号遺構焼土中)

本出土木炭は完全に炭化しており、他の出土木炭のような組織中への土の浸入もなく、残存状態は、極めて良好であった。ただ、丸太状ではなく、木材の一部分を示していた。巨視的な観察から、木口面上に多くの割れがみられ、それが、放射組織に沿ったものであった。また、全体的な観察から、広葉樹であることは判明したが、年輪や道管などは判別できなかった。材質的には、かなり硬い材質であることが推定できた。

以下、微視的な特徴を示す。なお、微視的な観察は走査型電子顕微鏡(SEM)を用いて行なった。

木口面の特徴：図版14-1（本木炭は半径方向に細い割れが生じているため、木口面の大きな試片の作成はできなかった）から、管孔径は小さく、数は多いことが明らかである。また、管孔の分布状態をみると、径の大きさが半径方向でわずかに変化する傾向がみられる。さらに本図版から、放射組織の存在は明らかでなく、その幅は極めて小さいことが考えられる。

柾目面の特徴：図版14-2（前述したように、放射組織に沿った割れが多いため、柾目面の観察はなかなか困難であった）から、放射組織は幅の狭い平伏細胞を含むことが明らかである。本図版の中央部にストランド柔細胞がみられる。さらに、同じ中央部に大きな細胞がみられるが、これは結晶を含んでいたものと思われる。

板目面の特徴：図版14-3・4から、放射組織は、ほとんどが単列で、上・下縁の細胞が大きなことが示されている。このことから、本木炭の放射組織は異性放射組織であるといえる。道管は小さく、せん孔板は階段状であることが示されている。この他、木繊維と軸方向のストランド柔細胞がみられる。

以上のような特徴から、本樹種はイシュ (*Schima wallichii Korth. subsp. Nornhae Reinw. Bloemberger*) と鑑定される。

(2) No91 (7号遺構床面・ピット i)

大迫靖雄氏：熊本大学教育学部教授

本木炭は木材の形状は留めているが、老化が激しく、木炭の組織中に多くの土が浸入していた。そのため、巨視的な観察は、ほとんど不可能であった。また、SEM観察用の試験片の作成もかなり困難であった。以下に微視的観察について述べる。

木口面の特徴：図版14-5・6から、管孔がみられ、広葉樹であることを示している。管孔は、まんべんなく存在しており、散孔材であることが明らかである。また管孔の数はNo50より少なく、半径方向に2、3個が連なる放射複合管孔がみられる。放射組織は2～5列のものがみられる。さらに多くの柔細胞が半径方向にみられる。

極目面の特徴：図版15-7・8から放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性放射組織であることを示している。また多くの柔細胞が観察され、ところどころに大きな細胞となっている。この大きな細胞の中には、結晶が存在していたものと思われる。

板目面の特徴：図版15-9・10から、放射組織は1～4列のものが存在し、上・下緑の細胞は大きく、本樹種は異性放射組織を持つことを明らかにしている。また、多くの柔細胞が観察される。

以上の特徴から本樹種はアデク (*Syzygium buxifolium* Hook. et Arnott) と鑑定した。

(3) No40 (3号遺構覆土中)

本木炭も老化が激しく、巨視的な観察は不可能だったので、微視的な観察によって樹種の鑑定を行なった。この結果、本樹種はNo91と同一の特徴を示していた。したがって、本樹種もアデクと鑑定する。

表1 奄美大島林内における樹種の出現頻度 (%)^{註2}

高木層		中高木層		低木層	
樹種	頻度	樹種	頻度	樹種	頻度
スグジイ	48.3	クロバイ	12.5	イヌマキ	13.1
モチノキ	13.6	タイミンタチバナ	10.3	アデク	10.1
イジュ	12.9	アデク	9.7	サクラツツジ	10.1
イスノキ	10.9	スグジイ	7.4	タイミンタチバナ	10.0
クロバイ	6.1	コバンモチ	7.0	スグジイ	5.5

II. 出土樹種とハンタ遺跡周辺の植生

前項で鑑定した出土木炭の樹種、イジュ、アデクはともに南西諸島に植生する樹種である。ところで、南西諸島の樹木について述べた文献は少ない。特に、それらの樹木の材質に関する文献は拙稿以外ほとんどないといつても過言ではない。そこで、本報の樹種鑑定も拙稿に基づいて行なった。^{註1}

本項では、植生と使用樹種の関係について述べるが、上記したように、本遺跡から出土したイジュ、アデクの植生について記載した文献も少ない。ただ、農林水産省林業試験場九州支場が行なった調査報告がある。これらの文献を参考にしながら述べる。

まず、イジュは表1に示したように、南西諸島の高木階の中でスグサイに次いで多い樹種である。^{註2} 本樹種は高さ20m、直径50~100cmに達する。^{註1} また、材質的には、比重が大きく、硬い。^{註3} ただ、割れやすい性質をもっている。なお、南西諸島において、イジュは住宅の柱や根太に使用されている。

以上、イジュについて述べたが、本樹種は本遺跡の時代にも、南西諸島に多く植生していたことが考えられる。また、遺物は完全に炭化しており、いわゆる焼け残ったものとは若干異なっている。出土状態も、粘性の強い焼土の中にあったということから、本木炭は、特別な目的（例えば、燃料）として使用されたことも考えられる。

No91・40の樹種と鑑定したアデクは、表1から、スグサイの中に多く存在している中高木階に属する樹種とされている。^{註2-3} ただ、本樹種は中高木階に属するといえども、高さは10~15m、直径30cmに達し、樹形はほとんど通直であるといわれる。また、比重は高く、材質は堅硬、緻密で、しかも割れにくい。このような性質を利用して、現在でも、南西諸島では屋根材、柱、船材、器具材その他ツケの代用として使用されて^{註4}いる。

No91の場合、径が約8cmの柱として使用されていたと考えられている。前述した本樹種の形状、材質そして植生状況から判断して、本樹種は、この程度の柱として使用するのに最適な材料の一つであったのではないかと考えられる。

なお、アデクはNo91・40とも残存状態は悪い。これは、火災などによって焼失し、炭化が不十分な木材の炭化物にしばしばみられる現象と一致する。^{註5} 本遺構の出土状況の記載では残存状態は良好としてある。これは、出土した時点で、巨視的に木材と識

別できたということではないかと思われる。しかしながら、鑑定の項で述べたように、いずれも組織の中に多くの土が浸入しており、残存状態は良好でない。これらのことを考え合わせると、本遺物は焼失した柱であることが推定される。本遺跡からの出土樹種状況から、アテクは、ある程度、意識的に使用されたことが考えられる。

一般に遺跡で使用されていた樹種と周辺の森林植生との関係は深い。その点から考えると、南西諸島で最も多いスダジイが使用されていないことは不自然に思われる。しかしながら、表1は奄美大島本島の調査が主であり、ハンタ遺跡が存在した喜界島はスダジイの森林が存在しなかった可能性が大きい。したがって、ハンタ遺跡で使用されていたイジュ、アテクはこの地域に存在した樹種のうち、利用するのに適当なものであったことが推定される。

註1 初島住彦 沖縄生物教育研究会『琉球植物誌』 1971年

註2 大迫靖雄・東裕教・千代田省藏 「奄美地方の広葉樹に関する研究（I）」『熊本大学教育学部紀要 第31号 自然科学』 1982年

註3 林業試験場「南西諸島における広葉樹林の更新技術の開発」『昭和56年度国有林野事業特別会計技術開発試験成績報告書』 昭和57年

註4 林業科学技術振興所編『有用広葉樹の知識—育てかたと使いかた』 昭和60年

註5 例えば、大迫靖雄 熊本県教育委員会「下山西遺跡出土木炭について」「下山西遺跡」
(現在印刷中)

III. 喜界島における古代製鉄法の存在に関する一考察

砂山寛之

1. 緒言

我国における鉄の起源を知ることは考古学上重要であり、現在各地において古代の製鉄遺跡が発見され、考古学的研究が行なわれている。我国での鉄器文化は自然発生的に生じたものではなく、大陸より鉄器及び鉄の製造技術がもたらされたものと考えられている。しかしその伝播経路については、いまだ確定的な判断はなされていない。今回、九州南方に位置する喜界島において考古学的発掘調査が行なわれた。その際、調査隊の遺跡分布調査班が、鉄滓かも知れない、ということで採集された数点のものについて所見を求めて来られた。以下は、その試料についての分析結果と、それに関する考察を略述したものである。

2. 大城久遺跡における採集試料

本遺跡で採集された鉄滓状試料の1例を写真1に示した。
直径約8cm、厚さ約5cmの黒褐色を呈している塊状であり、
上部と思われる表面は半溶融していた。表面には、内部お
よび下部と思われる部分と同様に、ガスの発生によりでき
たと考えられる孔が多く、多孔質であった。この孔には、
炭及び灰が介在していた。手にとってみると重く鉛あるいは
鉄滓ではないかと思われた。また、試料の表面には直径2cm、厚さ0.5cmで、断面
が層状になっている鉄片が存在しており、これは鉄が完全に溶融していないことを示
している。この多孔質で黒褐色を呈している塊状の試料の破碎観察を行ない、さらに
乳鉢を用いて粉末にしたが鉄粒らしきものは見当らなかった。粉末試料はほぼ全部磁
性を有しており、マグнетイトを生成していると思われる。この粉末をEPMAを用い
て内部標準法により元素分析を行なった結果を、たら製鉄鉱滓古代の製鉄遺跡の鉄
滓及び鉄冶滓の代表的な分析例と共に表1に示した。今回採集された試料中の金属酸
化物量の値は、この分析値より算出した値である。古代製鉄法の代表であるたら製
鉄による鉄は、Si=0.07~0.3%、Mn=0.01~0.03%、P=0.02~0.07%、S=
0.004%と報告されており、これに比べて今回採集した試料の元素分析値はすべて大

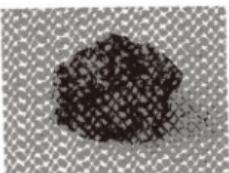


写真1
大城久遺跡における採集試料

表1 採集試料及び古代製鉄法による鉄滓の組成

(重量%)

	T·Fe	Si	Mn	Ti	S	P	CaO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	TiO ₂	MnO	FeO	Cu	Zn
大城久連鉄	48.6	5.3	0.17	0.18	0.10	0.44	4.69	11.3	0.68	0.30	0.22	62.5	/	/
伊勢一帯	0.27	11.8	0.07	0.18	0.71	0.18	3.51	25.3	16.6	0.30	0.09	0.36	1.6	1.0
島中連鉄	2.7	11.8	0.04	0.18	0.71	0.07	0.03	25.3	54.5	0.30	0.06	3.47	1.8	2.1
ハンタ遺跡周辺	0.27	11.8	0.07	0.07	0.71	0.44	4.39	25.3	54.0	0.18	0.09	0.35	1.1	1.2
たたら炉鉄滓	30~50						1.0 ~3.0	20~30	4~8	6~13	0.8 ~1.3			
他の製鐵鉄滓	45~57		0.47	0.3 ~3.0	0.05 ~0.20	0.04 ~0.06		5~15						
鍛冶津	40~55				0.1 ~0.2	0.8 ~1.5	0.5	5~10	3.7	0.3 ~1.0	0.14			

きく鉛ではないと判断した。古代製鉄法は、溶融温度が低く滓の成分は鉄分が多く、CaO=1~3%、SiO₂=8~30%、Al₂O₃は4~8%程度となっている。本試料におけるCaO量は多く、SiO₂・Al₂O₃・MnO量が少ない。Pについては、従来の報告例に比べて5倍程度多い。このような元素分析値のみから遺跡試料を判定することは困難であるので、古代の製鉄が行なわれる立地条件について検討した。

古代製鉄の原料は主として砂鉄を用い、還元剤及び燃料として木炭を使用した。樹種は松、栗などの堅木類であり、銑鉄40貫に対して木炭10俵というように多量の木炭を必要とした。そのために製鉄炉から10數km程度の近くにこれら堅木類の林があるのが常であった。また、得られる鉄量に比べて鉄の原料を多く必要としたので、鉄の原料が得られる付近に炉を築いた。今回調査した喜界島には、砂鉄などの鉄の原料及び堅木類の林がほとんど見当らず、多量に必要とするこれら製鉄用原料及び燃料を海上輸送することは、船の規模等を考慮すると考え難く、豪族がいた形跡もないことなどから、喜界島にて製鉄が行なわれる必然性はないと考えられる。地名にも製鉄に関係した言葉である「叩く」「踏む」「打つ」「フイゴの音」などを表現したものがない。以上のことから、これらの試料は精錬鉄滓である可能性はほとんどないと判断した。古墳時代末頃までの鉄器製造は、特定の工人集団によって一貫して生産していたが、江戸時代頃になると、たたら炉、大鍛冶場、小鍛冶場というように工程が分れるのが一般であった。この鍛冶場においてはフイゴを使用しており、各地で鍛治滓と同じ場所でフイゴロが出土している。本試料の成分と表1に示した鍛治滓の成分は、Al₂O₃を除いてほぼ同じ値を示している。古代製鉄法により得られる地金は結束し易い形を

したもの（鉄錠）にして運搬し、各地で鍛造することも行われていた。江戸時代以前の海上輸送法を考慮しても、少量の地金であれば容易に運搬出来たと思われる。喜界島で必要とされる農作物は自給自足でまかなっていたと想像され、農耕に用いる「鋤」「鍤」の刃先には少量の鉄で間に合ったと思われる。鍛治に用いられる木炭は広葉樹等の雜木でも可能であり、今回の調査でも多数のフィゴロが見つかっていることから、喜界島にて小規模な鍛冶が行われていた可能性もあり、本試料は鍛冶滓である可能性がある。

3. 伊砂一帯（玉岡克己氏宅内）における採集資料

当地区で採集された試料の1例を写真2に示した。表面は溶融したと思われるような滑らかな状態であった。表面と内部は褐色であり、大きな丸い空洞が多数存在し、溶融後固まる時にガスが大量に生じたものと推測できる。この空洞の中には炭が存在しており、断面は緑色、紫色、黒褐色を呈していた。前述の大城久遺跡で採集されたものに比べ軽い。EPMAによる分析結果を表1に示した。 $Fe=0.27\%$ 、 $Mn=0.09\%$ であり、従来の報告例に比べ少量であるので精錬鉄滓、鍛冶滓ではないと判断した。試料の色から銅分を含んでいるものと考えられたので、銅の分析を行なったところ、 $Cu=1.6\%$ であった。古代精錬鉄滓に類似したものに銅滓があると報告されている。本試料成分は、この銅滓成分 $Cu=1.4\%$ 、 $Ti=0.08\%$ と同程度の値であるが、 $Fe=0.27$ であり、報告されている銅滓成分の $Fe=48\%$ に比べ2桁も小さな値である。製錬技術が未熟な時代に、喜界島で鉄分が非常に少ない銅滓ができた理由は考え難い。そこで黄銅の成分である亜鉛を分析したところ、 $Zn=1.0\%$ となり、 $Cu=1.6\%$ に近い値を示した。

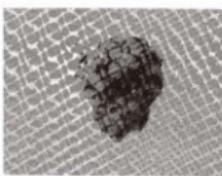


写真2
伊砂一帯における採集試料

4. 島中遺跡における採集試料

本試料は茶褐色であり、表面、内部共に大きな孔が存在していた。この孔のまわりには紫色をした部分があり、 $Cu=1.8\%$ 、 $Zn=2.1\%$ 、 $Fe=2.7\%$ であった。

5. ハンタ遺跡周辺における採集試料

本試料は灰色で非常に軽く多くの気泡状の孔が存在していた。紫色を呈した部分が存在しており、 $Cu=1.1\%$ 、 $Zn=1.2\%$ であった。

以上述べた伊砂一帯、島中遺跡、ハンタ遺跡にて採集した試料は鉄及び銅精錬用、鐵造用炉材の土であるかどうかは不明であるが、亜鉛分を含んでいることを考慮すると、黃洞が溶け込んだ可能性が考えられる。

今回の調査で採集された試料は表土から得られたものであり時代考証が困難である。そこで、これら試料が新しい時代に生成した可能性について検討を行なった。

喜界島においては、サトウキビの栽培、砂糖の生産が行なわれ、多量のサトウキビガラができる、これらを糖用燃料として活用していた。この際、地面に穴を掘り、パイゴロを設けて送風すれば、燃焼の中心部では鉄鉢物、黄銅製品が溶融する温度になっていることも考えられる。まして現在では、高い煙突を立てた近代的な燃焼炉を作動させている。今回採集された試料中には鉄粒らしきものは見当らず未溶解と思われる鉄片が存在していた。第二次世界大戦中及び戦後しばらくの間は、物資が窮乏し、金属製品は貴重な資源であった。日本本土から離れている喜界島でも同様であったと思われる。パイゴロを設ければ鉄鉢、黄銅を溶解する温度は得られやすく、金属製品の鋳直し、補修も行なわれたであろう。今回の調査において特に注目することとして、大城久遺跡で採集された試料内部から、白い石綿と思われるものが採取された。顕微鏡写真を写真3に示した。表面は石綿をプレスしたような布状であり、断面は石綿状の繊維である。このような石綿は現在いたるところで使用されており、また、江戸時代以前のものとは考え難い。したがってこれは現代のものと考える方が妥当性があろう。元素分析のみでなく、今後詳細に調査する必要があると考えられる。

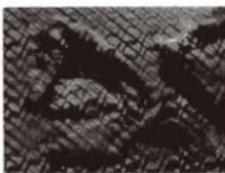


写真3 石綿顕微鏡写真

以上検討したように考古学的立場で鉄滓状試料を採集する場合には、出土層、炉址、他の出土品の年代を確認するか、今回のように表土から採集した試料については、環境の状況を考慮し、その試料が存在している必然性を検討する必要があろう。

6.まとめ

1. 大城久遺跡で採集された塊状試料は、鉄精錬滓ではないと思われる。
2. これは従来報告されている鍛冶滓の成分と同程度の成分を有しており、鍛冶滓の可能性がある。

3. 伊砂一帯、島中遺跡、ハンタ遺跡周辺で採集された塊状試料には、黄銅が溶解した可能性がある。
4. 現代使用されている石綿と同じ性状をしたもののが1の試料内部に存在していた。
5. したがって今回の調査で採集した試料は、現代の状況の下で出来た可能性が強い。
なお、この稿を草するについて、熊本大学工学部応用化学科工業材料化学 伊原博
隆講師の御援助を得たことを付言しておく。

参考文献

- (1) 日本鉄鋼協会『たらら製鉄の復元とその鉄について』 1971年
- (2) 堺田康郎『鉄の考古学』 雄山閣 1973年
- (3) 山本博『古代の製鉄』 学生社 1975年

図版 1



上：アギ小森田遺跡近景（北より） 下：前田遺跡近景（西より）

図版2



上：川堀遺跡近景（北より） 下：島中遺跡近景（南西より）



上：上嘉鉄遺跡近景 マッチチャ付近（北東より）

下：同 大供付近（北より）



上： 湾天神貝塚近景（南より）

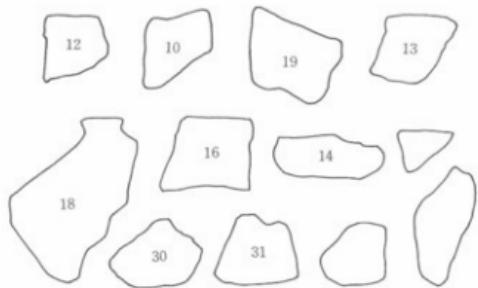
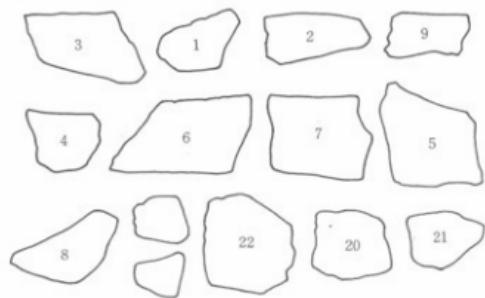
下： 総合グラウンド遺跡近景（北より）



上：中里貝塚近景（北東より） 下：同 遺物包含層

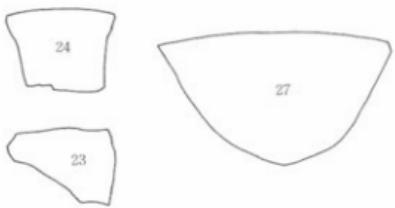
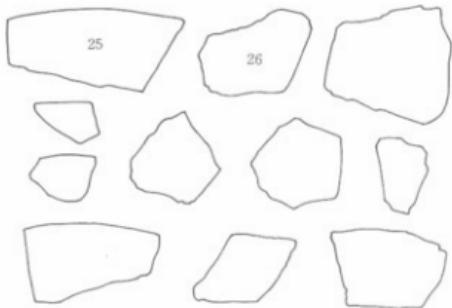


上：荒木貝塚近景（南より） 下：同 貝層



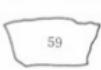
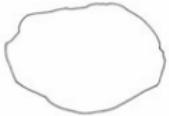
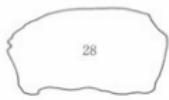


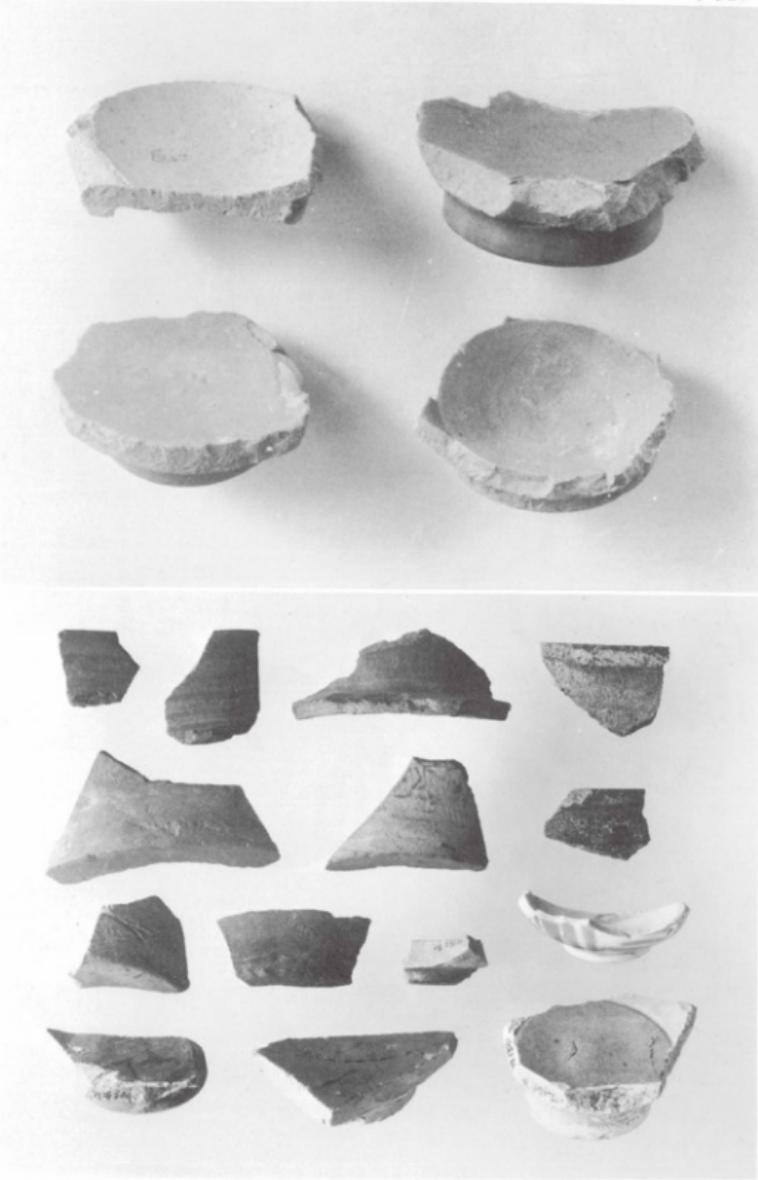
上：アギ小森田遺跡採集土器 下：同



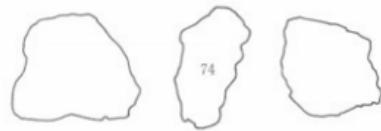
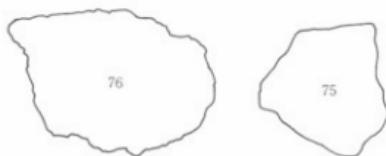
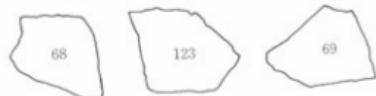


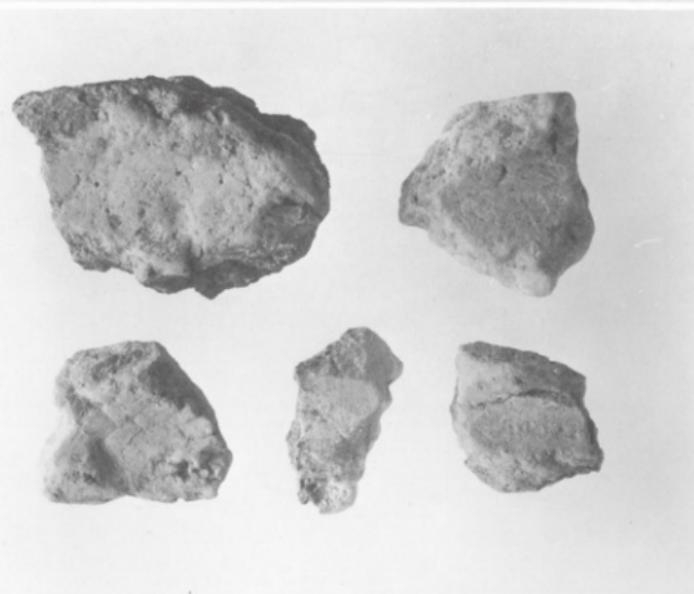
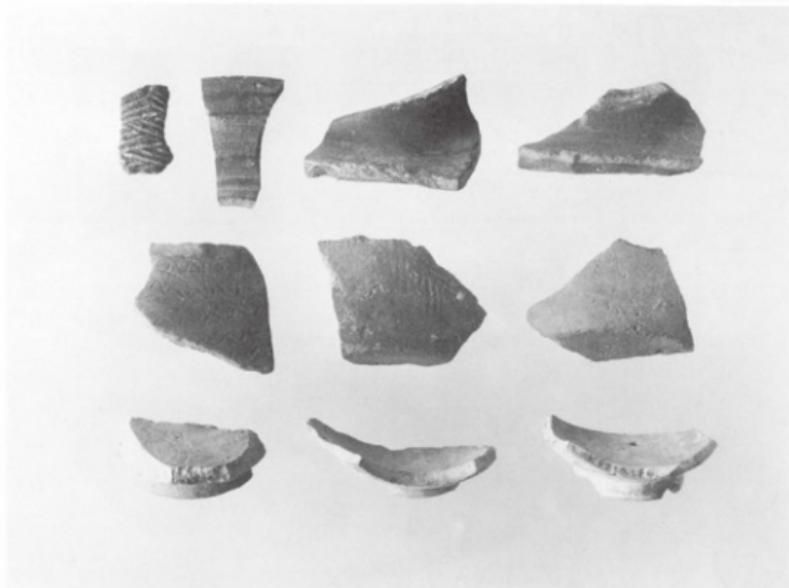
上：アギ小森田遺跡探集陶器 下：同 磁器





上：アギ小森田遺跡採集磁器 下：川堀遺跡採集陶磁器





上：上砂・島中遺跡採集土器・陶磁器 下：島中遺跡採集フイゴの羽口

93 94 92 '84 83

91

98

79

106

83

78

87

107

103

95

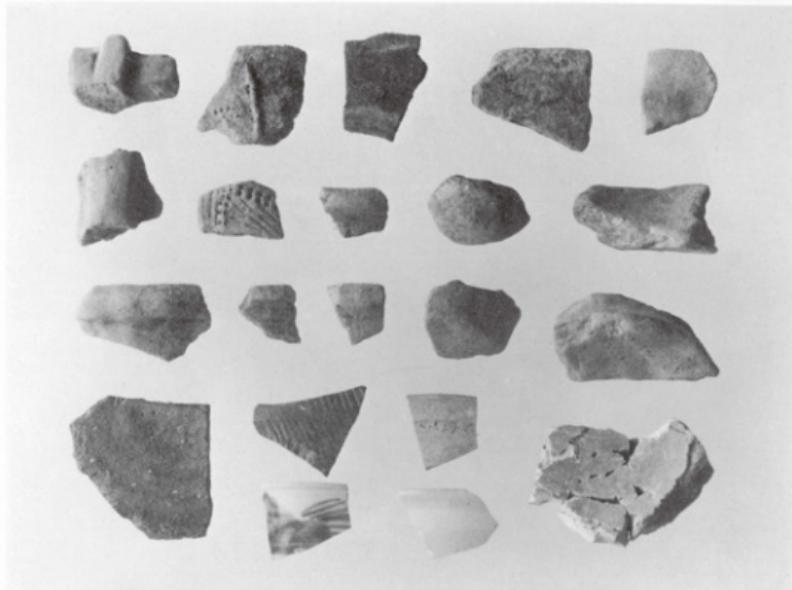
96

83



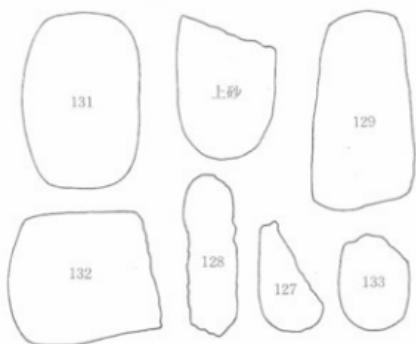
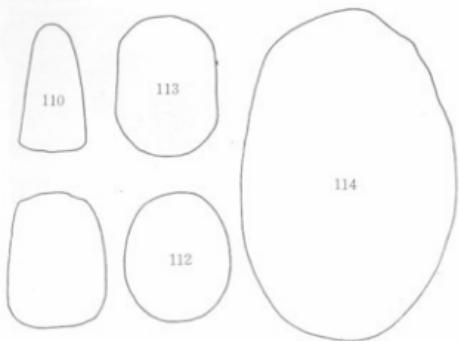
大城久道跡

下田の池周辺



上：上高鐵遺跡採集土器・陶磁器 下：各遺跡採集遺物

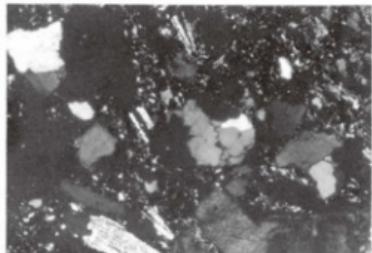
Figures



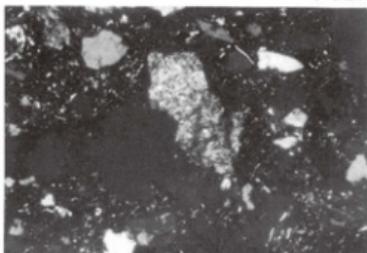


上：上嘉鐵遺跡採集石器 下：各遺跡採集石器

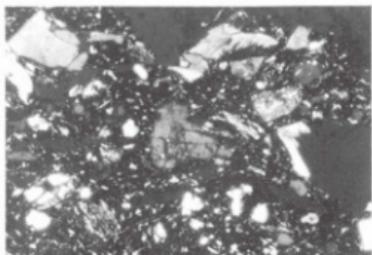
図版13



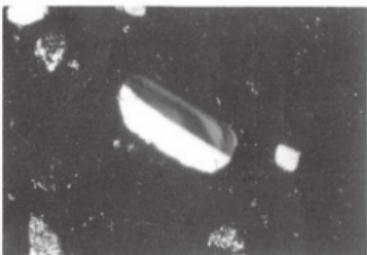
87001(1種) 石英(左)、堆積岩(中)、黒雲母
(上・下) 直交ニコル70倍



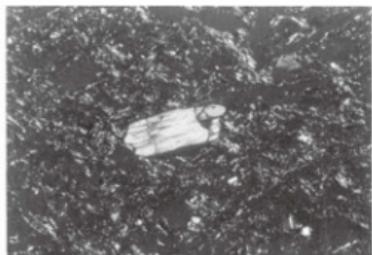
87001(1種) カリ長石(中)、石英(左) 直交
ニコル70倍



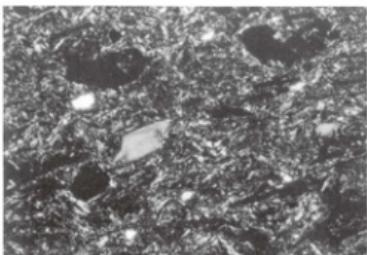
87005(1種) 斜長石(中)、黒雲母片(右中)、
石英(左上)など、多くの鉱物片、岩石片が含まれ、
b・c群の含有状況とは大きく異なる。
直交ニコル70倍



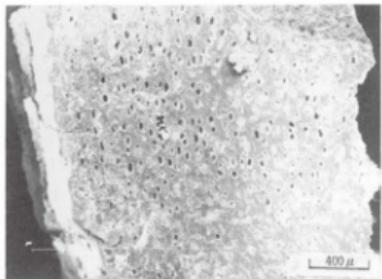
87009(2種) 斜長石(中)、堆積岩(下右、下左)
含まれる鉱物片、岩石片がa群より少ない。
直交ニコル70倍



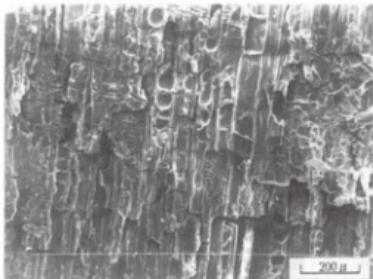
87015(3種) 輝石。含まれる鉱物片、岩石片が
少ない。直交ニコル70倍



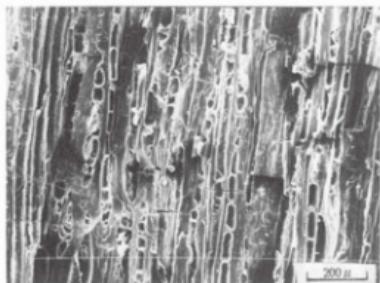
87015(3種) 石英。周囲にも石英片らしきもの
があるが、鉱物片・岩石片は少なく、大きさも、
中央の石英片が大きいものに属する。直交ニコ
ル70倍



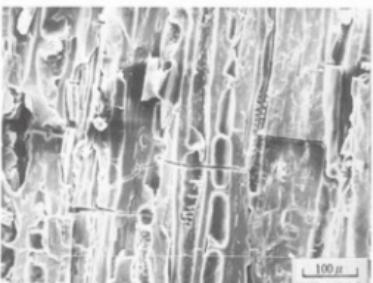
1. 遺物No.50の木口面



2. 遺物No.50の杼目面



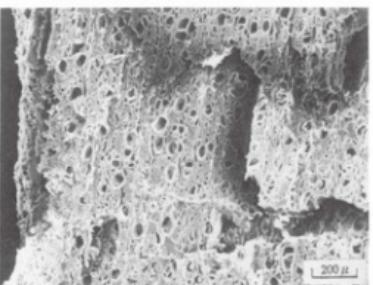
3. 遺物No.50の板目面



4. 遺物No.50の板目面



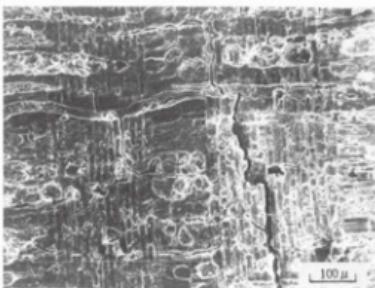
5. 遺物No.91の木口面



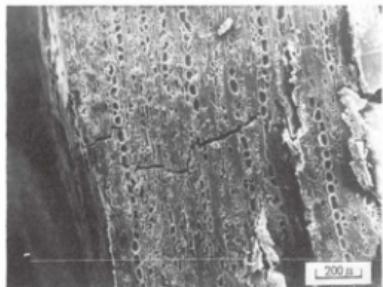
6. 遺物No.91の木口面



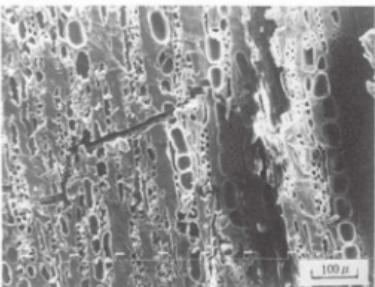
7. 遺物No.91の径目面



8. 遺物No.91の径目面



9. 遺物No.91の板目面



10. 遺物No.91の板目面

ハンタ遺跡

喜界町文化財調査報告

昭和62年3月25日

編集
発行

喜界町教育委員会

〒881-62 鹿児島県大島郡喜界町湾61番地
電話 (0997) 65-1111

印刷

コロニ一印刷
〒860 熊本市二本木3丁目12-37
電話 (096) 353-1291